

平成20年度 調査研究統一テーマ
「生きる力」をはぐくむ学校教育の創造

教科研修班班内共同研究

児童生徒の可能性を引き出し、学力の向上を図る取り組み

—体験・活用・参加型の授業づくりを通して—



平成21年2月
沖縄県立総合教育センター

目 次

はじめに	1
テーマ設定の理由	1
研究目標	1
研究の方針	1
研究計画	2
研究内容	3
1 確かな学力について	
2 「言葉と体験」について	
3 体験・活用・参加型の授業について	
実践事例	
1 国語（高校）	7
2 公民（高校）	19
3 数学（高校）	31
4 保健体育（高校）	41
5 英語（高校）	48
6 小学校外国語活動	67
おわりに（成果と課題）	81

児童生徒の可能性を引き出し、学力の向上を図る取り組み — 体験・活用・参加型の授業づくりを通して —

はじめに

教科研修班では当センターの調査研究統一テーマである『『生きる力』をはぐくむ学校教育の創造』を受け、コンセプトを「学校現場における授業実践の支援」として据え、「児童生徒の可能性を引き出し、学力の向上を図る取り組み」をテーマに設定した。「生きる力」を育むための「確かな学力」を育成する授業のあり方として、児童生徒の可能性を引き出す授業の工夫を研究のテーマとして進めた。具体的には習得した知識・技能のより確かな定着と、思考力・判断力・表現力等の育成を目指し、「言葉と体験」をキーワードにした「体験・活用・参加型の授業づくり」を実践的に研究した。これらを「すぐに役立つ実践事例」として学校現場に提案していきたい。

テーマ設定の理由

今日の国際化・情報化の進展や急激に変化する社会において、児童生徒の目的意識の弱さや社会生活への意欲の低下、そして自分自身のよりよい生き方を構築できないなどの課題が顕在化し「生きる力」の育成が学校教育の大きな課題となっている。また、2003年のPISA調査の結果、日本の子ども達の読解力（書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力）において、2000年の8位から14位へと後退し、読んだことについて自分の意見を表現する能力が課題として指摘された。本県の児童生徒においても平成19年度及び20年度に実施された「全国学力・学習状況調査」の結果から、知識・技能の習得や知識・技能を活用する能力、さらに問題を解いていく粘り強さや学ぶ意欲などの点において課題が指摘された。これら「確かな学力」に係る課題は、「生きる力」を育成する上でも大きな課題となるものと考えられる。

「確かな学力」を育成し、子ども達の「生きる力」に繋げるためには、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とそれを活用する能力を身につけさせる学習の過程において、学んだことが子どもたちの生活や将来の生きる力に繋がるような手立ての工夫が求められる。また、子ども達を主体とした体験・活用・参加型の授業の実践の手立てとして子ども達の個性や興味・関心を尊重し、子どもの自己発見を促すなど、子ども達の可能性を引き出す授業が重要となる。

そこで今年度は、生きる力を構成する要素のうち「確かな学力」の育成を重点とした、「児童生徒の可能性を引き出し、学力の向上を図る取り組み」をテーマとした。そしてそのあり方として「体験・活用・参加型の授業づくり」について実践的研究を実施し、学校現場の先生方に授業改善の方策として「すぐに役立つ授業実践事例」として提案していきたいと考えている。

研究目標

教科において、児童生徒の可能性を引き出し学力の向上につながる体験・活用・参加型の具体的な効果的な授業実践事例を提案する。

研究の方針

- ・高校国語、高校公民、高校数学、高校保健体育、高校英語、小学校外国語活動の6つの教科 において実践研究をする。
- ・実践研究については研究協力員を依頼し、検証授業を実施する。
- ・班内共同研究会議を定期的に開催する（毎週月曜日10：30～11：30）。

研究計画

月	日	回	班 内 共 同 研 究 会 議	状況(H21.1.26 現在)
4	7	1	研究計画案・テーマについて(研究の方向性)・会議記録係	研究計画決定、テーマ検討
	14	2	研究計画決定・テーマの検討	テーマ再検討
	21	3	テーマの決定・協力員地区報告	テーマ再検討、協力員地区報告
	28	4	テーマ設定理由の検討・協力員氏名報告	テーマの決定
5	7	5	テーマ設定理由の検討	各教科テーマの検討へ
	12	6	テーマ設定理由決定・各教科理論研究・調査研究	テーマ設定理由の検討
	19	7	各教科理論研究・調査研究	テーマ設定理由の再検討
	21	8	研究協力員委嘱式・第一回研究協力員会	研究協力員との打ち合わせ
	26	9	各教科理論研究・調査研究	テーマ設定理由の再検討
6	2	10	各教科理論研究・調査研究	研究経過中間報告内容確認
	9	11	研究経過中間報告Ⅰ①実践研究・調査研究	研究経過中間報告Ⅰ(3教科)
	16	12	〃 ② 〃	研究経過中間報告Ⅰ(2教科)
	24	13	〃 ③ 〃	研究経過中間報告Ⅰ報告書検討
	30	14	研究経過中間報告Ⅱ①実践研究・調査研究	研究経過中間報告Ⅱ(2教科)
7	7	15	〃 ② 〃	研究経過中間報告Ⅱ(2教科)
	14	16	〃 ③ 〃	研究経過中間報告Ⅱ(2教科)
8			夏期研修期間、資料収集	
9	1	17	中間報告内容検討①実践研究・調査研究 ・検証授業実践へ	各教科研究状況把握
	8	18	〃 ② 〃	中間報告内容検討
	16	19	〃 ③ 〃	中間報告内容検討
	22	20	研究経過中間報告原稿提出	中間報告内容検討
	2	2	中間報告内容検討	中間報告内容検討
	5	1		
	29	22	中間報告資料作成	中間報告内容検討
10	6	23	中間報告方法検討(パワーポイント・スライド確認)	中間報告内容検討
	10		調査研究事業中間報告会	調査研究中間報告
	14	24	中間報告の反省とまとめ・課題検討	中間報告会の反省
11	4	25	報告書のまとめ方(班全体)	報告書のまとめ方検討
	10	26	報告書のまとめ方(班全体・項立てについて)	報告書項立て検討
	18	27	理論研究について(割り振り等)	理論研究割り振り
	25		各教科原稿作成	各教科原稿作成
12	1		各教科原稿作成	各教科原稿作成
	8		〃	各教科原稿作成
	15		〃	各教科原稿作成
	22	28	理論研究、日程、原稿共通部分の作成について	理論研究検討
1	5	29	原稿検討会①、理論研究の検討	原稿検討会(2教科)
	13	30	〃 ②、理論研究の検討	原稿検討会(2教科)
	19	31	〃 ③、理論研究の検討	原稿検討会(2教科)
	2	3	理論研究の検討、共通内容項の検討	理論研究、共通内要項の検討
	0	2		
2	26	38	本発表会内容検討	本発表会内容検討
	2	34	研究発表確認(パワーポイント・スライド確認)	
	9	35	研究発表最終確認	
	13	36	県立総合教育センター研究発表会	
	16	37	発表会反省とまとめ	
3	23	38	研究成果登録作業の確認	
	2	39	次年度テーマ検討	
	9	40		
	16	41		
	23	42		

研究内容

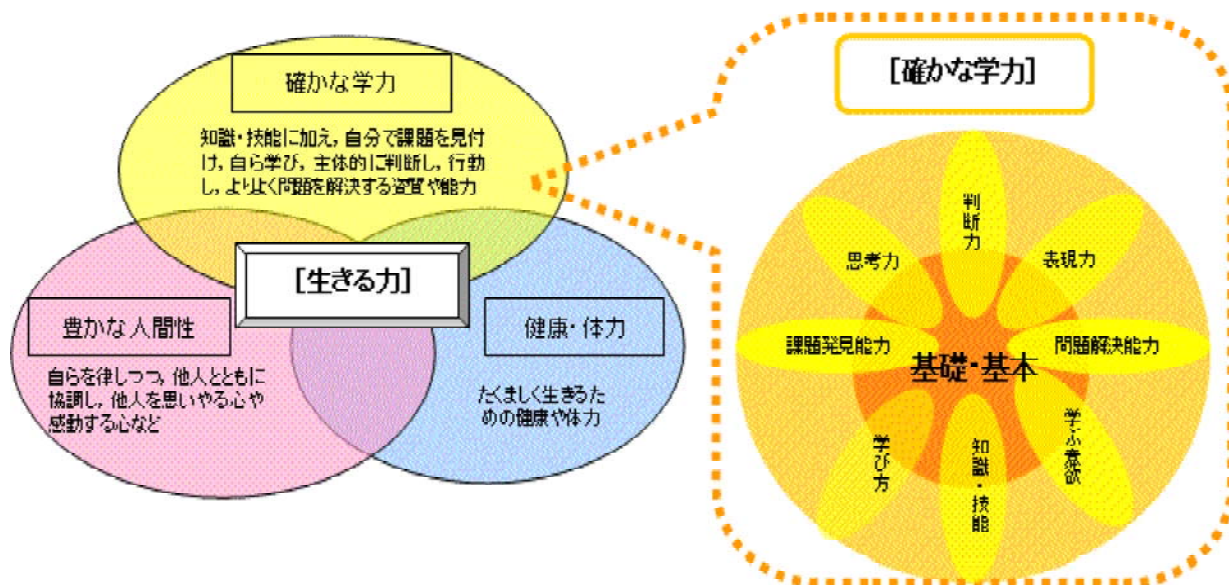
1 確かな学力について

(1) 確かな学力とは

文科省は2003年にこれからの変化の激しい「知識基盤社会」に必要とされる「生きる力」とその知の側面である「確かな学力」について次のように述べられている。(平成15年10月中教審答申)

変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちには、「生きる力」、「確かな学力」を育むことが必要である。「生きる力」とは変化の激しいこれからの社会を生きる子どもたちに身に付けさせたい「確かな学力」、「豊かな人間性」「健康と体力」の3つの要素からなる力である。

「確かな学力」とは知識や技能はもちろんのこと、これに加え、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等まで含めたものである。



知識や技能に加えて、学ぶ意欲や自分で課題を見付け、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力等まで含めたものである。新しい学習指導要領においても、「生きる力」の理念は継承されており、「生きる力」の重要な要素である「確かな学力」の育成は、学校の主要な取り組みとして重視されている。

(2) 確かな学力の育成のために

知識基盤社会においては、そのベースとなる知識・技能とそれを活用する能力が求められることから、学校においては、基礎的・基本的な知識・技能の習得とこれらを活用する思考力・判断力・表現力等をいわば車の両輪として相互に関連させながら伸ばしていくことが求められる。

そのためには、下記の点をおさえて授業の工夫改善を図ることで「確かな学力」の育成に繋げることができるものとする。

① 確かな学力の育成において重要となる基礎的・基本的な知識・技能とは

現行の学習指導要領の改訂の際にも「確かな学力」の育成に向けて、各教科の知識・技能を厳選し、基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得とともに、思考力・判断力・表現力等の育成を重視する改訂となっている。このような基本的な考え方に加え、今回の改訂では「社会において自立的に生きる基礎を培う」ことを規定したことや、理数教育を中心に教育課程の国際的な通用性が一層問われている状況を踏まえ系統性に留意しながら、平成20年1月の中教審答申には、次のように述べられている。

- ・社会の変化や科学技術の進展等に伴い、社会的な自律等の観点から子どもたちに指導することが必要な知識・技能。
- ・確実な習得を図る上で、学校や学年間等であえて反復（スパイラル）することが効果的な知識・技能等に限って内容事項等として加えることが適当である。

また、基礎的・基本的な知識・技能を押さえるために作成が予定されている「重点指導事例」で提示する基礎的・基本的な知識・技能についての規定も次のように述べられている。

- ・社会において自立的に生きる基盤として 実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能
- ・義務教育及びそれ以降の様々な専門分野の学習を深め、高度化していく上で共通の基盤として習得しておくことが望ましい知識・技能

このことから学校においては、将来の生活に生かせる知識・技能を児童生徒に習得させる視点を意識して一層の充実を図る必要がある。

② 確かな学力の育成において重要となる思考力・判断力・表現力等とは

平成20年1月の中教審答申においては、「基礎的・基本的な知識・技能と思考力、判断力、表現力等の関係については、前者を『活用』して課題を解決する際に必要な力が、思考力や判断力・表現力等」と述べられている。

つまり、思考力・判断力・表現力等を育成する授業を実施するにあたっては、闇雲に考えさせるのではなく、習得した知識や既習の知識をもとに思考する場面や活用する場面の設定を意図的に行う必要がある。「活用する力＝思考力・判断力・表現力等」を育成するには、特別なことをするのではなく、体験・活用・参加型の授業づくりを通して、児童生徒の可能性を引き出し、学力の向上を図る取り組みが重要である。

③ 基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の関係について

平成20年1月の中教審答申においては、「基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等とは『活用』を通じて不可分の関係にあるととらえることが大切である。」と述べられている。

つまり基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成は、別々に進められるものではない。基礎的・基本的な知識・技能の習得では、「活用する活動」を通して、「構造化した知識」にしていくことが重要であり、また知識と知識をつなげる「活用する活動」は、問題解決的、課題解決的であり、児童生徒に思考力・判断力・表現力等のどれか、またはすべてを要求するものでなければならない。

このような「活用する活動」により、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力・表現力等の育成は図られるのである。

なお、「習得・活用・探究」の学習の流れについて、以下のように4点示されている。

- ・教科では、基礎的・基本的な知識・技能を「習得」し、観察・実験をし、その結果をもとにレポートを作成する、文章や資料を読んだ上で、知識や経験に照らして自分の考えをまとめて論述するといったそれぞれの教科の知識・技能を「活用」する学習活動を行い、それを総合的な学習の時間等における教科等を横断した問題解決的な学習や「探究」活動へと発展させる。
- ・これらの学習活動は相互に関連し合っており、截然と分類されるものではない。
- ・各教科での「習得」や「活用」、総合的な学習の時間を中心とした「探究」は決して一つの方で進むだけではない(「習得→活用→探究」の一方通行ではない)。
- ・これらの学習の基盤となるのは言語に関する能力であり、そのために各教科等で言語活動を充実する必要がある。(文部科学省web公表質疑応答集)

学習指導要領上は、「習得・活用・探究」という学習の流れは、知識・技能の習得を図る学習活動、知識・技能の活用を図る学習活動、探究活動と、あくまでも学習活動としてとらえている。

教科指導においては、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成を押さえた授業の改善が必要である。

2 「言葉と体験」について

(1) 「確かな学力」を育成する「言語活動の充実」について

今回の学習指導要領の改訂において「言語活動の充実」があげられており、全教科・領域等で

展開することを重要な改善事項とし、「言葉の力」が主要な改善の柱の一つになっている。言語は知的活動（思考や倫理）やコミュニケーション、感性・情緒の基盤であり、生徒の思考力・判断力・表現力等を育むためにはレポートの作成や論述といった知識・技能を活用する学習活動を各教科で行い、言語の能力を高める必要があるとしている。

つまり、「確かな学力」を育成するためには、国語科だけではなく、教育活動全体を通じて言語活動の充実を図り、言語の能力（数式などを含む広い意味での言語）を高めることを視野においた教育活動の展開を図る必要があるのである。

なお、学習指導要領等の改善について答申では、知識・技能など思考力・判断力・表現力等を育成するための学習活動の具体例として以下の6点をあげ、この活動を各教科において行うことが思考力・判断力・表現力等に育成にとって不可欠であるとしている。

①体験から感じ取ったことを表現する。②事実を正確に理解し伝達する。③概念・法則、意図などを解釈し、説明したり活用したりする。④情報を分析・評価し、論述する。⑤課題について、構想を立て実践し、評価・改善する。⑥互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる。

(2) 「言語活動」としての「言葉と体験」の重要性について

学習指導要領では、これまでも言葉を重視し、学校教育全体を通して、言語に関する関心や理解を深め、言語環境を整え、児童・生徒の言語活動が適正に行われることを示している。また、体験の目的を、子どもに自ら学ぶ意欲や主体的に学ぶ態度を身につけさせるとともに、論理的な思考力や判断力・表現力などの能力を育成し、学ぶことのたのしさや成就感を体得させることとしている。今回の学習指導要領の改訂に関する中央教育審議会の審議においても、「言葉や体験などの学習や生活の基盤づくりの重視」をあげ、「言葉と体験」の重要性についてそれぞれ以下のように示している。

言葉は、「確かな学力」を形成するための基盤であり、生活にも不可欠である。言葉は、他者を理解し、自分を理解し、社会と対話するための手段であり、家庭、友達、学校、社会と子どもをつなぐ役割を担っている。

言葉は、思考力や感受性を支え、知的活動、感性、情緒、コミュニケーション能力の基盤となる。国語力の育成は、すべての教育活動を通じて重視することが求められている。

体験は、体を育て、心を育てる源である。子どもには、生活の根本にある食を見直し、その意義を知るための「食育」から始まり、自然や社会に接し、生きること、働くことの尊さを実感する機会を持たせることが重要である。生活や学習のよい習慣を作り、気力や体力を養い、知的な好奇心を育てること、社会の第一線で活躍する人々の技や生き方に触れたり、自分なりの目標に挑戦したりする体験を重ねることは、子どもの成長にとって貴重な経験になることが指摘されている。

（平成18年12月13日 中央教育審議会 教育課程部会 審議経過報告より）

こうした「言語活動」重視の背景にあるのは、科学技術の発展、高度情報化、国際化の進展、価値観の多様化等、言語情報の量的拡大と質的变化が進み、言語力の育成に対する社会的な要請が高まっていること。また、OECDの国際学力調査（PISA）における読解力が低下していることや、いじめやニート、引きこもりなど、人間関係に関わる問題が喫緊の課題としてあり、学習の面や生活の面での言語力の必要性が高まっていることなどがあげられる。

「確かな学力」を育成するための「言語活動の充実」を図るためには、「言葉と体験」を有機的に（効果的に）関連させた言語活動を繰り返し積極的に授業の中に取り入れることであると考えられる。例えば、言葉を言葉としてしっかり身に付けさせるためには、言葉の定義づけを明確にし、言葉で学んだことを体験を通して納得・実感させる。また、体験したことを言葉で整理して表現する。効果的に表現するための技能を通し、伝え合うことでより深く理解させ、実感させる。つまり、体験の言語化を図り、言葉としての定着を図るのである。

このように、学校教育全体で各教科等を横断して、言葉と体験を意識的につなぐ視点を持ち、計画的な「言葉と体験」の学習活動を展開することで「確かな学力」の定着は図られると考える。

3 体験・活用・参加型の授業について

社会の急速な変化に自ら対応できる生徒の育成を目指した「学力観」の転換が求められており、

指導法においては知識獲得のみではなく、確かな学力（生きて働く力）をいかに育成するかということが重視されてきている。思考力・判断力・表現力等の育成のためには、体験・活用・参加型の授業を展開することが有益であるといえる。体験・活用・参加型の学習を通して、与えられた課題や自ら設定した課題に取り組むことにより、習得した知識や技能、あるいは既習の知識をより活性化することができる。その中で、生徒は、達成感や自己有用感をあじわい、学習意欲の向上や思考力・判断力・表現力等の確かな学力の育成へとつながる（図 1）。教師からの一方向のみの偏った授業形式から脱却し、このような授業を行うことで、生徒の自ら学ぶ態度を育成することができ、主体的に学ぶ生徒の育成を図ることが期待される。

参加型学習の特徴を森実(1995)は以下のように5点挙げている。

- ① 学ぶ内容よりも学ぶ過程
自分自身が参加することによって学習が大きく変わるとい
うことである。このことは、受け身の学習と大きく異なり、
自分自身の存在感を自分で感じることになる。
- ② 頭と心と身体を総動員
話を聞いて頭で考えるだけでなくあらゆる感覚を総動員して、行動を通して学ぶ。「アクティ
ビティ」などによる新しい体験や生活経験に依拠して学習が進められる。
- ③ 双方向コミュニケーション
双方向のコミュニケーションを図ることによって、対等で平等な関係作りをすすめようとする。
「参加型学習」では、これまでの「教える人ー学ぶ人」という固定的な関係を組み換えたり、日
常的な権力関係から抜け出たりすることを可能とする。
- ④ いのちを引き出す人
教師の役割も「ファシリテーター (facilitator)」という役割に換える必要がある。それは、一
方的に押しつけるのではなく、学習者の内面からいろいろなものを引き出し、それがお互いに交
流され、新しいものが生まれるように学習者を盛り上げていく役割である。
- ⑤ かたい雰囲気よりも柔らかいほぐれた受容的な雰囲気の方がよい学習が成立しやすい。

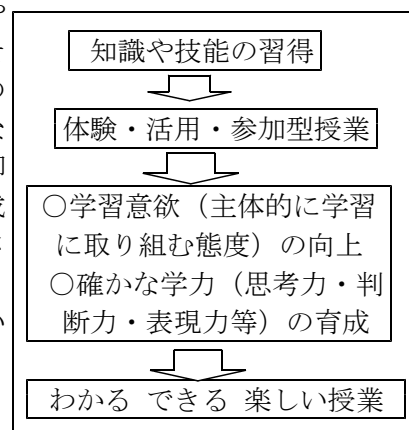


図 1

読解表現力を育成する現代文の授業の工夫 — 評論単元にプレゼンテーション活動を取り入れて —

*

上 地 廣 子

**

島 田 聖 子

I テーマ設定の理由

PISA調査での読解力の定義は「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」としている。しかし、PISA A2003調査の結果、日本の子どもたちは自由記述式問題の無答率が高かった。このことから、テキストを読んで考えたことを自分の知識や経験と結びつけて表現する力が不十分な生徒が多いことが指摘されている。そこで、その改善の具体策として示されたのが「資料から読み取ったことを筋道立てて表現する意欲や能力の育成」である。また、現行の高等学校学習指導要領国語編では「自分の考えを持ち、論理的に意見を述べる能力、目的や場面などに応じて適切に表現する能力、目的に応じて的確に読みとる能力や読書に親しむ態度を育てること」を重視し、読みとる能力だけでなく、読んだことをもとにして進んで表現したり読書に親しんだりする態度の育成も求められている。さらに、本県では『『確かな学力の向上』支援プラン』において、「これから求められる学力と授業」の中で、児童生徒が課題を解決する授業として、「一人一人の生徒が自分の考えを持てる授業」をあげている。

以上のことを鑑みると、高等学校国語科の授業において求められている生徒に育成する力の一つに「読解表現力」があると言える。「読解表現力」とは「読解力」と「表現力」を別々のものとしてとらえるのではなく、「読解力」と「表現力」は一体化したものであるとする考え方である。つまり、読みとったことを自分の言葉で表現してはじめて理解したことになるという考え方である。

そこで本研究では、「読解表現力」を育成する手立てとして現代文の評論単元において、体験・活用・参加型の授業を試みる。具体的には文章の内容や表現、筆者の主張についての自分の考えや意見、解釈のプレゼンテーションの位置づけを前提として、筆者のメッセージを正確に読みとり、読みとったことを根拠（証拠）にして自分のこれまでの体験や知識と結びつけて自分の考えや意見、解釈を筋道を立てて相手にわかりやすくプレゼンテーションするという授業である。こうした体験・活用・参加型の授業の展開で「読解表現力」を育成することは同時に思考を深めさせることであり、解釈や評価、説明や論述する力を育成することでもある。また、対人関係能力やコミュニケーション能力の育成も図られ、「生きる力」を培うことにもなる。

〈研究仮説〉

現代文の授業において、文章の内容や表現、筆者の主張について自分の意見や考え、解釈をプレゼンテーションするという体験・活用・参加型の授業を展開すれば、読解表現力が育成されるであろう。

II 研究内容

1 読解表現力について

(1) 読解表現力とは

① 読解力とは

読解とは田近洵一(1989)によると「文章を読むときの、その文章の内容の理解」とし、その指導の要点において「読解において学習者に求められる能力は、要するに、その文章に何がどう書かれているのかを読み取る力に他ならない」としている。また、高等学校学習指導要領国語総合の「読むこと」の領域と現代文の「内容」の領域として次の表1のように提示している。

表1 高等学校学習指導要領国語総合「読むこと」と現代文「内容」の領域

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">・文章の内容を叙述に即して的確に読み取ったり、必要に応じて要約したりすること。・論理的な文章について、論理の展開や要旨を的確にとらえること。・文学的な文章について、人物、情景、心情などを的確にとらえ、表現を味わうこと。・語句の意味、用法を的確に理解し、語彙を豊かにするとともに、文体や修辞などの表現上の特色をとらえること。 |
|--|

つまり、読解力とは「何が」、「どのように」描かれているのかを的確に読み取る能力のことである。では、「何が」と「どのように」を的確に読み取るために読み手に必要な能力とはどのようなものか、次の表2のようにまとめてみる。

表2 読解に必要な能力

- ・ 語句の辞書的な意味も含めて文中での意味や用法を的確に理解する能力
- ・ 文体や修辞などの表現上の特色をとらえる能力
- ・ 文章の組み立て、構成を的確にとらえる能力
- ・ 文章を要約し、主題や要旨を的確にとらえる能力
- ・ 文学的な文章について、人物、情景、心情などを的確にとらえるための既習事項や体験と結び付けて想像することのできる能力

② 表現力とは

広辞苑では表現は「心的状態・過程または性格・志向・意味など総じて精神的主体的なものを、外面的・感性的形象として表すこと」とある。また、高等学校学習指導要領国語総合の「話すこと、聞くこと」「書くこと」と国語表現の「内容」の領域として表3のように提示している。

表3 高等学校学習指導要領国語総合「話すこと、聞くこと」「書くこと」と国語表現「内容」の領域

- ・ 様々な問題について自分の考えをもち、筋道を立てて意見を述べること。
- ・ 目的や場に応じて、効果的に話したり的確に聞き取ったりすること。
- ・ 課題を解決したり考えを深めたりするために、相手の立場や考えを尊重して話し合うこと。
- ・ 論理的な構成を工夫して、自分の考えを工夫してまとめること。
- ・ 情報を収集、整理し、正確かつ簡潔に伝える文章にまとめること。
- ・ 目的や場に応じて、言葉遣いや文体など表現を工夫して話したり書いたりすること。
- ・ 国語の表現の特色、語句や語彙の成り立ち及び国語の役割について理解を深めること。

つまり国語科においての表現は話すことだけではなく、書くことも含めて表現であり、表現するために必要な能力として、「理解力」があり、「理解力」を土台として「表現力」が育まれるということがいえる。理解力なしには目的や場に応じた表現、効果的な表現は望めないのである。

③ 読解表現力という考え方について

「読解力向上に関する指導資料－PISA調査（読解力）の結果分析と改善の方向－」文部科学省（平成17年12月）が提示された。ここでまず、確認しておきたいことは、PISA調査での「読解力」と上記①でまとめた従来の国語科でいう「読解力」とは異なるということである。

教育科学国語教育（2008,6）のなかで中村孝一は「テキストを単に『読む』だけでなく、テキストに基づいて自分の意見を論じることと読解力なのである。言い換えれば、自分の言葉で表現できてこそ、はじめて理解したことになるのであり、書かれている内容を理解しているかどうかは表現によって確かめられるとも言えるだろう。『読解力＝（読解＋表現）』という式をたてることができよう。…（略）」と述べている。また、高等学校学習指導要領国語科の目標のなかで、「表現と理解の能力も、個別に存在するのではなく、両者は密接に関わっている。…（略）表現と理解の能力を調和的に育てていくことが大切である。」と述べている。

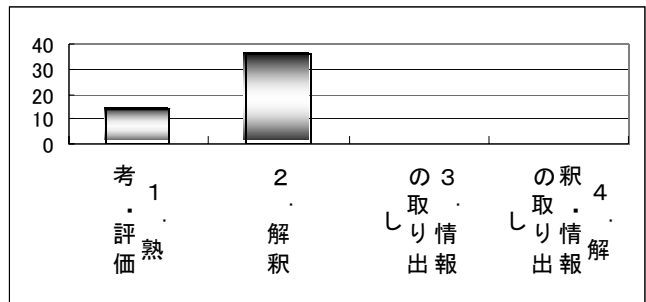
自分の考えを表現するためには、まずテキストの内容を正確に理解することが前提となるため「理解力」が必要である。正確な理解のもとでこそ、正しい方向への思考・考えが導かれ、適切な表現へとつながるのである。また、自分の言葉で表現してはじめて、理解していることが自他共に確認でき、より確かな理解としての定着が図られる。つまり、「表現力」は「正確な理解」を土台として育成され、「理解力」は「表現」することにより向上していくのである。「読解力」と「表現力」は相乗効果的に育成され、その関係はスパイラルの関係にあるといえる。要するに両者は別々ではなく一体化したもので「読解表現力」としてとらえることができるのである。ここで言う「表現」とは「話すこと」「書くこと」も表現であるということを確認しておく。

読解力を育むために適宜に表現活動を取り入れ、表現力を育むために読解力の向上を図るといふ授業実践、つまり「読解表現力」を育むという認識をもち、指導に当たることが、より効果的な「読解力」「表現力」の育成につながると考える。

(2) 読解表現力育成の意義について

日本の子どもたちの「読解力」が課題として指摘されている具体的な現状をみてもみる。まず、図1に示すように読解プロセスにおいて「解釈」（書かれた情報がどのような意味を持つのかの理解

・推論が必要な問題)、「熟考・評価」(テキストに書かれていることと知識・考え方・経験等との結び付けが必要な問題)で課題が多いことが明らかになった。出題形式においては図2に示すように「自由記述(論述)」(答えを導いた考え方や求め方、理由説明など長めの語句で答える問題)を苦手としていることが明らかとなった。



また、高等学校教育課程実施状況調査(平成17年度)において理由や根拠を基に自分の考えを記述する問題で無回答率が約25パーセントと高い水準にあり、課題として指摘された。その原因の一つとして考えられるのが、同じ調査の図3である。「説明や意見などを書くこと」の質問に対し、「好きだった」と答えたのがわずか20パーセントだったのに対し、「きらいだった」と答えたのが2倍以上の42.2パーセントもいた。以上2つの調査結果から子どもたちの苦手とする分野が明らかにされたと同時に取り組まなければならない課題が示された。そこで文部科学省はPISA調査の結果を受けて「読解力向上プログラム」(2005.12)で「各学校で求められる改善の具体的な方向」として①テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実、②テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の充実、③様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実、の3つの重点目標を示した。読解に当たっては、単に文章を読んで理解するだけでなく、テキストを利用して自分の考えを書くことを求め、テキストの内容を要約・紹介したり、再構成したり、自分の知識や経験と関連付け意味付けたり、自分の意見を書いたり、論じたりする機会を設けることが重要であるとしている。その際、自分の経験や心情を叙述するだけでなく、目的や条件を明確にして自分なりの考えを述べたり、論理的・説明的文章に対する意見を書いたりするなどの機会を意図的に作っていくことも大切であるとしている。

図1 PISA調査・読解力の読解プロセス別にみた課題

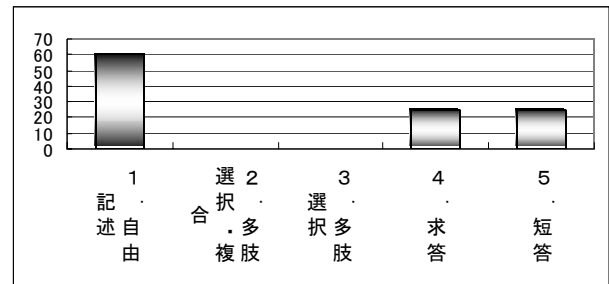


図2 PISA調査・読解力の出題形式別に見た課題

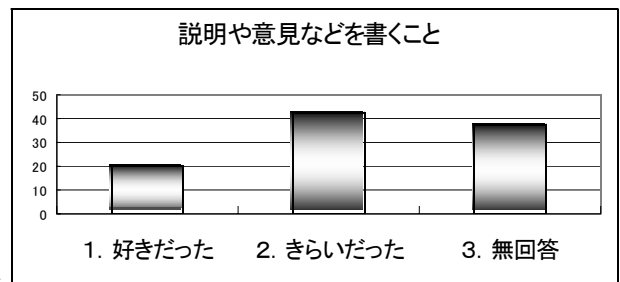


図3 高等学校教育課程実施状況調査

つまり、今、国語の授業改善の一つの方向として、「読解表現力」の育成が期待されているのである。「読解表現力」を育むことは「PISA型読解力」を育むことであり、高等学校国語科の授業の課題に取り組むことであると言える。現代のさらに進展していく情報化社会や国際化社会の中で、自立した社会人として「生きる力」を育み、「確かな学力」を身に付けなければならない子ども達。高校生にあってはまさに、「自立した社会人」の入り口にさしかかった時期にあるといえ、身に付けなければならない大切な学力の一つであると考え。知的活動の基盤とされる「言語能力」の育成の中核をなす国語科、「言語能力」を基盤として培われる「読解表現力」は国語科だけではなく全ての教科に波及されるものである。課題を深刻に受け止め授業改善に取り組まなければならないと考える。

2 プレゼンテーション活動について

(1) プレゼンテーション活動とは

プレゼンテーションとは旺文社カタカナ語新辞典によると「①贈呈。紹介。上演。②提出。提示。説明。広告代理店が、広告主を対象にして提出するキャンペーン計画書。③会議などで、企画や計画をすること。④マルチメディアを使って資料を展示しながら、説明・発表を行うこと。」とある。また、河野庸介は国語科重要語辞典(2007.5)で「プレゼンテーションは、現在は広く口頭発表会全般をさすが、もともと、企画や調査研究などの結果を発表し、(聞き手の理解や共感を得て)聞き

手を説得することである」と述べている。以上のことからすると、プレゼンテーションの意味は多岐にわたる。共通して言えることは、そこには「話し手・聞き手」、「発信者・受信者」、「送り手・受け手」「書き手・読み手」が存在するということである。このことからすると、プレゼンテーションとは「ある情報を媒体を介して伝達すること」であると考えられる。

そこで、本研究ではプレゼンテーション活動を、「意見・解釈の説明」を発表の形式と文章として書くという二つの表現活動としてとらえ、「読解表現力」を育成する授業として取り入れることにした。

(2) プレゼンテーション活動の意義について

平成 17 年度高等学校教育課程実施状況調査（国語総合）の結果、人前でスピーチや説明をすることについて（図 4）好きだったと答えたのが 9.4 パーセントに対し、きらいだったと答えたのは 56.6 パーセントもいた。また、同じく人前で報告や発表をすることに対して（図 5）好きだったと答えたのが 10.1 パーセントに対し、きらいだったと答えたのが 55.5 パーセントいた。さらに、平成 19 年度「国語に関する世論調査」・「日本人の国語力についての課題」で「自分自身の国語力にはどのような課題があるか」（図 6）の問いに対し、説明したり発表したりする能力 32.5 パーセント、考えをまとめて文章を構成する能力 29.8 パーセントとの結果が報告されている。特に、「説明したり発表したりする能力」は 20 代と 50 代がともにトップに挙げており、それ以外の世代でも上位に挙げている。以上 3 つの調査結果から、日本の子どもたちばかりでなく、社会人も含めて人前での説明や発表に対して苦手意識を持っていることが伺える。

しかし、人前での説明や発表の機会は社会生活において多々あることであり、説明力や発表力は身に付けなければならない重要な国語力の一つである。また、このことは先に挙げた P I S A 型読解力低下の問題と課題を同じくするものであり、苦手意識を克服すべく指導が望まれるのである。

スピーチやプレゼンテーションの活動の意義を河野庸介(2007)は表 4 のようにまとめている。プレゼンテーションをするためには、まず、その内容を正確に理解していなければならない。そのため内容への思考・認識が促進され、理解の深まりが期待できる。また、効果的なプレゼンテーションをするためには話の内容の組み立てや提示の仕方、表現の仕方等の工夫も必要となる。さらに、プレゼンテーション活動では学習者は「話し手」となりまた「聞き手」ともなり、両方の体験をすることができる。このことはお互いを思いやる、相手の立場を尊重するという相互理解・相互交流を図り、コミュニケーション能力を育成することも期待できる。つまり「読解表現力」を育成する手立てとして、授業の中にプレゼンテーション活動を取り入れることが有効であると考えられるのである。

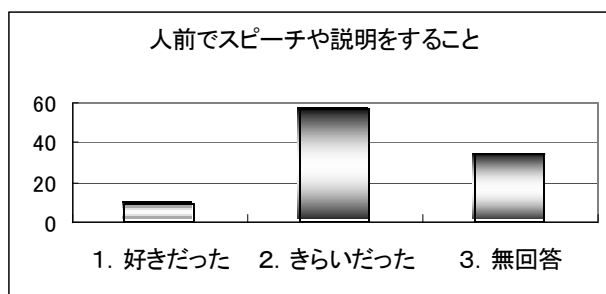


図 4 高等学校教育課程実施状況調査

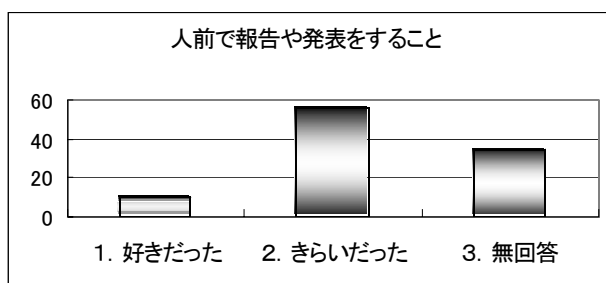


図 5 高等学校教育課程実施状況調査

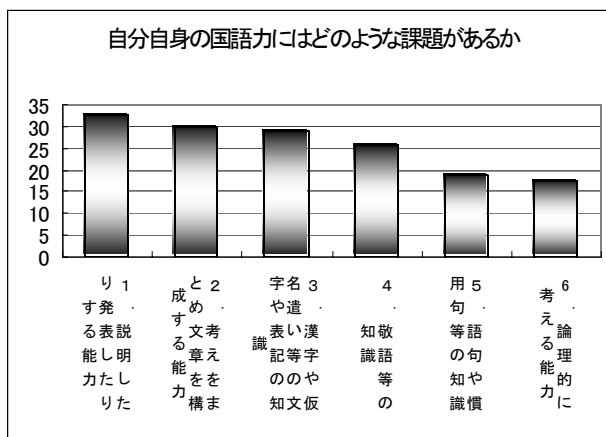


図 6 平成19年度国語に関する世論調査

表 4 スピーチやプレゼンテーション活動の意義

- ①話しを組み立てる力を育てる。
- ②課題・話題について理解を深める。
- ③効果的に話す力を育てる。
- ④話の内容を正確に受け止める力を育てる。
- ⑤学習者のコミュニケーションをはかる。

(3) プレゼンテーション活動と体験・活用・参加型授業との関わり

国語科における体験について河野庸介は「国語科における体験とは『話すこと・聞くこと』『書くこと』『読むこと』に関するまとまった言語体験であると言える。…（略）課題探求過程をたどって説明したり報告したりすることも言語体験となる」と述べている。

プレゼンテーション活動は、既に学習者に備わっている基礎的な知識や技能に加えて、該当授業で学習した知識・技能を目的に応じて組み立て発信する活動である。プレゼンテーション活動は活用する活動であるといえる。また、プレゼンテーション活動においては学習者は常に「話し手・聞き手」となるため、自ずと授業に参加を余儀なくされる参加型の学習形態でもあり、ここには言葉の体験がある。つまり、プレゼンテーション活動を取り入れた授業は、体験・活用・参加型授業そのものである。

3 読解表現力を育成するプレゼンテーション活動の指導の工夫

(1) プレゼンテーションの方法の指導について

プレゼンテーションをする上でまず欠かせないのがスピーチの心得である。スピーチの心得について田近洵一は次の表5のようにまとめている。また、同じくプレゼンテーションの指導の例を次の表6のようにまとめている。

表5 スピーチの心得

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none">①発音・発声が明瞭で意味がはっきり伝わること。②話しの内容に応じて、プロミネンス、イントネーション、間、速さなどを工夫すること。③聞き取りにくいことは、まぎらわしい語句の使用に注意すること。④文末を明確にすること。⑤その場にふさわしい話題、言葉づかいを考えること。⑥話しのくせ（アノー、エート）に気をつけること。⑦話しの構成を考え、聞き手が真剣に聞いてくれるように工夫すること。 <p>さらに話すときの姿勢、表情、視線の位置、身振り、マイクを使用する場合の声の大きさなども考えておく必要がある。</p> |
|---|

表6 プレゼンテーションの指導例

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">①共通の命題を示す。②命題から具体を見直し、自分の立場を決めさせる。③自分の立場の根拠となる具体を詳しく調べさせる。（取材…関係図書…インターネット等）④発表の段取りを決めさせる。（伝えたいこと…カード…組み立ての工夫）⑤④に必要なプレゼンテーションを工夫させる。 |
|--|

プレゼンテーション活動は言語活動であり、コミュニケーション活動でもある。上記でプレゼンテーション活動を定義したようにプレゼンテーション活動には「聞き手・受信者・受け手・読み手」である相手が存在する。つまり「話し手・発信者・送り手・書き手」には相手意識が必要である。相手に理解してもらうために、または相手を効果的に説得するためには伝え方、伝達内容、伝達手段、伝達の場の工夫が必要なのである。プレゼンテーション活動を授業に組み入れる際には生徒の実態の応じて、これらの指導も重要である。

(2) プレゼンテーション活動の位置づけを前提とした授業について

学習目標を設定し提示することは、学習者に学習活動のあり方を示すことである。目標の提示は学習者に学習の到達目標を確認させるだけではなく、目標達成に向けての学習方法・学習手順・思考様式、そして学習意欲に大きな影響を及ぼす。学習そのものに対してより意欲的に、自律的に取り組ませるためにも学習目標の提示は極めて重要である。

本研究では、プレゼンテーション活動の位置づけを前提とした授業の展開を図る。単元の始めの導入の段階で、学習活動としてプレゼンテーションをすることを目標の一つとして提示する。プレゼンテーションをするためには学習者に何が求められるのかを認識させ、教材に向かわせるのである。プレゼンテーションをするためには、まず、内容へのより確かな理解が必要となり、学習者にその努力が要求される。学習者は内容の正確な理解をするために、語句の正確な理解をはじめとして、文章の構成や筆者（作者）の理解、筆者（作者）の主張、要旨、そして自分の意見はどうかという読解に向けて教材に向かうのである。つまり、プレゼンテーションを前提にして授業を展開することは、正確な読解を導くことにつながり、読解力の向上が期待できるのである。

(3) 「言葉と体験」をキーワードにしたプレゼンテーション活動により読解表現力を育成する指導の工夫

「言語」の指導に関して長安邦浩(2008.11)、瀬川榮志(2007)、文部科学省(平成17年度高等学校教育課程実施状況調査結果を踏まえた5つの指導上の改善点)はそれぞれ次の表7、表8、表9のように述べている。

表7 長安邦浩現代教育科学2008.11「文脈をつくる対話力を通して、表現型の読解力を育む」

読解力は単に、文章を読んで書かれていることの意味を理解することではない。読み取って得た情報を吟味して加工し、自分の考えを書いて表す、表現型の読解力である。…(略)表現型の読解力が、他教科等の言語活動を支える「言葉の力」となる。

表8 瀬川榮志(2007)「指導計画作成と言語事項」

「言語事項」は「発音・発声、文字、表記、語句、文章構成、言葉遣い、書写」の指導事項から成っている。…(略)国語学力低下の最大の原因は基礎的技能(言語事項)の指導の不徹底にある。文章表現する場合は、語彙力が豊かでなければ、内容のある文章は書けない。また、読みを深めるためにも語彙力が必要である。

表9 文部科学省「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査結果を踏まえた5つの指導の改善点」

「基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けさせる。」の項目の説明として、「国語における基礎的・基本的な知識・技能には、実生活で必要とされる・要約・紹介・説明・記録・報告・対話や討論などの言語活動ができることなども含まれ、…(略)具体的には、まず常用漢字の読み書きを始めとした語彙の指導が必要である。豊かな語彙力は、理解や表現の基礎となるものだからである。特に、日常あまり用いないが読んだり書いたりするためには欠かせない語や、訓読みの漢字の学習、言葉の使い分け等の指導を丁寧に行いたい。

知的活動・コミュニケーション・感性・情緒の基盤としての「言語」は「確かな学力」を形成するための基盤でもある。また、正確に理解するための理解力、適切に表現するための表現力の基盤としてあるのが「言葉の力」・「語彙力」である。国語科はその指導の中核をなすものであり、授業を展開するその過程の中で語彙力育成の指導は欠かせない重要な要素となる。語彙力を育成するための工夫として、例えば「漢字」であれば、音読み・訓読みはもちろんのこと、加えて辞書的な意味・文中での意味、類義語、対義語、その漢字を使った別の熟語、活用例等を丁寧に指導する。この「言葉」指導は、正確な理解、適切な表現につながるの言うまでもないことである。

さらに身に付けた語彙力を確かなものとするためには、その「言葉」を活用・体験へとつなげることが肝要であると考え。授業の中にプレゼンテーションを取り入れることは授業の中で身に付けた語彙を活用・体験することになり、読解表現力を育成する手段として効果的であると言える。

繰り返すが、まずは授業展開の中で語彙力育成のための丁寧な指導を実践したいものである。

(4) プレゼンテーション活動にグループ活動を取り入れる指導の工夫

グループ活動は教科の授業やLHR等様々な場面で多く取り入れられる活動形態である。

しかし平成17年度高等学校教育課程実施状況調査・国語総合によると、「お互いの思いや考えをうまく伝え合うことができるよう国語を勉強したい」の項目で、64.6パーセントの生徒がそう思う・どちらかといえばそう思うと答えている。(図7) この結果からお互いの思いや考えを伝え合うことに対する必要性を認識していることが伺える。しかしその一方で、同じ調査の「話し合いや討論などをする事」の項目ではきらいだったと答えた生徒が好きだったと答えた生徒の2倍以上にのぼった。(図8) 同じく文章を読んで話し合うこと」がきらいだったと答えた生徒が好きだったと答えた生徒をさらに上回る結果となっている。(図9) 伝え合い・話し合いの必要性は認識しているものの苦手としている生徒が多くいること。または苦手であるが故にその力をつけたいと思い、その手段として国語を勉強したいと思う生徒が多くいるのではないかということも窺える。もちろん、きらいだったと答えた理由は苦手意識の他にも対人関係の問題や性格的なもの等様々な理由が考えられる。

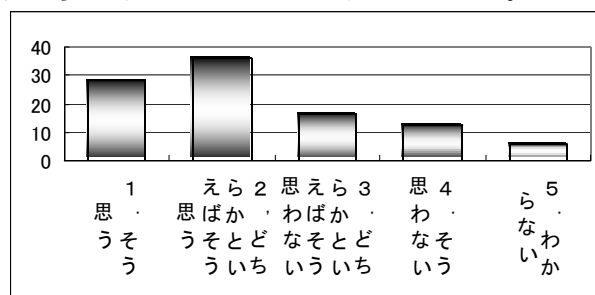


図7 「お互いの思いや考えをうまく伝え合うことができるよう国語を勉強したい」(平成17年度高等学校教育課程実施状況調査・国語総合)

以上のことから、「伝え合い・話し合い」に対する生徒の苦手意識の克服や学びの欲求を満たすための国語科での指導が必要であり、重要であると言える。そして、大切なことは、指導の繰り返しである。繰り返し指導することにより、伝え合い話し合う能力を身に付けることができると同時に、苦手意識の克服ができる考えるからである。

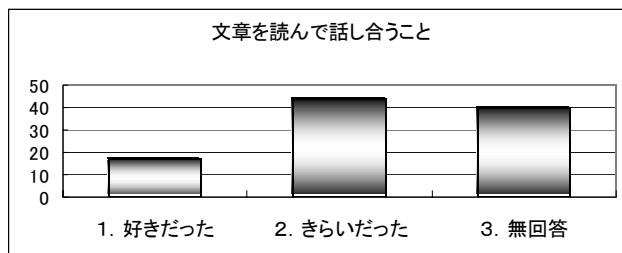
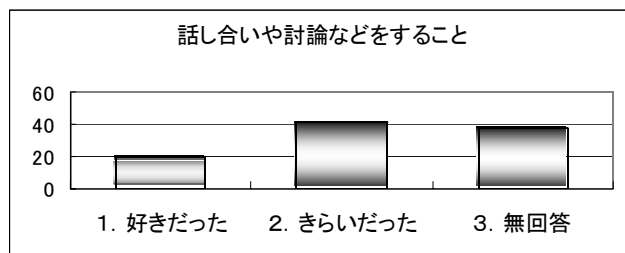


図8 「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」より 図9 「平成17年度高等学校教育課程実施状況調査」より

話し合い活動の意義を河野庸介は次の表10のように述べている。また、話し合い活動形態の有効な手立てとされるグループ指導の効果と聞く態度を育てる指導の観点について瀬川榮志は次の表11、表12のように述べている。さらに、話し合いの基本型である対話に必要な対話力について安居総子は同じく表13のように述べている。

表10 「話し合い活動の意義」

①出席者を尊重する心を養う
②話し合いのルールやマナーを学ぶ
③話題に関して理解を深める
④新しい視点を獲得する

表11 「グループ指導の効果」

①個が生き生きと学習する場
②個のより深い理解を図る場
③個が個に影響を及ぼす場
④新しい発見が見つかる時と場

表12 「聞く態度を育てる指導の観点」

①体を向け、心を向けて聞く・関心を持つ
②レスポンスしながら聞く・うなずき、表情
③質問できるように聞く・内容の確認、補完
④コメントできるように聞く・立場の表明

表13 「対話力」

①話し展開を予測しながら、価値づけ、方向づけを行いながらきく	②話し手の発想意図をとらえる	③二人または数人の話をきいて、共通点相違点に注意しながらきき比べる	④問題意識、目的、必要感を持つてきく	⑤情報に軽重をつける	⑥目的や立場（属する集団にとっての）を自覚してきき、必要な情報か否かを判断する	⑦学習力としてのきく	⑧伝えたい事柄・話し手の考えについて、自分の考えを持つ	⑨話し合いの内容を知って話し合いに参加する	⑩自分の考えを持って話し合いを進める	⑪ルールにしたがって発言する	⑫話し合いの道筋にはずれないようにする	⑬パブリックな話し方・敬意表現	⑭司会力	⑮メモ力・記録をまとめる力	⑯協同・責任感・根気・やさしさ
--------------------------------	----------------	-----------------------------------	--------------------	------------	---	------------	-----------------------------	-----------------------	--------------------	----------------	---------------------	-----------------	------	---------------	-----------------

学習者が話し手や聞き手となる伝え合い・話し合う学習活動の中でもグループ学習は小集団として活動するためより高い効果が期待できる。グループ学習では、より深い人間的交流が促され人間関係力を高めることができ、コミュニケーション能力を育成することもできる。もちろん適切に表現する能力や正確に理解する能力の育成も期待できるのである。上記表10から表13で述べられていることを指導の観点に据えて、意義のあるグループ活動を学習活動の一環として積極的に取り入れることが望ましいと考える。

そこでグループ活動は、プレゼンテーション活動を授業に取り入れる際、「読解表現力」を育成する上においてより効果的であると考え、全体（一斉）の場でのプレゼンテーションの前にグループでのプレゼンテーションを取り入れることにした。グループ内でメンバー全員がプレゼンテーションをし、その中で内容の吟味や意見交換をし、全体の場でプレゼンテーションをする代表者を決める。そしてその代表者が全体の場でプレゼンテーションをするのである。代表になれなかったものは指導者がまとめて紹介したり、あるいは印刷配布をして全員で共有するという方法もある。もちろん全員が全体の場でプレゼンテーションをするというのよい。どちらにするかは時間的な制約の問題も含めて、授業の目標にあったより効果的な方法で実施すればよいと考える。今回は代表者を決めるという評価・判断力育成の効果もねらってこの方法をとることにした。

(5) 「書くこと」によるプレゼンテーションの指導

本研究では、口頭による、プレゼンテーションだけではなく、「記述」に課題があるという状況も受けて「書くこと」によるプレゼンテーションも授業の中に取り入れた。論理的に書く力の育成を目指して、説得力のある文章にするため、自分の主張を明確にすること、自分の主張の理由・根拠を明確にし、具体例を入れて書くように指導するのである。もちろんここでも「読解表現力」の育成が期待できる。

Ⅲ 指導の実際

実践事例 ……高等学校の実践より 沖縄県立普天間高等学校 島田聖子

1 単元名 未来世代への責任

対象クラス 2年5組（男子12名、女子22名 計34名）

2 単元の学習目標

- (1) 筆者の主張を根拠をおさえながら読み取ることができる。
- (2) プレゼンテーションをとおして、理解した内容を他者に表出することができる。

3 単元設定について

(1) 教材観

経済学者である筆者は、自己利益の追求が結果として社会全体の利益を増進するという経済学の論理を説明する。しかし、資本主義のシステムに組み込まれた今日の世界を支配している、その論理が環境問題の解決を阻んでいることを明らかにする。そこで、経済学者が否定したはずの「倫理」が必要だと訴える。無力な他者である未来世代のために、我々は、自己の欲求を抑え責任ある行動をとるべきだというのが、筆者の主張である。環境問題は、高校生にとって、授業や学校の教育活動をはじめこれまで様々な場面で学んできた。環境破壊を解決するにあたって、リサイクルやゴミの分別、マイバックの推進など少しずつ生活の中で取り組まれるようになったが、まだまだ不十分である。現在の豊かな社会を享受して育ってきた彼らが、いかに自己の欲望を抑え、未来世代のために犠牲を払えるかを考えさせる、適切な文章である。

(2) 指導観

評論文を苦手とする生徒は多いが、筆者の主張を読み取るために、本文の叙述から根拠をふまえ、論理の展開を追ってほしい。その一助として、本文中に使用される漢字や言葉の意味、対義語などを補助プリントで補い、かつ生徒の語彙力を広げるようにする。そして、今回は、授業で学習した筆者の主張や叙述の意図するところをプレゼンテーションすることで、内容理解を定着させたい。学習内容を理解したつもりで終わらず、プレゼンテーションのために、他者に分かりやすい資料を作成することを心がけ、筆者の言っていることを整理し、表出させる。それによって文章を深く理解できると期待する。

4 単元の評価規準

a 関心・意欲・態度	b 話す・聞く能力	c 書く能力	d 読む能力	e 知識・理解
① 筆者の主張を主体的に読み取ろうとする。 ② グループ学習を前向きに取り組むことができる	① 発表の際相手が理解できるよう表現することができる。 ② 他人の発表をきちんと聞くことができる。	① 筆者の論理と具体例を対応させて書くことができる。 ② 分類・整理が適切で、図や絵を効果的に用いることができる。	① 主張をつかむことができる。 ② 根拠を本文中から指摘できる。	① 語句の意味、対義語や漢字がわかる。 ② 京都議定書や環境問題を理解する。

5 単元の指導計画

時間	学習目標	学習活動（生徒の動き）	指導上の留意点と評価
1	1. 地球温暖化について確認する 2. 本文の語句的事項をおさえる。	1. 環境問題一般について知っていることを発表し合う。 2. 漢字の読みや語句の意味、対義語等について辞書や便覧等を利用し学習する。	1. 環境破壊の問題についても、生徒の意見を問う。（意欲・態度） 2. ワークシートを用い、基礎を培う。（知識・理解・技能）
2	1. 全文を読解し、内容を理解する。 2. 第1段落の内容をつかむ。	1. 全文を音読し、四つの段落分けをする。 2. アダム・スミス以来の経済学の論理について理解し、経済学者が「悪魔」の論理と呼ばれる理由を説明する。	1. 声量、スピードに注意させる。（読む・話す・聞く能力） 2. 経済学が「倫理」を否定して出発した学問であるという記述が根拠であることに着目させる。（読む能力）

3	1. 第2段落前半の読解ができる。 2. 「共有地の悲劇」を理解する。	1. 環境問題の原因について経済学者と世間の考えの対比をおさえる。 2. 牧場と牧草の具体例をとおして、私的所有制の下で、環境問題が解決されるという論理を理解する。	1. 難解な語句・表現について理解させる。(知識) 2. 私的所有制の下での自己利益の追求が社会全体の利益を増進するという経済学の論理を、身近なレジ袋の例をあげて説明する。(読む能力)(理解)
4	1. 前時の既習事項を踏まえて、第2段落後半の読解ができる。 2. 他者に説明するために、内容を整理することができる。	1. 経済学の論理が「京都議定書」においても適用されたことを理解する。 2. 牧場と牧草の例と「京都議定書」がどのように対応しているか、どのように経済学の論理が取り入れられているかを整理してプレゼンテーション用の資料にまとめる。	1. 環境破壊は「共有地の悲劇」が問題であるという、経済学の解釈をおさえさせる。(読む能力)(理解) 2. 聞く人を意識して、わかりやすく図や表、絵なども添えて作成させる。(理解)(読む・書く能力)(技能)
5 本 時	1. 聞き手を意識したプレゼンテーションができる。 2. 相手の説明を聞き、理解できる。	1. グループ内で、自分の作成した資料を提示しながらプレゼンテーションをする。 2. 相手の資料を見て、説明を聞きながら内容をしっかりと理解する。 3. 各グループ代表者を決め、全体の場で発表する。	1. 資料を見せ説明する際に、聞き手に顔を向けさせる。(関心・意欲・態度)(話す・聞く能力) 2. 自分と違った切り口やまとめ方に注意して聞き、そこから学ぶように促す。(聞く能力)(理解)(関心・意欲・態度)
6	1. 題3段落ではこれまで述べてきた論理の原則に反する、例外の事象について理解する。 2. 解決方法について筆者の見解をつかむ。	1. 未来世代という他者を相手に、環境問題は経済学の論理で解決できないということを理解する。 2. 経済学が否定したはずの「倫理」が不可欠であることを理解する。	1. 経済学の論理が適用できないことを、次の2点を中心に整理しまとめさせる。 ①未来世代は存在しないため、現在世代に補償を請求できないこと。 ②自己利益を追求する現在世代は、まだ存在しない未来世代の利益のために行動しないこと。 (読む・書く能力)(理解) 2. 筆者の主張をつかませる。(理解)(読む能力)
7	1. 第4段落で述べられた今日の世界の状況を理解する。 2. 本文をふまえて意見文を書くことができる。	1. 経済学者自身が経済学の論理の破綻を認めたことや今日ほど「倫理」が必要な時はないことを理解する。 2. 「未来世代への責任」について、600字程度の小論文を書く。	1. 資本主義の繁栄を享受するうちに、「倫理」を見失ったことに気づかせる。(読む能力)(理解) 2. 字数は目安とし本文の要旨をまとめて自分の意見を書かせる。(理解)(書く能力)(知識・技能)

6 本時の学習活動

(1) 本時の目標

- ①聞き手を意識し、まとめた資料をわかりやすく説明することができる。
- ②相手の発表について、自分との相違点を意識して聞きながら考える。
- ③プレゼンテーション活動を通して内容の理解を深める。

(2) 授業仮説

プレゼンテーションをすることによって、相手に伝わるような発表にするために、既習事項について深く理解しようと努めるだろう。

(3) 本時の展開

時間	学習目標	学習活動（生徒の動き）	指導上の留意点と評価
導入 5分	1. 前時の既習事項を説明できる。	1. 教科書，ノートを活用し，問いかけに答える。【一斉】	1. ノートの記入事項と少し違う問いかけをし，理解しているかどうかを確認する。（理解）
展開 I 25分	1. 聞き手を意識したプレゼンテーションができる。 2. 相手の説明を聞いて，理解し，妥当かどうか判断できる。	1. 自分で作成した資料を掲げ，グループ内で一人ずつ発表する。【グループ】 2. 発表が終わったら，質問をしたり内容について確認し合う。	1. 聞き手に顔を向けて，自分のまとめた資料が，本文とどのように対応しているか説明させる。（話す・聞く能力）（理解） 2. わかりにくい点や聞きたいことは話し合うよう促す。
展開 II 15分	1. 伝える内容を整理してプレゼンテーションができる。 2. 各グループのプレゼンテーションを見て，参考にできる。	1. 各グループの代表者は，スクリーンに投写された資料を示しながら，全体に向かってプレゼンテーションをする。【一斉】 2. 分からない点があれば，質問する。	1. 目線の高さや声の大きさに注意して発表させる。（話す能力）（技能） 2. 集中して聞くよう促す。（関心・意欲・態度）
5分 まとめ	1. 本時の内容を再度まとめて述べられる。	1. 本時の内容確認をする。 2. 次時の予告を聞く。	1. 本時の内容が定着しているか，確認する。（知識・理解）

7 授業実践の考察

現代文評論の学習でプレゼンテーションを前提として授業を進め，グループ内でのプレゼンテーション，全体での代表者によるプレゼンテーション，書くことによるプレゼンテーションを取り入れた学習活動を通して「読解表現力」が育成されたかどうかを検証授業における実践，ワークシート，提出物，アンケート，授業実践教諭及び生徒の感想によって検証する。

(1) プレゼンテーションに使用したワークシートより

検証授業で「話すこと」による全体でのプレゼンテーションはプレゼンテーション用の資料をスクリーンに映して説明するという方法をとった。

プレゼンテーション用の資料から，生徒が相手に分かりやすく，見やすくするためにいかに工夫しているかが窺える。単元で習得した語句を自分のものにして活用し，国語科だけでなく他教科で学んだ知識も思考・表現の中に組み込んでいる。また，絵を用いたり，図式化したり，表の形式でまとめたりと個性的な資料を作成している。それぞれの持っている能力を最大限に活かし表現しているのである。さらにこれらの資料から内容をよく理解したうえで，自分なりの表現を試みているのも読み取れる。生徒のこのプレゼンテーションに備えて内容を正確に読解しようとする姿勢，つまり意欲的に授業に望んだことも窺えるのである。プレゼンテーションに使用した生徒のワークシートから，読解表現力の育成が図られたと考えられる。

(2) 「書くこと」によるプレゼンテーション・生徒の提出物より

「書くこと」でのプレゼンテーションについて3つの提出物の検証をする。それぞれの文字数を表14にまとめた。1つめは本単元に入る前に実施した，同じく現代文の評論「サッカーと資本主義」で筆者の主張をまとめた提出物である。「Q3 筆者の意見に対して自分の意見をのべよう」で筆者の意見に対して賛成か，反対かのいずれかにまるを付けさせて「なぜなら」という説明をもとめたものである。2つめは本単元での学習プリント「プレゼン5・『未来世代への責任』」というタイトルに込められた，筆者の主張を説明せよ」でまとめ提出されたものである。3つめは本単元のまとめとして『『未来世代への責任』において，筆者の主張は何か説明し，（主張とその根拠をよりこむ）それについて自分の意見（見解）をまとめよう」という課題を原稿用紙に書かせ，提出させたものである。

表14 生徒の提出物の文字数

課題	平均文字数	最多文字数	最少文字数
前単元・筆者の意見に対する自分の意見（28名）	52	162	7
本単元・①タイトルに込められた筆者の主張の説明（29名）	61	145	21
本単元・②筆者の主張を説明し，自分の意見をまとめる（26名）	合計	484	640
	主張の説明のみ	217	396
	自分の意見のみ	262	438

文字数においては表 14 で読み取れるように大きな違いがあるが、注目したいのは本単元①と②の筆者の主張の説明の仕方である。①では 29 名中根拠のある説明が 10 名、根拠のない説明が 19 名もいたのに対し、②では 26 名中根拠のある説明が 23 名、根拠のない説明が 3 名であった。根拠を明確にして自分の意見をまとめ、説明をすることを求めたのに対し、生徒は根拠をもとにきちんと説明している。「場」を設定すればできるということであり、設問の仕方・課題の与え方が生徒の「読解表現力」の育成を大きく左右するということである。

提出された生徒の作品から、本単元で学習した語句を活用し、これまでの知識と組み合わせて表現していることが読み取れる。さらにこの単元、この課題をきっかけとして思考を深め新たな視点を見出していることも窺える。プレゼンテーション活動の機会はその課題への思考・認識を促進させ、課題についての理解を深めさせるだけではなく、生徒が持っている可能性を導き出す要素をも孕んでいるといえる。プレゼンテーション活動の中には体験・活用があり、読解表現力の育成が図られたと考える。

(3) 事前・事後のアンケート調査より

検証授業を実践するにあたり、事前と事後にアンケート調査をした。実施人数は事前 34 名事後 32 名である。図 10 は事前アンケートで「自分自身の国語力で自信を持ってない点」を 3 つまで答えてもらった。最も多いのが「考えをまとめ文章を構成する能力」18 名で次に多いのが「説明したり、発表したりする能力」、「語句や慣用句の知識」が同数で 15 名であった。また、「人前でスピーチや説明をすることに抵抗があるか」

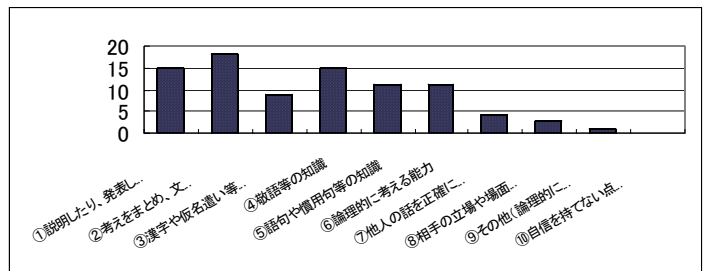
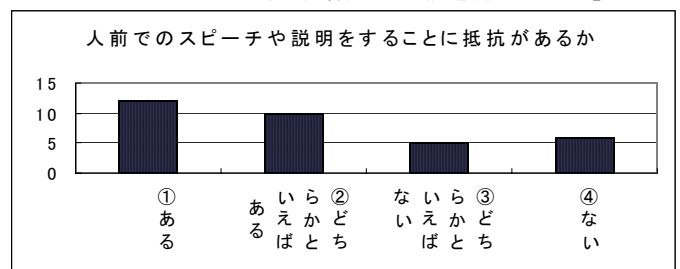


図10 「自分自身の国語力で自信を持ってない点」

(図 11) は「ある、どちらかといえばある」が全体の 65 パーセントにのぼった。この結果は平成 19 年度「国語に関する世論調査」と「平成 17 年度高等学校教育課程実施状況調査」の結果と共通しており、「読解表現力」に課題があることが窺える。図 11



「人前でスピーチや説明をすることに抵抗があるか」

今回の検証授業実施後のアンケート「今回の学習を通して、どんな力が身に付いたと思うか」

(図 12) の結果、「読解力」と答えたのが 17 名、「論理的に書く力」と答えたのが 15 名、「発表力」と答えたのが 9 名おり、事前アンケートでの課題についての克服が図れていることが窺える。また、「話すこと」「書くこと」におけるプレゼンテーション活動が「読解表現力」育成に効果のあることも検証されたのではないと思われる。さらに「自分で書いたり話したりしたものを、自己評価したり生徒同士で相互評価したことについてどう思うか」(図 13) について全員が「良かった・どちらかといえば良かったと思う」と答えている。良かったと思うその理由を表 15 にまとめた。(一部)

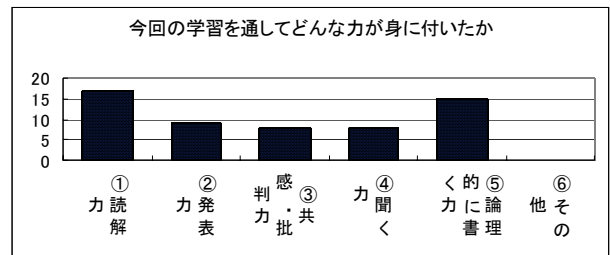


図12 「今回の学習を通してどんな力が身に付いたか」

今回は全体の場合でのプレゼンテーションをする前にグループ学習を取り入れ、グループ内で全員に発表させ、グループの代表を決め、グループの代表が全体の場合でプレゼンテーションをするという手だてを取った。グループ学習によりお互いに切磋琢磨し、自分の思考を見直し深めるとともに、新しい思考の展開につながるという効果を学習者自身が認識したことが窺える。

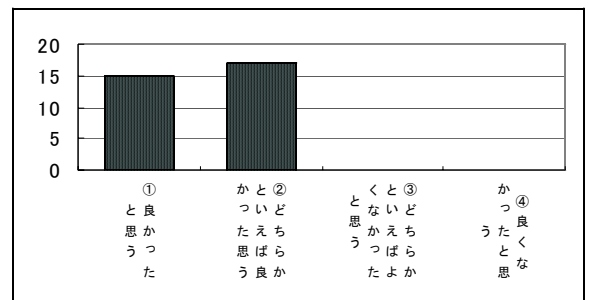


図13 「生徒同士で相互評価することをどう思うか」

表15 「自分で書いたり話したりしたものを自己評価したり生徒同士で相互評価したこと」
について「良かったと思う」具体的理由

①自分の意見と相手の意見の違いや、共通した部分を見つけて、相互を高めることができたと思う。②自分を客観的に見る力と他人を評価する力を伸ばせる。③良い点はまねできるし、自分の悪い点が見つかったらその反省ができるから。④色々な意見を取り入れることでもっといい発表ができるようになるから。⑤新しい考えが生まれる

表 16（1 部）は事後アンケートとして「プレゼンテーションを取り入れた学習の良い点はどのような点だと思うか」具体的に書いてもらったものである。

表16 「プレゼンテーションを学習に取り入れた学習の良い点はどのような点だと思うか」

①図といっしょに説明がきけてわかりやすい。②自分の中で内容を確認できる。発表力を伸ばす。たくさんの意見が聞ける。③みんなで一度調べたことをもう一度、プレゼンテーションという形で表現することにより、内容をもっと深く知ることができるから。④文章だけでなく絵や図で表現する機会があった。⑤表現力がついて読解力もつく。⑥みんな同じ問題でもいろんな答えがあり、いろんな表現がある。それに気づける点が良いと思う。⑦自分の意見をまとめる能力が身につく。⑧互いの意見を共有できるから。⑨相手にわかりやすく伝える力がつくから。

また、授業者の島田聖子教諭は検証授業実践の考察の中で生徒の主体的な読解という目標がおおむね達成できたこと、プレゼンテーションの資料が要点をまとめて工夫が施され各人なりの表現ができていたこと、グループ学習では内容理解の定着が図られたことに加えて、友人の良い点を取り入れるきっかけとなって良かったこと等をあげている。さらに、発表の仕方の指導も今後の課題として継続して指導していきたいと述べている。これらのことから、プレゼンテーション活動を授業に取り入れることは「読解表現力」の育成に効果的であると考えられる。

IV まとめと今後の課題

本研究では「読解表現力を育成する現代文の授業の工夫」をテーマに評論単元において文章の内容や表現、筆者の主張について自分の意見や考え、解釈をプレゼンテーションするという体験・活用・参加型の授業に取り組んできた。その成果と課題を以下にまとめる。最後に、プレゼンテーション活動は評論単元だけではなく、小説や韻文、又は漢文や古文の授業等においても「読解表現力」の育成に効果的であると考えられる。より多くの単元指導の中に取り入れることにより、さらなる効果が期待できると考えている。

1 成果

- ・プレゼンテーションを前提として授業を展開することにより、意欲的に主体的に授業に取り組む姿勢が見られ、読解力の向上が図られた。
- ・グループでのプレゼンテーション活動を取り入れたことにより、生徒同士で相互評価し合うことの効果が生徒自身にも認識され、読解表現力の育成に効果的であった。
- ・全体の場合でのプレゼンテーション活動により、そこに至るまでの資料作成においては習得したことの知識や技能の活用があり、実際のプレゼンテーション活動の場面では体験・活用・参加型の授業展開となり、確かな学力の定着が図られたと考えられる。
- ・書くことでのプレゼンテーションでは生徒の思考が促進され、新たな視点の広がりも見られるなど生徒の可能性が引き出され、学力の向上が図られたと考えられる。

2 課題

- ・今回はプレゼンテーションの内容に重点が置かれ、プレゼンテーションの方法についての指導が不十分であったため、発音、発声、声量、表情、態度といった表現が不十分であった。
- ・プレゼンテーション活動にはスピーチのマナーをはじめとした対話力、コミュニケーション能力等が重要である。より効果的な活動にするためにはこれらの指導も生徒の実態に応じて適宜に、継続的に指導する必要がある。
- ・プレゼンテーション活動は年間指導計画や単元指導計画の中に計画的に取り入れられることにより効果的な学力の向上につながると考えられる。

〈主な参考文献〉

- 河野庸介 2007 『国語科重要用語辞典』 東京法令出版
文部科学省 1999 『高等学校学習指導要領解説 国語編』 東洋館出版社
田近洵一 1989 『国語教育指導用語辞典』 教育出版

公民科学習における表現力を高める授業

－課題追究に基づいたディベート活動を通して－

*

**

真栄田 義光

照屋 民子

I テーマ設定の理由

現行の高等学校学習指導要領現代社会編の「内容の取扱い」において、「学習の過程で考えたことや学習の成果を適切に表現させるよう留意すること」とある。公民科のすべての科目（現代社会、倫理、政治経済）において、課題を設定し追究させていく学習が取り入れられ、学習の過程が重視されるようになり、「適切に表現させる」ことが示されている。このことについて、高等学校指導要領解説公民編では、「学習の過程で、どのような資料をどのような基準で収集し選択したのか、その資料を活用してどのように考え、どのような根拠で結論を得たのかについて表現することを意味している。」とある。公民科における表現力とは、社会的事象の諸資料に基づいて多面的・多角的に考察した結果、社会的な見地から表現していく力であり、表現力を育成することによって理解が促され思考力・判断力が育まれていくと考えられる。すなわち表現力を育成することは、「良識ある公民として必要な能力と態度を育成する」ことに必要不可欠であると言える。

しかしながら、国立教育政策研究所高等学校教育課程実施状況調査公民科（平成17年11月実施、平成19年4月発表）の調査結果によると、「現代社会の諸課題を資料を活用して追究し、表現することに課題」とあり、指導改善の具体例として、「基本的な概念を踏まえ、議論や発表などを通して追究を深める学習」とある。課題を追究するために必要な概念が十分身に付いていないこと、概念を用いて資料を読み解くことができないこと、自らの考えの根拠となる資料を選ぶことができないこと、複数の資料を関連させて追究することができないこと等の状況がみられる。また、同調査の教師質問紙調査から、政治や経済の問題について議論したり、テーマを設けて調べる学習や、考えたことや調べたことをレポートや報告書にまとめたりすることを十分に行っていない状況も伺える。

これまでの実際の公民科授業において、生徒の表現力を高めるための授業の実践は様々な理由で十分ではなかったと考える。授業の中に課題追究的な学習を取り入れ、社会的な見地から表現する授業の必要性は十分理解されているものの、講義中心の授業形態が多かったように思われる。

そこで、課題を追究する授業の工夫として、ディベート活動を取り入れることにより、表現力を高めることができると考え本テーマを設定した。ディベート活動の準備段階において、ディベートに先んじて夏休みの課題を課することによって、生徒自らが課題追究のプロセスを構築し、追究を通して自らの生き方を主体的に考えるとともに、追究した社会的事象を活用してディベート活動を展開し、ディベートを体験することで、多面的・多角的に追究することとなり、さらに発表の際には社会的事象を客観的かつ論理的に表現できると考える。

〈研究仮説〉

現代社会の課題追究に基づく社会的事象を取り入れた授業を展開し、それを踏まえたディベート活動を行うことにより、表現力が高まるであろう。

II 研究内容

1 公民科学習における表現力について

(1) 表現力を高めることの意義

国立教育政策研究所高等学校教育課程実施状況調査公民科（平成17年11月実施、平成19年4月発表）の調査結果では、「現代社会の諸課題を資料を活用して追究し、表現することに課題」とある。

「表現すること」については現行の高等学校学習指導要領現代社会編でも注視されており、科学的な追究の過程や思考過程を論理的に表現することができるよう、教師による指導が求められている。

また、2003年にOECDが行った学習到達度調査（略称：PISA）では、日本の高校生の読解力が、国際平均並と低水準であることが明らかになった。日本の読解力が低かった要因が、自由記

述問題で無解答が多かったことにあると思われる。この読解力について有元秀文（2008）は「欧米人が読解力と考えていることは、論理的に読んで、読んだことについて自分で考えて、読んだことを根拠にして自分の意見を表現すること」と唱え、国際社会での読解力を「①正確に読んで、②読んだことを根拠にして、③自分の意見を表現すること」と定義している。表現力を高めることは、「人間の尊重と科学的な探求の精神に基づいて、広い視野に立って、現代の社会と人間についての理解を深めさせ、現代社会の基本的な問題について主体的に考え公正に判断する」ために必要である。誰とも違う独創的な考えを持ち、それを誰にでも表現できる力を身につけてほしいと考える。

これまでの実践を顧みると、生徒の表現力を高めるために言葉、論述、絵画、身振り、音楽などを通して授業に取り組んできたが、そのねらいの達成度を検証することがなかった。また、生徒自身による発表等では、調べたことをそのまま述べたり、教科書、資料集に書かれていることを目追って発表していることも多々あった。そこには、その生徒個人の独創的な表現はなく、自由に、自発的に発言できない生徒達の姿があった。

そこで、本研究においては、社会的事象について多面的・多角的に思考した事柄について討論したり、自分の考えたことや調べたことを表現する機会を設けていく。具体的にはディベート活動を通して論理的な思考力や的確な表現力を高めていく。

(2) 公民科学習における表現力とは

公民科における表現力とは、前述した通り社会的事象の諸資料に基づいて多面的・多角的に考察した結果、社会的な見地から表現していく力であると考え。谷口和也（2007）は「表現力とは、学習成果の発表や文章化の力ではなく、収集・選択した資料を用い、どのようなことを考え、どのような根拠で結論を導き出したのかを、具体的、論理的に説明するなどして、第三者に学習で得た結論とその結論を導き出した過程をよりわかりやすく効果的に示す力のことである。」と唱えている。また高等学校学習指導要領現代社会編では「学習の成果」だけでなく「学習の過程」をも表現することを求めている。

本研究ではディベート活動を通して、表現力を高めていく取り組みを行うが、ディベートを行う前の活動として、自分で考えたことや調査したことを表現する場を設定していく。具体的には、夏休みに調査した社会的事象について、第3者に対しわかりやすく論理的に説明していく活動を取り入れていく。また、説明を受けた者に意見を求め、より多角的・多面的に考察する機会を設けていく。このような活動を通して、「学習の過程」における表現活動をより効果的に実践できるものと考え。

(3) 表現力を高めていく事例

公民科における表現活動には、言葉、論述、絵画、身振り、音楽等が考えられるが、本研究では言葉を話すことに着目して表現力を高めていきたい。そこで表現力を高める事例として、次の2つを例示する。

① 第3者に対してインタビューを行う

インタビューとは、2人かそれ以上の間での会話で、一方が他方に質問をして情報を得るために行われるものである。調査する内容によっては、テーマに関係のある場所に行ったり、人に会ってインタビューをすることが大切である。その際事前にインタビューする内容について、生徒自身が理解していることが前提となる。本研究においては、表1に示した3つのテーマについてインタビューすることを生徒に課題として与える。それぞれの事項について基本的な用語の意味を生徒が理解し、その用語等を使用して大人3人にインタビューを試みることにする。このように「学習の過程」においてインタビューを取り入れることにより、表現力が高まるものと考え。

表1 インタビュー前の事前学習項目とインタビューの内容（照屋民子教諭作成）

テーマ	テーマに関連する用語及び調査事項等	インタビューの内容
死刑制度について	〔用語〕 死刑、終身刑、無期懲役、罪刑法定主義 〔調査事項〕 1, アムネスティ・インターナショナル	1, あなたは死刑制度について賛成ですか？反対ですか？ 2, その理由は？ 3, 「死刑」には凶悪犯罪の抑止力があるといわれていますが、それに対してのあなたの意見を聞かせてください。

	2, 死刑制度を科している国	
日本の労働環境	〔用語〕 サービス残業, 過労死, 非正規社員, 育児・介護休業法, 男女雇用機会均等法	1, この仕事をして約何年目? 2, この仕事のやりがいはい? 3, もし、違う「性」だったら何の仕事をしていたか? また、その理由。 4, 育児に関して、どのような意見を持っているか? 5, あなたに子どもができたとき（もしくはできたら）育児休暇をとるか?
環境税について	〔用語〕 環境税, 温室効果ガス, 京都議定書, 省エネルギー, 汚染者 〔調査事項〕 1, 環境税を取り入れている国はどこか 2, エコビジネスとは具体的にどのようなものがあるか	1, あなたは「環境税」が導入されることについて賛成ですか, 反対ですか。 2, その理由は? 3, アメリカは京都議定書で定められた「-7%」削減の目標を離脱しました。それに対してあなたの意見を聞かせてください。 4, もし、日本が京都議定書の削減目標である「-7%」を達成するために環境税を取り入れることになるとする場合、炭素 1 t あたり、4115 円の税金負担になります。日本の平均的な家計への負担は年間 2100 円（環境省平成 17 年）になります。この負担はあなたの家計にとって高いですか?（支払い不可能か?）妥当か? 支払い可能か?）

② 生徒によるプレゼンテーションを授業に取り入れる

プレゼンテーションとは、第3者に対して情報、企画等を提示して説明する行為を指す。その説明をする前準備として、プレゼンテーションを行う者は説明する内容を整理し、理解しなければならない。そして説明をする際には、具体的、論理的に説明する技術と、調査して得た結論とその結論を導き出した過程を示す表現力が求められる。本研究においては、夏休みの課題として上記①に示した3つのテーマを生徒に課し、事前に作成したグループにおいてそれぞれが調査した3つの課題を検討し、ディベートテーマに沿った20分のプレゼンテーションのための準備を行う。プレゼンテーションで扱うプリント資料作成は、表2に示された語句や注意事項が考慮された作りになっていることが条件となる。グループの代表は、その資料を基にプレゼンテーションを行う。そこで、実際の1単位時間の流れ（略案）を表3に示した（環境税について）。

表2 プレゼンテーションに使用する資料作成時の注意事項（照屋民子教諭作成）

テーマ：日本の労働環境について ①サービス残業 ②過労死 ③非正規社員 ④育児・介護休業法 ⑤男女雇用機会均等法 ⑥終身雇用制度 ⑦年功序列制度 ※日本の労働者におかれている環境がわかる資料を1つ添付する （資料とは、教科書や資料集でのグラフや表、インターネットより調べた表やグラフ、新聞記事等） ※夏休みの課題より女性側の意見、男性側の意見をいくつか載せる
テーマ：死刑制度について ①死刑 ②終身刑 ③無期刑 ④罪刑法定主義 ⑤アムネスティ＝国際連合 ※死刑制度について議論されている資料を1つ添付する（資料とは、教科書や資料集のグラフや表、インターネットより調べた表やグラフ、新聞記事等） ※夏休みの課題より死刑制度導入についての賛成、反対の統計結果を載せる
テーマ：環境税について ①環境税 ②温室効果ガス ③京都議定書 ④汚染者負担の原則 ※国別の二酸化炭素排出量が記されている資料を1つ添付する （資料とは、教科書や資料集でのグラフや表、インターネットより調べた表やグラフ、新聞記事等） ※夏休みの課題より環境税導入についての賛成、反対の統計結果を載せる

表3 生徒がプレゼンテーションを行う際の授業の流れ

	学習内容	学習活動	指導上の留意点
導入・展開 20分	環境税について	(全て生徒の活動) 号令・出席・資料配付 「環境税」についての生徒作成プリントを配布する プリントの間等を解く プリントの解答を行う 夏休みアンケート「環境税を取り入れる事に対して」の賛成・反対意見を扱う 授業の終了を述べる	事前に資料（クラス分印刷用意） (机間指導等) 正答か、他の答えがないかをチェック 聞いていた生徒は拍手
展開・まとめ 30分	環境税についての補足	(全て教師の活動) 今日の授業展開の良い点を言及する 環境税についての基礎的な知識を問うプリント配布 解答の中で補足説明を入れる（生徒は発表） 「環境税についての是非」を小禄高校のアンケート結果と内閣府の世論調査（H19）とで比較する 世論調査より、「環境税」反対の意見を述べ、その根拠を示す 最後に、ディベート実施の日時、グループを確認 号令	(机間指導等) 写真利用 板書（%で示す） 資料引用 プリント記入

2 課題追究について

(1) 課題を追究させる意義とねらい

現行の高等学校学習指導要領では、公民科のすべての科目「現代社会」「倫理」「政治・経済」の内容項目において、課題追究的な学習を行う項目が設けられている。これは、単なる知識理解ではなく、生徒の興味・関心や学習意欲を高め、課題を追究させ問題解決をさせることによって思考力、判断力、表現力などの総合的な力がつくという視点を明確にしているためである。生徒が課題を追究する学習に取り組むことによって、課題設定能力や、調べ方や学び方、表現力などが身に付くと同時に、現代社会の課題などを、生徒自らの課題として受け止め主体的に考える姿勢と態度を育むことが期待されている。資料を集め、様々な観点から追究し、考察・判断して結論を導き出すという学習の過程そのものが重視されている。

(2) 課題を追究させる方法

棚橋健治（2007）は、公民領域における授業の「よさ」について、「子どもが現実の社会問題に直面したときに求められる価値判断力の育成に何らかの形でかかわることになっていること」、「日本が現在直面している論争的な課題を取り上げ、それに正面から取り組むものになっている」という2つの視点を提示している。

課題を設けて追究する学習において大切なことは、学習者である生徒が自己との関わりに着目して課題を設けることから始めることであると考えられる。その課題を政治、経済、文化、倫理など様々な角度から追究していく。こうしてその課題を多くの側面から見ることにより社会的事象に対する見方や考え方を深めることができるようになり、主体的に考えることの大切さに気づかせることができる。

また、教師側から課題を設定する場合には、現代社会に対する生徒の関心を高めさせる工夫が必要である。課題を設けて様々な観点から生徒が主体的に追究し、社会的事象のもつ多面性に着目して総合的に考察することの大切さや、いかに生きるかについて主体的に考えることの大切さに気づかせることが重要である。

そこで、本研究において協力校である沖縄県立小禄高等学校2年生5クラスへ次のような事前アンケートを実施した（表4）。

表4 事前アンケート「『現代社会』の中で扱う單元の中で、どのテーマに興味を持ちか。」

Q次の「現代社会」の中で扱う單元の中で、どのテーマに1番興味を持ちますか。1つ選びましょう。

- ①少子高齢化社会 ②高度情報社会 ③地球環境問題 ④青年期 ⑤エネルギー問題
⑥日本の国際協力 ⑦発展途上国の経済 ⑧現在の民主政治 ⑨日本の経済 ⑩その他

Q次の「現代社会」の中で扱う單元の中で、どのテーマに2番目に興味を持ちますか。1つ選びましょう。

- ①少子高齢化社会 ②高度情報社会 ③地球環境問題 ④青年期 ⑤エネルギー問題
⑥日本の国際協力 ⑦発展途上国の経済 ⑧現在の民主政治 ⑨日本の経済 ⑩その他

その結果がそれぞれ図1と図2である。興味を持つテーマの1番目2番目とも「地球環境問題」が多いため、今回3つの課題のうち1つは環境問題について追究させることとした。

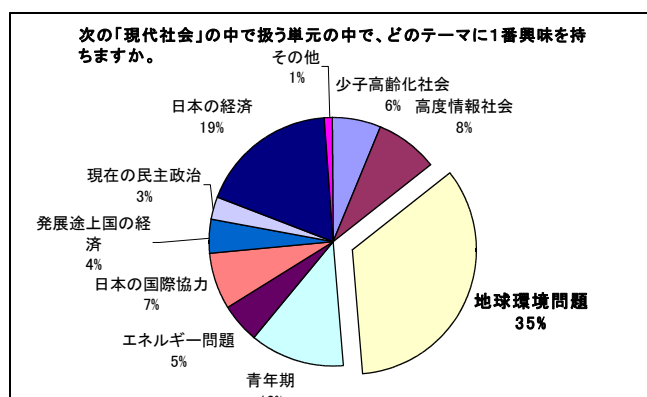


図1 1番目に興味を持つテーマ

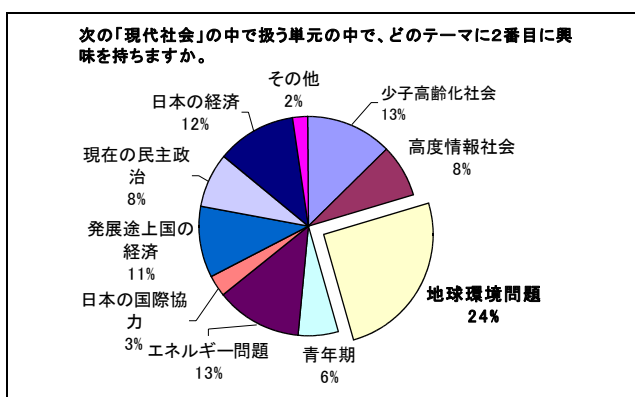


図2 2番目に興味を持つテーマ

(3) 追究させる課題の設定理由

今回、「現代社会」の授業でディベートを実施するに至ったが、そこで扱うテーマを3つに絞った。

テーマを設定する際に、最も注意をはらった事柄は、「議論の余地がある」ということである。どちらが勝つか予断を許さない論題を設定することで、ディベートを展開する中で両意見が活発に議論されることを想定し、設定した。

① 死刑制度について

ディベートではオーソドックスのテーマである。実際に死刑制度を廃止している国が存在する中、日本は制度を維持しつづけている。犯罪が増加する中で、極刑のあり方についての議論を展開させる。またいわゆる「人の命は地球より重い」という言葉を現実には条件つきで奪っている。現代社会の授業で扱う人権と、現実とのギャップをそれぞれの意見を交わしていく中でそれぞれの生徒が死刑制度についての考え方を深めてほしい。

② 労働環境について

日本の労働環境について他国と比較し、実態を把握することを入口とする。その中でも特に男女差に焦点をあて、女性の年齢別労働力率がM字型であることや、家事・育児を多くこなす女性を取りまく労働環境の意識の改善を図るのが狙い。男女がともに性を超えて社会的な役割を協同していく意識を高校生のうちにしっかりと理解・把握し、実践できる環境づくりを行ってほしいと願う。ディベートテーマに「日本はパパの育児休暇を義務化すべきである是か非か？」というタイトルで争う。現在の日本の労働環境からすると奇抜な論題になる気もしたが、実際に男性職員の育児休暇を義務づけた地方自治体が存在することで肯定側の主張材料が確保されたので、あえてこのテーマでディベートを行いたい。

③ 環境税について

事前に行ったアンケートより、現代社会の扱う項目の中で「地球環境問題」に対する意識が高いことが結果より読みとれた。そこで、環境に関するテーマの中より、日本政府が導入を検討している「環境税」を取り入れることに対し、環境に対する姿勢を再考察していきたい。話題性がある論題設定にしたが、導入についてまだ決着がついていない中で、日本が果たす国際社会への姿勢を教室から考えていきたい。将来を担う生徒達の見解をお互い交わす議論と、これから導入に向けてニュース等で取り上げられていく様々な意見を耳にしていける中で、社会を構成する一人

として今後も自らの問題として考えてほしい。

それぞれのテーマに関する意見が、夏休みの課題に出した身近な大人へのインタビューで賛成意見・反対意見としてあがってきている。両意見、しかも大人の目線からのそれぞれの問題に対する意見を目の当たりにした時、多くの意見が存在することで世界が広がる。

3 ディベート活動を取り入れる意義

ディベートは、ある論題について賛成か反対かのどちらかだけで中間的な判断は存在しないという設定で、自分自身の個人的な思想信条や価値観は挟まず、賛成か反対かのどちらか一方の与えられた立場に立って論理的かつ冷静に一定のルールに従って進める論争である。古くから、日本社会では「和」の精神が尊重され、意見を戦わせることを好まない風潮があった。しかし、最近では国際化の時代を迎えて、自分の意見を論理的に表現する必要性から、ディベートが取り入れられている。

木村真冬（1994）は、社会科におけるディベート学習の意義として次の4点をあげている（表5）。この4点は公民科に置き換えても、意義として成り立つものとする。

表5 ディベート学習の意義

①討論の準備と実践をととして、自己の考えを明確にするとともに、自分とは異なる考えや立場に気づき、多角的なものの見方や、判断力を養うことができる。
②論題に対して論拠を示す資料を収集、選択し、情報を効果的に活用する力をつけさせることができる。
③肯定派、否定派において必ず発言の機会があることから、自己の意見を表現する力を養うことができる。
④討論者も判定者も論題に対して関心を持ちやすく、意欲的に学習に取り組むことができ、社会的事象への興味を広げるきっかけとなる。

正確に聞き、論理的に考え、明快に伝える力が不足していると考えられる現状においては、ディベートを行う意義は大きいと考える。

Ⅲ 指導の実際

実践事例 ……………高等学校の実践より 沖縄県立小禄高等学校教諭 照屋民子

1 単元名 大単元：第2編 現代の社会と人間としてのあり方生き方

中単元：第3章 現代の経済社会と私たちの生活

小単元：⑩ 雇用とこんにちの労働問題

2 指導計画

	内容	学習内容	時間
1	夏休みの課題	夏休みの3つの課題（「死刑制度について」「日本の労働環境について」「環境税について」）について多角的・多面的に調査する。この課題がディベートのテーマとなる。	夏休み期間
2	簡易ディベート	「男が得か？女が得か？」について自由に意見を述べ合いお互い議論させる。	1
3	ディベート前準備	グループ分け、テーマ分け、ディベートの意義説明	1
4	ディベートの方法を確認	ディベートの様子をVTR「ディベート甲子園」で確認	1
5	資料作成	プレゼンテーション用の資料を作成する。資料作成については、穴埋め式、書き込み式、写真・グラフの利用法について留意する。	2
6	生徒による授業（プレゼンテーション）	各グループが作成した資料を基に、各テーマ1人20分の授業（プレゼンテーション）を実施する。	3
7	ディベート作戦時間	クジで選択された、3つのテーマの肯定側または否定側について、各グループでディベートに挑む作戦を練る。	1
8	ディベートの実施	「日本は死刑制度を存続させるべきである」 「日本はパパの育児休暇を義務化すべきである」〔本時〕 「日本は環境税を取り入れるべきである」	1 1 1

3 授業設定理由

（1）教材観：教科書の内容と関連したテーマでディベートを行うことにより、生徒の知識を深めるとにつながる。一番の狙いは、生徒自らを表現する力をつけてほしいということで、特

に「生徒による授業」と「ディベートの実施」では生徒が授業を展開していかなければ成り立たないような流れにした。

(2) 生徒観：これまで授業を通していく中で、調べたものを人前で発表する、自分の思いを堂々と周囲に表現する機会をそう多く設定できていない点が気になっていた。授業は発表こそはするが、意見を言うことは多くない。どちらかというと受け身でこれまでは授業が展開されていたが、ディベートを取り入れることで調べる力、発表する力、意見を堂々と言う力が身についてほしい。

(3) 指導観：「議論の余地がある」ということである。どちらが勝つか予断を許さない論題を設定することでディベートを展開する中で両意見が活発に議論されることを想定し、設定した。

4 本時の指導目標

- (1) これまでの調べ学習や課題を踏まえ、テーマの「肯定側」「否定側」に立ちディベートを行う
- (2) ディベートの司会者、タイムキーパーを生徒が行い、全て生徒が主となり授業を展開する
- (3) 聞き手の生徒はクラスメイトがディベートを行うのを評価し、さまざまな意見を聞く機会にする

5 評価規準

ディベートを展開する生徒は観点別評価の「技能・表現」に、ディベートの聞き手になる生徒は「関心・意欲・態度」に絞って評価を行う。

関心・意欲・態度	技能・表現
①ディベートの流れを把握し、ディベートをする側のテーマに関心を寄せて聞く姿勢ができているか。	①立論で調べてきた内容をもとに説得力のある主張が行えるか。
②ディベートの内容を公平に判断することができるか。	②反対尋問において、反する立場にいる相手に対し積極的に質問を行えるか、またその際に冷静な態度でできるか。
	③最終弁論では、ディベートの流れを把握しながら自らの立場からの弁論を行えるか。

ディベートの聞き手になる生徒には司会者よりワークシートが配布される。そこでいくつかの項目を数字で判定し、その結果がディベートの勝敗決定及び個人加点になる方法をとった。

6 本時の学習指導

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価				評価の方法
				関心・意欲・態度	思考・判断	技能・表現	知識・理解	
導入・展開	ディベート	号令 (司会) ・ディベートの流れの説明 ・資料配付 ・ディベート進行 (ディベートのおおまなか流れ) ①肯定側立論・・・・・・・・・・3分 ☆準備時間・・・・・・・・・・1分 ②否定側立論・・・・・・・・・・3分 ☆反対尋問の準備時間・・2分 ③否定側反対尋問・・・・・・・・7分 ☆反対尋問の準備時間・・2分	事前にワークシートをクラス分印刷用意 ※準備時間等で、ワークシートへの記入を促す	◎				○＝ディベート者 ◎＝聞き手の生徒 ◎司会者の説明を聞き手は聞き、流れを理解する ○立論がきちんと述べられているか ○表現の仕方は聞き手へ伝わるよう工夫されているか ○質問および回答の
40分						○	○	

・ ・ ・ 生徒		④肯定側反対尋問・・・・・・ 7分 ☆準備時間・・・・・・ 3分 ⑤肯定側最終弁論・・・・・・ 2分 ☆準備時間・・・・・・ 2分 ⑥否定側最終弁論・・・・・・ 2分 ⑦判定，まとめ時間・・・・ 4分 計 38分 ・ワークシート回収		◎	○ ○ ○	仕方は感情的になっていないか ○質問をきちんと把握し，適切に答えられるか ○最終弁論で聞き手へ再度納得させる内容を発言できるか ◎聞き手は全体を理解し，マークシートへの記入を公正に行う
ま と め 1 0 分 ・ ・ ・ 教師	労働問題（女性に関する労働問題）についての補足	今日の授業展開の良い点を言及する ・資料を用いていたか ・下準備がきれいにできていたか ・発言の際の表現の仕方はどうだったか スウェーデンの例，カナダ：ケベック州の例をあげ，男性が育児休暇を取る際の経済的な公的援助についてM字型（女性労働力率）をどう改善してくか問う 育児についてのディベートより，両性がお互いに協力してよりより社会をつくりあげていく視線，思いやり等をもつきっかけになるようまとめる 最後に前回のディベート勝敗結果を発表 次回のディベートの日時，メンバー確認 号令	夏休みアンケート結果利用 前回のワークシート利用		○	○＝生徒 ○ ディベート者は自分たちのディベートがどうだったか省みる ○ 他国との比較，アンケート結果より現状把握を行う これからの社会を支え，自分の意見を持てる人間になるために，これから必要なことを考えるきっかけになるとよい

7 検証授業の考察

検証授業の考察についてアンケート結果を基に述べていく。なお，アンケートは2学年5クラス（事前回答者191名，事後回答者177名）に実施した。

(1) テーマについて調べ，まとめることについて

事前アンケートによると，『現代社会』の授業で，自分の考えたことや調べたことをレポートや報告書にまとめたりすることは好きですか」という設問に対して，「好きだ」「どちらかといえば好きだ」と答えた生徒は事前アンケートで21.5%であった。しかし，夏休み課題，ディベートテーマの授業用プリント作成を経て，事後アンケートでその数値は41.8%と20%近く上昇した（図3）。事後アンケートで「ディベートに関する資料を作成するのは大変だった」と答えた生徒が80.2%いたにも関わらず（図4），「好き」「どちらかといえば好き」と答えた数値がこれだけ上昇したことは，これまでの書き込み式ノートやプリント等で授業の内容を把握していた生徒が，自らのアイデアで課題に取り組むことでまとめることに関心を示したと考える。

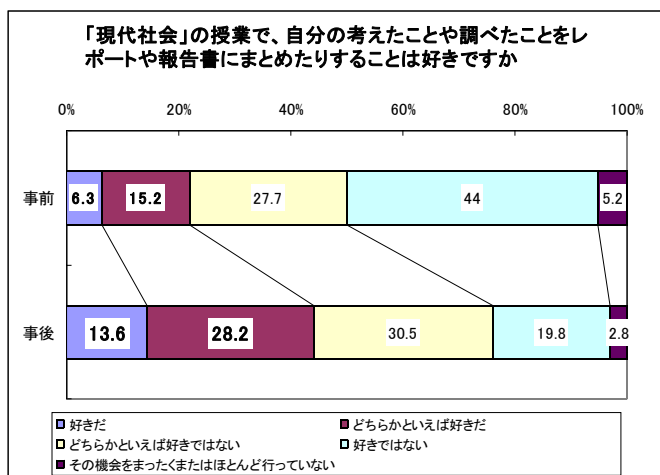


図3 レポートにまとめることは好きですか

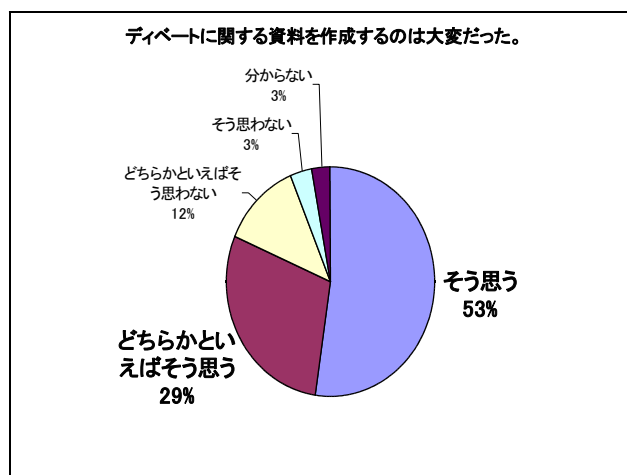


図4 資料作成は大変だった

(2) 自ら調べたものを表現することについて

事前アンケートで『現代社会』の授業で、政治の問題について討論する（話し合う）学習は好きですか』『現代社会』の授業で、経済の問題について討論する（話し合う）学習は好きですか』というそれぞれの設問に対して、「好きだ」「どちらかといえば好きだ」と答えた生徒の割合が30.9%、33%と回答した。今回ディベートを通して自ら調べたものを表現することにより、事後アンケートでそれぞれの数値は53.5%、53.7%とどちらも20%以上上昇した（図5、図6）。それは、事後アンケートの「ディベートで自分の意見を主張することが前よりできたと思う」の設問に対し、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」が59.9%を示したことより（図7）、ディベートを通して表現する機会を得、関心を示すようになったと捉えることができる。

(3) ディベート活動で得られたことについて

事後アンケートで「ディベートで、他人の意見を聞く姿勢が養われたと思う」という問に「そう思う」が77.9%を示した（図8）。これまでは自らの意見を主張する、というよりも受け身で授業に参加することが多かったと考えるが、クラスメイトの意見を聞く機会得、その姿勢が養われたのはディベートを通して得られた結果である。また、「今回、ディベートを通しグループの仲間と上手にコミュニケーションがとれたと思う」に至っては80.2%の生徒が「そう思う」と答えた（図9）。グループを組む際は、各クラス自由にメンバーを組ませた。もともと気の合う仲の良い者同士でグループを組んだだろうにも関わらず、事前にディベートでの役割や相手側からの質問に答える準備の際に、より密になって話し合った結果であろう。

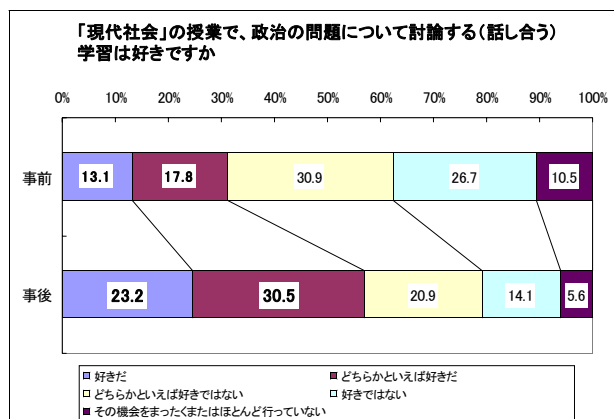


図5 政治について討論するのは好きか

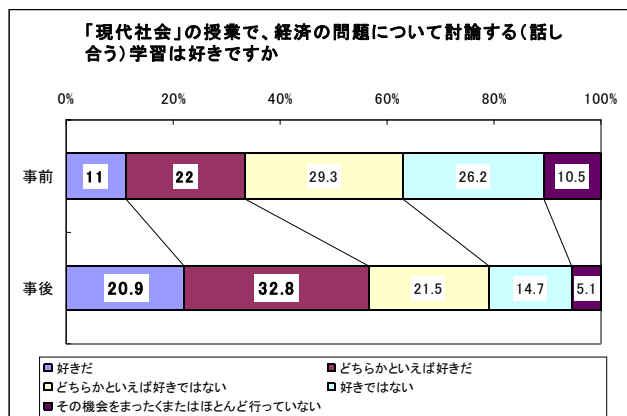


図6 経済について討論するのは好きか

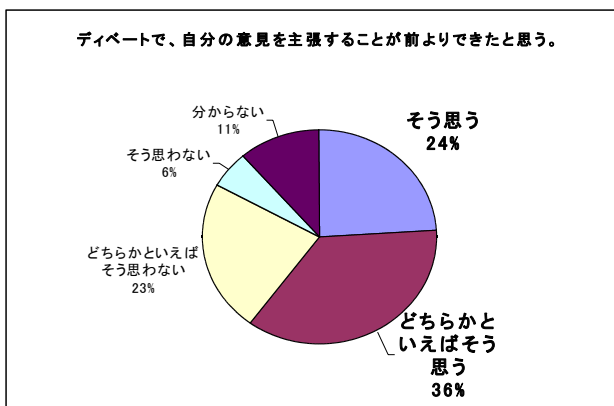


図7 意見を主張することが前よりできた

最後に、「今回、『現代社会』の授業の中でディベートを行ってよかったと思う」という設問に84.2%の生徒が「そう思う」と答えた（図10）ことは、これまでの授業方法を再考する機会になった。生徒が主役の授業を、果たしてどれだけそれを念頭において行っていたかという考えに迫り着き、これからの授業方法を試行錯誤しながら、生徒が表現力を身につけることのできる授業を展開したいと思う。

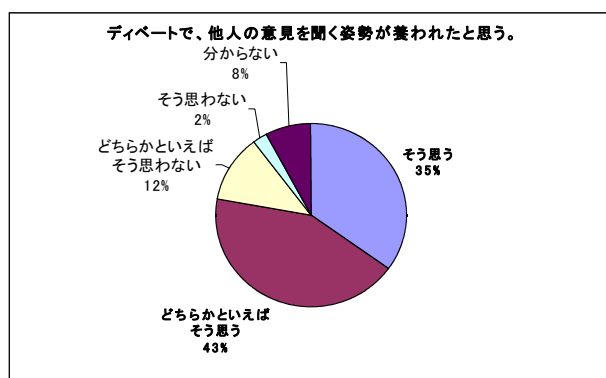


図8 他人の意見を聞く姿勢が養われた

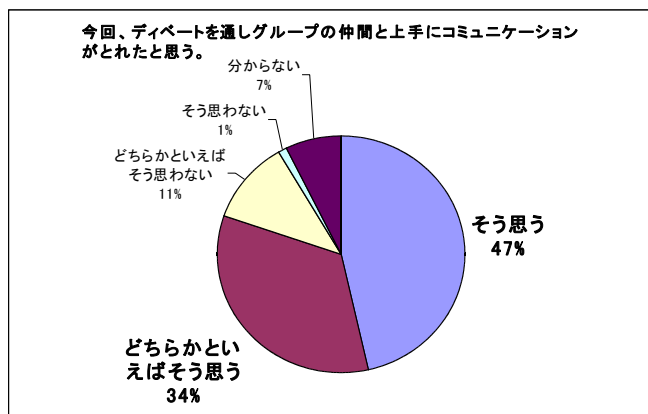


図9 仲間とコミュニケーションがとれた

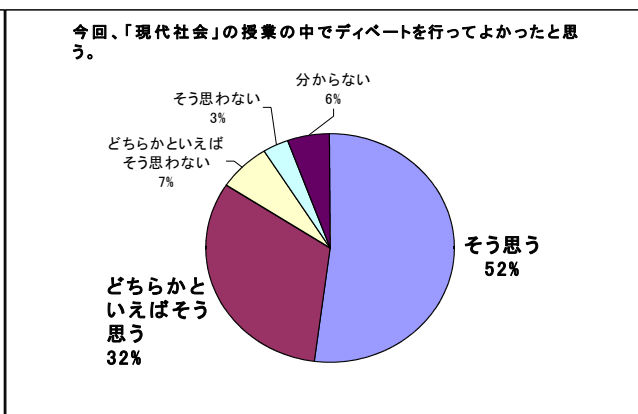


図10 ディベートを行ってよかった

(4) 生徒の感想

ディベートの授業を計画し、実行に至るまでは生徒に高い要求を出し過ぎてはいないかと気になりながらの実施であった。しかし、下記のように大方の生徒が前向きで、発表することの楽しさや調べ学習、グループ学習を楽しめた結果が伺える。ディベートをするに至り、夏休みの課題（3部）、授業用資料（1部）、生徒による授業、ディベートと主体的に動かなければ進まない内容ばかりで、生徒からすると大変だったにもかかわらず、生徒達から「またやりたい!」との意見が多数聞けた。中には、ディベート前に作戦タイム（1時間）を設けたのにもかかわらず、放課後やHR担任にお願いしてLHR等で調べる時間に当てている生徒もいて、積極的に動いてくれた。それは、ディベートに勝敗をつけることで一生懸命になったのだろうと分析する。また、数名の生徒から、「グループが仲良くなった」という意見等もあり、協調性や団結を生み出すことになったのでは、と感じた。他の先生方からは「ディベートなんてできるの?」という意見もあったが、生徒達は立派に取り組み、成功したと言える。

表6は今回の研究全般を振り返っての生徒の感想である。一概には分類できない感想もあるが、4つの視点からまとめた。

表6 生徒の感想（抜粋）

【関心・意欲・態度に関すること】
- ディベートは普段とはちょっと違う授業で難しかったけど、やってよかったと思う。グループの意見をみんなの前で話すことは大切だと思う。 - 図書館などを利用して調べる授業は楽しかった。 - ディベートをやって、自分の苦手なところがわかったからよかった。次の機会があったら、もっとちゃんとやろうと思った。 - 色んな人の意見が聞けてよかった!!自分の意見も沢山言えたし、もっと色んな事について討論できたらいいなと思った。またディベートしたいー! - 学んだことは、今自分たちがあまり関心を示していなかったことをディベートにすることで、関心を持つことができた。それに、普段発表しないけど、ディベートすることによって多く発表することができた。 - 自分の意見を人に伝えるのは難しいけれど、一つのこととてみんなと熱く語りあえるのはとって

も楽しかった。またやりたい。

- ・一つの問題に対して、みんなで話し合うことの良さ、こんなに熱くなれる自分があるんだなと思った。グループの人とより仲良くなれた気がする。

【思考・判断に関すること】

- ・みんないろいろ主張あって面白かった。是非もどっちの言っていることも納得できてすごかった。
- ・ふだん話さない事を、話し合う場が出来たことによって考えることができた。
- ・ディベートというものを初めてやって、すごい政治のことについてわかりました。やって良かったことは、発表とか頑張ったことです。とても感動しました。楽しかった～。
- ・ディベートを通してそれに必要な情報などを深く調べるようになって、いろいろな事を広い視野でみることで良くなったな、と思いました。
- ・ディベートを通して、いろんなことがわかったり、討論したり自分の意見を言えてよかったと思う。

【技能・表現に関すること】

- ・自分の意見を言える機会があってよかったと思う。自分の意見とは逆の立場から意見を言う事も時には大事だと思います。中にはディベートをやる事をすごい面倒くさそうにしている人も、ちょっとは協力してくれないかなあ、と思った。
- ・他人のいろんな意見が聞けたと思うし、自分も意見を言えたので、すごく良かったなあと思いました。それと、まとめたり、作成したりすることはとても面白かったです。
- ・実際にやってみて、自分の意見を書いて、まとめて、整理してそれを相手に伝えるのはとっても難しいことなんだなあと思いました。でも、少し楽しかったです。
- ・時間内に自分のいいたいことをまとめて発表することは、とても難しかったです。でも、いろんな人の意見を聞いてよかったです。
- ・自分の意見が言えたり、みんなで協力して発言することができてよかった！あとみんなのも聞いてて、いろいろ納得できたし、政治のこととか経済のこととか分かるようになった！ディベートを通して自分の調べたことを発表できてよかったー！
- ・発言する楽しさがわかった。それに、自分たちが説明できるように調べたから、なんとなくできた。
- ・積極的に発表する人が多くなっていて、良かったと思います。
- ・ディベートを通して、自分たちが調べてまとめたものを発表できて、とても良かったと思います。意見を言ったり、違う意見を聞いたりなど、とても貴重な体験ができました。
- ・人前でしゃべることの大切さや自分の意見を言うことの大切さを学びました。またグループのまとまりが良くて、とても良かったです。
- ・今回ディベートを通して学んだことは、調べた資料をまとめて、分かりやすく、かつ時間内に伝えることの難しさと、相手の主張に対しての応答を考えるのが大変だったことです。私は立論をやったのですが、自分で調べた資料をまとめるのは好きだけど、発表するのは苦手なので、今回は立論の体験ができて良かったです。
- ・自分の意見を通すためには、資料や証拠を見せて説得することが大切だと思った。

【知識・理解に関すること】

- ・ディベートを通して知らないことを知ることができてとても良かったです。
- ・普段あまりTVとか観ないから、政治とかぶっちゃけあんまわからなかったけど、授業を通したらいろんな事が見えた気がしました。ディベートをやって自分が知らなすぎた日本の裏側が少しだけ見えた気がして、何気楽しかったです。
- ・環境税のことがよくわかったし、他のグループの発表を聞いてたりして少しはわかった。
- ・自分の意見を相手や周囲の人に納得させるには重要な資料などが必要であることがわかった。
- ・死刑制度の肯定側をやりたいかった！みんなの意見が聞いてよかった。説得力を身につけるためには、いろんな知識が必要なんだなあ～と改めて感じた。

- ・ 7人いれば、7人のいろんな意見とか、考え方とかいろいろ知れて、とても面白かった。
- ・ 教科書に書かれていない細かい部分まで知ることができてとても良かったです。
- ・ ディベートのテーマをより詳しく知ることができて今まで知らなかったことや、これからの問題もわかった。
- ・ 3つのテーマについての知識が増えた気がします。
- ・ パパの育児休暇について学んで、今の現状などが良くわかって、外国と日本の違いが分かった。たくさんの人の意見も聞けて、とても楽しかった。

8 授業実践を振り返って

表現力を高める授業、というテーマでディベートを授業に取り入れた。これまでもディベートを授業に取り入れたことはあったが、ディベートまでの過程に段階を組んで実践するには至らなかった。しかし、この機会にディベート前の調べ学習やインタビュー等で他人の意見を集めることをはじめとし、資料作りや生徒による授業展開など、新しく試みたことが多い。生徒へ提示する資料作りに多少時間や労力を要したが、生徒がテーマを把握し、自らの問題として主張できるまでの手助けになったと思う。実際に、ディベートでは自らの意見をアンケート結果や調べてきた資料等を提示することで聞き手を説得させることを行っていた。相手への質問に直ぐに答えたり、鋭い尋問を投げかけることで活発な討論になる場合もあった。今回はディベートという形での表現力を高める実践になったが、私の意図する授業実践はこれからも多くの課題を超えなければならないと痛感している。まとめることやディベートをすることに生徒が関心を示してくれたことはありがたいが、政治や経済についての情報に自ら触れたい、と感じさせることが今の最終目的である。授業前に予習を行う・ニュース番組を観る・新聞を読む、といった姿勢を養うことで、「現代社会」を勉強すれば社会の一員としてより社会を考えることばかりでなく、自分の普段の生活や社会生活で役立つことを実感させることのできる授業を目指して今後も励んでいきたいと考える。

IV まとめと今後の課題

本研究は、「公民科における表現力高める授業」をテーマに、課題追究に基づいたディベート活動を通して取り組んできた。その成果と課題は以下の通りである。

1 成果

科学的な追究の過程や思考過程を論理的に表現できるような工夫を授業の中に取り入れることによって、生徒の学習意欲は高まってきた。課題追究においては、新聞やインターネット、図書館の資料、更にはインタビュー等を経て得たデータを分析し、グループ学習での議論を通してより深く追究することが出来た。これら一連の活動を体験することで、今後、社会的事象等の課題追究においては様々な手法を用いて追究していくことが可能となろう。そして、ディベート活動を通して、追究した諸課題の科学的な分析を根拠に、自分の意見として自信を持って表現できたことは大きな成果である。また、ディベート活動に参加することで、自分の考えを明確にすること、異なる考えや立場に気づくこと、多角的な見方や考え方を養うことが出来たと考える。今回ディベートを体験した生徒の約8割強がディベートを行ってよかったと答えていることから、表現する機会を生徒に与えていくことで、意欲的に学習に取り組み、社会的事象への興味・関心を広げるきっかけとなるであろうと考える。

2 課題

今後の課題としては、生徒が自らの独創的な考えを自由に表現できる学級の雰囲気を作ることや、生徒の実態にあった表現活動の工夫、年間指導計画等での計画的な取り組み等が挙げられる。また、表現力の育成に関しては、普段の授業から生徒が表現できる場を設定し、継続的に指導することが重要であると考ええる。

〈主な参考文献〉

- 有元秀文編 2008 『必ず「PISA型読解力」が育つ七つの授業改革』 明治図書
 谷口和也・宮崎正勝他 2007 『社会科教育 11月号』 明治図書
 佐藤喜久雄・田中美也子・尾崎俊明共著 1994 『教室ディベート入門』 創拓社

数学的な考え方を育成する指導の工夫 — 三角関数における問題解決的な学習を通して —

島 仲 利 泰

天 久 晴 令

I テーマ設定の理由

平成18年12月に教育基本法が約60年ぶりに改正され、これからの教育の新しい理念が定められた。この改正教育基本法や一部改正された学校教育法においては、「生きる力」を支える「確かな学力」、「豊かな心」、「健やかな体」の調和を重視するとともに、学力の重要な要素として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲が示されている。高等学校学習指導要領解説数学編においては、教育課程審議会「中間まとめ」の数学科の現状と課題で、「数量や図形についての基本的な知識や技能などについては比較的身に付いているものの、数学的な考え方を生かし自分から工夫して問題を解決したり判断したりすることについては十分とは言えない状況にある」ことが示されている。また、数学教育で「生きる力」を育むために、特に、創造性の基礎を培うことを強調している。その創造性の基礎として、基礎的・基本的な知識・技能の習得を基にして多面的にものを見る力や論理的に考える力などを例示している。学習指導にあたっては、「主体的に問題を解決する活動(数学的活動)」を通して、「学ぶことの楽しさや充実感」を味わい、数学の学習の意義が理解できるように重視することが求められている。

しかし、これまでの実際の指導では、問題の解法を効率よく伝えることのみが強調された授業になりやすく、問題を解く過程における生徒の構想の練り合いの場の設定や知識・技能を活用する学習活動の充実を重視できなかったことが多かったように思われる。生徒の主体的な学習を促し学習意欲を高め、学ぶことの楽しさや充実感を味わわせるためにも、教師主導の教え込むという指導を見直し、数学的活動を重視した場面を取り入れた数学的な考え方を育成する指導を検討する必要がある。なお、今日、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」とともに「その知識・技能の活用」が重視されているが、活用型授業については、新しい取り組みということではなく、活用の視点からの授業づくりに立ち、これまで以上に質の高い授業が求められているものと捉えている。

そこで、本研究では、問題解決的な学習を通して、生徒に三角関数における問題づくりや既習の知識や技能を活用させ発展問題への取り組みをさせる。また、その過程で生徒一人一人が取り組みを振り返る自己評価活動を位置づけ自分の達成度状況を確認する取り組みを行う。これらにより、生徒一人一人が主体的な問題への取り組みのなかで数学的な考え方を育成することができるものと考え、本テーマを設定した。

実践事例として、県立那覇国際高等学校での取り組みを報告する。

〈研究仮説〉

三角関数の学習で、問題づくりを取り入れた問題解決的な学習を通して、学ぶことの楽しさや充実感・達成感を味わわせ、数学的な考察の方法を体得させて、既習の知識や技能を活用し発展問題への取り組みを可能にさせることにより、数学的な考え方を育成することができるだろう。

II 研究内容

1 数学的活動

平成11年に改訂された学習指導要領では、その目標に「数学的活動を通して創造性の基礎を培う」という文言が新しく加えられた。数学的活動は、観察、操作、実験・実習などの外的な活動と、直観、類推、帰納、演繹などの内的な活動の二つに分けてとらえることができ、これらの活動が相互的かつ循環的に作用し、生徒が知的充足を高めていくことが大切である。高等学校ではさらに、図1のような思考活動を数学的活動ととらえ設定した数学的な課題を既習事項や公理・定義等その過程で見

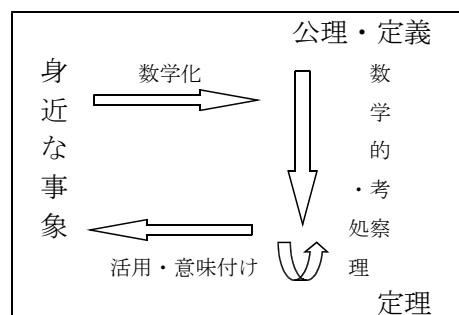


図1 数学的活動

いだしたいろいろな数学的性質を論理的に系統化し、数学の新しい理論・定理等を構成する活動等としている。

また、平成20年1月17日の中教審答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」の中で、算数、数学における改善の基本方針の中のひとつに「算数科、数学科については、7つの課題を踏まえ、小・中・高等学校を通じて、発達の段階に応じ、算数的活動・数学的活動を一層充実させ、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付け、数学的な思考力・表現力を育て、学ぶ意欲を高めるようにする。」と示され、数学的活動を一層充実させることが求められている。

数学的活動は、基礎的・基本的な知識・技能を確実に身に付けるとともに、数学的な思考力・表現力を高めたり、数学を学ぶことの楽しさや意義を実感したりするために、重要な役割をはたすものであると考える。

2 数学的な考え方

松原元一(1990)によると、「数学的に考えるとは、課題に当面しこれを体制化し構造化する思考段階において、対象を集合としてとらえ、関数を設定し、当面の課題の解決に導くことである。」と説明している。また、「数学的に考えるとは、課題に直面したとき、それが数学的に解決すべきものであることを見抜き、数学眼(過去の経験すなわち学習)を働かせて解決することである。」ととらえている。これらをふまえ、数学の学習において、生徒に基礎知識を学ばせると同時に、数学的な考察の方法を体得させることが大切であると考え。そこで、生徒に解決すべき課題を与え、「自分なりの考え」をもたせ、筋道を立てて考え抜かせ、これまで得た知識や技能を活用して、自ら問題をつくり、その解答に取り組むという問題解決的な学習を取り入れる。その活動における解決にいたるまでの思考過程をふり返し、「自分なりの考え」を「根拠を明らかにし筋道を立てて考える力」に育てる場を設定した授業を展開することによって、数学的な考え方を育成することができると考える。

3 問題解決的な学習活動

(1) 問題解決的な学習について

高等学校学習指導要領解説数学編では、「数学的な見方や考え方には、大きく分けて数学が構成されていくときの中心となる見方や考え方と、問題解決の過程などにおいて数学を活用していくときの見方や考え方とがある。」としている。後者は、問題解決等に当たり、問題を数学の対象としてとらえ、直観、類推などを用いて、いろいろな角度や観点から問題を数学的に考察、分析・処理したりするときの見方や考え方である。つまり、数学的な考え方を育むためには、問題を数学的に考察、分析・処理したりする場の設定が必要となってくる。図1で示した数学的活動は、問題解決的な学習との共通点が多いと考え、数学的な考え方を育成することを重視し、問題解決的な学習を取り入れる。問題解決的とは、文章題や問題を解くのみでなく、主体的に問題に取り組み、既習の知識や技能を生かして、新しい問題・課題を解決し、さらに新しい知識や技能を身につけていくことである。三角関数における問題づくりを数学的活動としてとらえ、授業形態に生徒自らが問題づくり・解答する時間を保障し、その思考過程をふり返る場面を設定する。また、生徒が他の生徒との相互作用を通して学びあい、より考えを深め、次の発展問題へ取り組めるようにする。このような生徒の主体的な活動において、自己評価を行い、自分の達成状況を確認できる指導形態を取り入れる。

(2) 問題づくりについて

表1 問題づくりを取り入れた授業の有効性

竹内芳男・沢田利夫(1984)によると「生徒の問題づくりを取り入れた指導によって、数学的な考え方の中で、特に一般化や類推の考えを伸ばすことができる。数学の問題をつくるということは、数学的活動であり、創造的な活動である。」と説明している。また、問題づくりを取り入れた授業の有効性として、次の点を挙げている(表1)。	① すべての生徒が積極的に授業に参加する。
	② 自分の力に応じてだれもが精いっぱい学習に励む。
	③ 数学に興味を感じる。
	④ 発見の喜びが味わえる。
	⑤ いつでも問題を発展させる態度がつくられる。
	⑥ 個別学習と集団学習の調和した授業が展開できる。

これまでの授業では、生徒は問題を与えられ、それを解くといった場合がほとんどであった。したがって、生徒にとって問題は、あくまでも他から与えられたできあいのものであり、しかも解いてしまえばそれで事終わるもの、あとは復習して理解度を深めるだけであった。しかし、このよう

な問題の扱いだけでは、生徒全員が、問題を自分のものとして受けとめることはまれだと考える。生徒に、問題を自分のものとして受けとめさせる手だてとして、問題の扱いを生徒が自らつくり、解いて自分の理解度を診断できるような場を設定する。つまり、問題の扱いを受身的なものから能動的なものに転換するのである。生徒に問題(この問題を原問題とする)を与え解答し理解させる。その問題の構成要素となっている部分を、類似なものや、より一般的なものに置きかえたり、その問題の逆を考えたりすること等を通して、新しい問題をつくり、自ら解決しようとするような主体的な学習活動を展開する。問題をつくり、それを解くことによって得られた知識は、必ずしも新しい知識とは限らないが、原問題についての深い理解をもたらすことが期待でき、このような学習活動の展開により、数学的な考え方を育成することができると考える。

(3) 問題解決的な学習の展開

数学的な考え方を育成し、生徒の学力向上を図るには、生徒に数学的活動を主体的に自分のものとして受け止めさせ、既習の知識や技能を活用して、生徒が自分で問題をつくり、それを解いて、その解答と思考過程等をふり返り、自己評価を通して自分の達成状況を確認し、次の段階の学習へ発展していくことが重要である。そこで、竹内芳男・沢田利夫の理論の典型的な例をもとに、問題解決的な学習の展開を右のようにまとめた(図2)。

① 練習問題(原問題)の理解

竹内・沢田によると、「原問題としては、生徒の学力に適合し

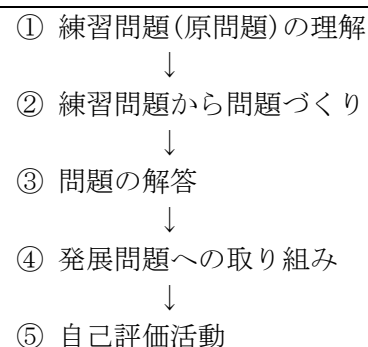


図2 問題解決的な学習の展開

単純で理解しやすく、問題の構成要素が多様に変え得るもので、教科書の中にある日常の授業の流れの中に位置づく内容のものが望ましい。」としている。そこで、原問題として、表2の三角関数を含む関数の最大値・最小値に関する問題を設定する。この問題は、「変更可能な条件」が含まれており、また、「三角関数」と一学年で学習した「二次関数」を関連づける基本的なもので、両者を統合的に捉えさせ、学習を深化・発展させることが可能であると考えられる。

表2 原問題

$0 \leq \theta < 2\pi$ のとき、関数 $y = \sin^2 \theta + 2 \sin \theta$ の最大値と最小値を求めよ。
また、そのときの θ の値を求めよ。

② 練習問題から問題づくり

原問題をもとにして新しい問題をつくるよう発問し、まず個別に取り組ませ、生徒の反応を観察する。もしつぐれない場合には、更にくだいた発問や例示するなど、助言を与える。竹内・沢田によると指示を最小限にとどめ、生徒の思考の自由性を保障する発問例は図3の通りである。

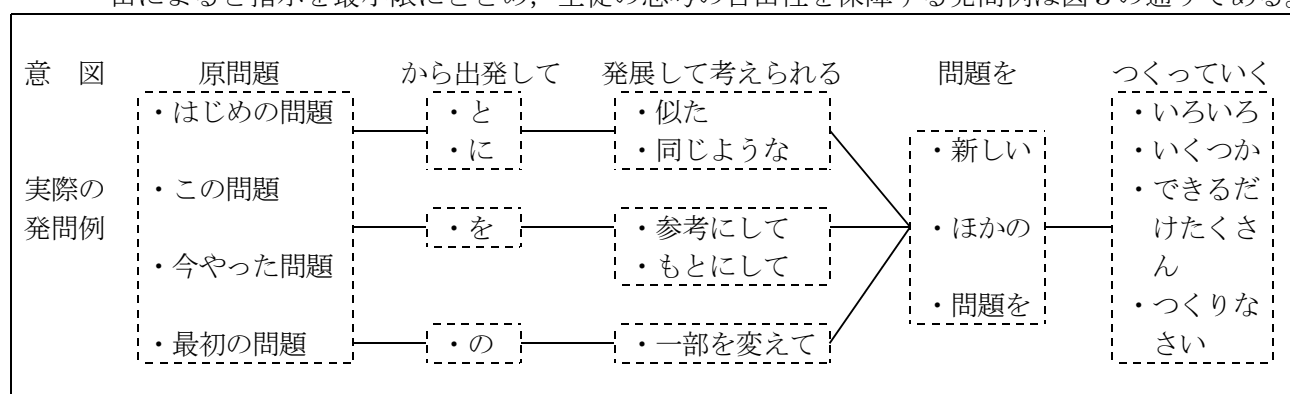


図3 発問例(竹内・沢田)

原問題をもとに、自分なりの新しい問題をつくらせるこの段階においては、生徒に「変更可能な部分に着目する」という問題づくりの手法を理解させる。問題づくりの際における生徒の反応は、既習事項に大きく左右される。つぐれない場合には、発問を通して、生徒が既習事項と結びつけて操作をおこないやすいように、着目しなければならない要素「定義域の設定(θ の範囲)・三角比の値の範囲・三角比の相互関係・二次関数の最大値と最小値」等をあげ、随時確認していくようにする。

③ 問題の解答

生徒がつくった問題から1題を採用して、板書し、解答する。その後、採用した新しい問題が原問題をどのように発展させたのかを生徒に発表させ、生徒の問題づくりにおける思考過程を振り返る場をしっかりと設定する。原問題と新しくつくった問題とを比較検討することによって、問題の内容・構造をより深く理解できるようにする。

④ 発展問題への取り組み

発展問題として、大学入試問題を取り入れる。その際、最初は発問を通しての支援はおこなわず、生徒の思考過程におけるつまずきや、変容状態を机間指導において把握する。個に応じた指導を意識し、うまく処理できていない生徒へは、問題づくりにおいて確認した着目しなければならない要素「定義域の確認(θ の範囲)・三角比の値の範囲・三角比の相互関係・二次関数の最大値と最小値」等をあげ、発問を通しての支援をおこなう。一斉に解答する際には、原問題のもつ数学的内容と関連づけて、発展問題への取り組みの深化を図る。

⑤ 自己評価活動

授業は、主として数学的な考え方や処理のしかたの一面を経験させることをねらいとしたものである。そこで、問題のつくり方や発展のさせ方、自分で問題をつくる際及び発展問題への取り組み状況を、アンケートを利用し、生徒一人一人の思考過程のふり返りを確認することにより、数学的な考え方についての生徒の変容を捉えたいと考える。

(4) 問題解決的な学習の評価

評価に当たっては、生徒が問題を解くのみでなく、主体的に問題に取り組み、既習の知識や技能を活かして、新しい問題・課題を解決し、さらに新しい知識や技能を身につけていこうとする意欲や態度面に重点をおく。問題づくりを取り入れた指導によって、数学的な考え方の中の、特に一般化や類推の考えを伸ばすことが目標であるので、学習の結果のみではなく一人一人の生徒の学習過程(図2)をつぶさに観察し、積極的に評価していくことが大事であるとする。授業のヤマ場である問題づくりにおいては、表1に示した授業の有効性を参考に評価を考える。このように問題を発展させる授業は、主として「数学的な考え方や処理のしかたの一面を経験させる」ことをねらいとしたものである。しかし、この学習活動はもとより「基礎的・基本的な知識・技能の習得」を前提としており、生徒の主体的な活動を取り入れることで、得られた知識は、必ずしも新しい知識とは限らないが、問題についての深い理解をもたらすことが期待できる。

4 「学力向上」を図る継続した実践的指導

本県教育委員会が実施した「県内小中高の児童生徒の生活調査」の結果発表(平成19年4月)によると、高校生の61.9%が平日に家庭で勉強する時間は、「ほとんどない」と回答している。さらに、小学校から中学校、そして高等学校と進むにつれ、家でのんびりする割合が高くなっており、レポートや家庭学習ができるような教育活動を見直す必要があることが課題となっている。また、本県教育委員会発行『学校教育における指導の努力点』においても、「学習習慣の確立及び家庭学習の定着を図るため、生徒の興味・関心・意欲を高めるような課題や宿題の与え方を工夫する。」ことが挙げられている。「学習意欲の向上」、「学習習慣の形成」、「学習指導の充実」は、学習指導要領に示されている自ら学び自ら考えるなどの「生きる力」を育成することをねらいとし、「確かな学力」向上のための教科指導における基本理念である。

新学期当初から、授業を大切に授業を「受ける」から授業を「活用する」に改めることの重要性と、数学学習は時間がかかって当然であることを随時確認する。生徒が板書を写すことのみに終始して授業に参加できていない、ということがないように、話し(説明)を集中して聞くことの必要性を常に強調する。授業において、生徒に質問をして自発を促す場面や、生徒の積極性を利用した演習を毎時間取り入れるようにする。その際、発問の仕方に細心の注意をはらい、生徒が考える時間を十分に確保することにより、思考力を育成するよう留意する。

宿題として、毎時間ごとに日々の課題(A 4版1枚)を、週末には週の課題(B 4版2枚程度)を生徒に課している。宿題を出す際の工夫として日々の課題においては、授業内容が確認でき復習ができる問題(教科書の例題程度)であることに留意し、週の課題においては、時間がかかっても粘り強く自分の頭で考えることができる問題を取り入れるように留意し作成している。宿題の内容については、常に授業の中でフォローするようにしている。その際、生徒が提出した答案で、解決のアプローチが多岐にわたるもの、解決のアイデアが豊富なものについては、生徒の多様な発想を把握して、全体の場で確認し認めてやるように配慮している。また、授業と宿題(自宅学習)とのつながり・流れ及び、授

業の活用法や宿題(自宅学習)のやり方等を説明し、生徒を随時激励している。つまり、生徒が学習習慣の定着を図る手だてのひとつとして、日々の課題や週の課題等を作成し、宿題として生徒に課している。

授業を要としながら、生徒が学習習慣の定着を図り、それを維持していく自己学習力をつけることは、自ら学び自ら考えるなどの「生きる力」を育成することをねらいとし、「確かな学力」の確立のための要因のひとつであると考えている。この継続した実践的指導に、尚一層の創意工夫を凝らしながら生徒の主体的・積極的な学習活動を促す支援活動を含めた授業を展開し、生徒の学習意欲を高め、学力向上を図っていきたいと考える。

5 授業における「学習意欲」の向上策

学力向上を図るためには、基礎的・基本的な「知識や技能」に加え、「学ぶ意欲」や「思考力・判断力・表現力等」を含めた幅広い学力「確かな学力」を身に付けさせることが必要である。つまり、学力向上の前提として、生徒の学習意欲の喚起が先決問題である。

OECD(経済協力開発機構)による学習到達度調査(PISA2003)に関する文部科学省の分析では、学習意欲や学習習慣に課題があることなどが指摘されている。学習意欲や学習習慣に課題がある背景には、様々な要因があるが、学校現場においては、生徒が学ぶことの意味を把握し、学習意欲を喚起するような授業を展開していくことが重要である。

平成19年3月に国立教育政策研究所がまとめた『学習意欲向上のための総合的戦略に関する研究』によると、「授業における学習意欲の向上策の基本」のなかで、学習意欲の要因として、次の6点を示している(表3)。

表3 学習意欲の要因

- | |
|--|
| <ul style="list-style-type: none">① 子どものパーソナリティ特性が学習意欲に影響する② 教師の指導性が学習意欲を左右する③ 学習目標が把握され学習内容の意義が認識されると、学習意欲は充実する④ 教材構成に工夫を加え、教材に問いを起こして探求するように図ると、学習意欲は高まる⑤ 学習課題の達成のために助け合い協力するならば、学習意欲は促進される⑥ 成功経験を重ねて有能感を増大し、自己決定の機会をもつと、学習意欲が強まる |
|--|

また、これらの要因を子どもの人間存在から導き出される学習意欲向上の方策について、授業を念頭に置いて考察している。そのなかの⑥の要因において、「授業における学習の結果を考えると、有能感による学習意欲の向上が取り上げられる。学習課題を達成し、作品を完成すると、喜びが引き起こされ、満足感が生まれる。こうした学習の成功経験を重ねると、学習の有能感が増し育つ。有能感とは効力感ともいうが、これがコンピテンスを生み出す。ホワイト(White,R.W.)は、『環境に積極的に働きかけ、自分にとって効果的な変化を生じさせようとする能力、その際に感じられる満足感及びそれをさらに求めようとする傾向』を指して、コンピテンス(competence)という。このコンピテンスが育つと、ますます学習意欲は強化される。」ことが示されている。

本研究では、この要因にも着目した授業を展開し、生徒の学習意欲を高め学力向上を図っていきたいと考えている。三角関数における問題づくりとして、原問題をもとに、自分なりの新しい問題をつくらせる。その自分でつくった問題を解答し、自分の達成状況を確認させる。その指導過程において、生徒の思考の自由性を保障する発問や例示を工夫する。そのことによって、生徒全員が問題をつくることができ、生徒自身が自分でつくった学習課題(問題)を達成(解答)できるようにし、生徒に喜びが引き起こり、満足感が生まれるように配慮する。そこでは、次の学習段階を意識して、原問題と新しくつくった問題とを比較検討することによって、生徒が問題の内容・構造をより深く理解できるように指導する。その満足感が生まれた成功経験をもとに、次の学習段階において発展問題である大学入試問題への取り組みを可能にさせるように指導を展開する。こうした一連の学習で生徒が成功経験を重ねることによって、学習の有能感を増し、生徒の学習意欲を高め、学力向上を図っていきたいと考える。

Ⅲ 指導の実際

実践事例 高等学校の実践より 沖縄県立那覇国際高等学校教諭 天久晴令

1 単元名 三角関数

2 単元目標 三角関数について理解し、関数についての理解を深め、それを具体的な事象に活用できる基礎を確立するため、次の各項を目標として指導する。

- (1) 回転運動を考えることによって、一般角の概念を理解させる。
- (2) 角の大きさの測り方として弧度法を取り入れ、その有用性を理解させる。
- (3) 座標平面上の点の座標をもとにして三角関数を定義し、それから導かれる基本的な諸性質を取り扱う。
- (4) 三角関数のグラフをかくとともに、周期性、グラフの対称性などに関する理解を深める。
- (5) 三角関数の加法定理を導き、正しく扱えるように習熟させる。また、これから導かれる種々の等式を指導し、三角関数の合成の公式までを扱う。

3 単元の評価規準

関心・意欲・態度	数学的な見方や考え方	表現・処理	知識・理解
・回転運動を考えることから、角度を一般化することにより、新たな関数が定義できることに関心をもつ。 ・加法定理から導き出される基本的な公式に関心を持ち、種々の公式を導き出そうとする。	・角度が一般角に拡張されることや弧度法を取り入れ三角関数について、考察することができる。 ・三角関数のグラフで、周期性、対称性などの基本的な性質を考察することができる。 ・三角関数の最大、最小の問題を二次関数の問題に帰着させて考えることができる。 ・いろいろな公式と加法定理について考察することができる。	・弧度法で角を表すことができる。 ・弧の長さや扇形の面積を求めることができる。 ・三角関数のグラフを表すことができ、三角方程式や不等式などに活用することができる。 ・三角関数を含む関数の最大値、最小値を求めることができる。 ・加法定理を具体的な事象に活用することができる。	・弧度法により弧の長さや扇形の面積が求められるなどの有用性について理解する。 ・三角関数の周期性について理解を深め、加法定理やグラフを用いて具体的な事象に活用することが身に付いている。 ・加法定理を正しく扱い、種々の等式や三角関数の合成の公式を理解する知識を身に付けている。

4 指導計画(全23時間)

節	項 目	指 導 内 容	配当時間
三角関数	1 一般角と弧度法	一般角、動径の表す角、弧度法、扇形の弧の長さ、面積	2 時間
	2 三角関数	一般角の三角関数の定義、三角関数の値、三角関数の符号、三角関数の値の範囲、三角関数の相互関係、三角関数を含む等式の証明、三角関数を含む式の値	2 時間
	3 三角関数の性質	$\theta + 2n\pi$, $-\theta$, $\theta + \pi$, $\theta + \pi/2$, $\pi - \theta$, $\pi/2 - \theta$ の三角関数	1 時間
	4 三角関数のグラフ	$y = \sin \theta$, $y = \cos \theta$, $y = \tan \theta$ のグラフ 三角関数のグラフの特徴、周期関数、 いろいろな三角関数のグラフ	4 時間
	5 三角関数の応用 問題演習	三角関数を含む方程式、三角関数を含む不等式 三角関数を含む関数の最大値、最小値	3 時間 本時：3 時間目 1 時間
加法定理	6 加法定理	正弦・余弦の加法定理、正接の加法定理、 2 直線のなす角	3 時間
	7 加法定理の応用	2 倍角の公式、半角の公式、 三角関数を含む方程式、不等式	2 時間
	8 三角関数の合成 問題演習	三角関数の合成、三角関数の合成の応用	2 時間 1 時間
	演習問題		1 時間
	定着テスト		1 時間

5 本時の学習指導

(1) 主題 「三角関数における問題づくり」

(2) 本時の目標

問題づくりを通して、主体的に問題に取り組み、既習の知識や技能を活かして発展問題に取り組むことができる。

(3) 本時の評価規準

三角関数の最大値・最小値の問題を二次関数の最大値・最小値の問題に帰着させて考えることができる。【数学的な見方や考え方】

三角関数を含む関数の最大値・最小値を求めることができる。【表現・処理】

(4) 本時の展開

過程	学習内容と展開	指導上の留意点	評価の観点
導入 (復習) (5分)	①三角関数の値の確認。②三角関数の相互関係の確認。(ノートさせない)	一般角に対する三角関数の定義を再確認し、単位円を用いて①②を確認する。	
問題演習 【原問題】 (15分)	$0 \leq \theta < 2\pi$ のとき、関数 $y = \sin^2 \theta + 2 \sin \theta$ の最大値と最小値を求めよ。 また、そのときの θ の値を求めよ。 ※問題文をノートに写させる。 ※ $y = \sin^2 \theta + 2 \sin \theta$ のグラフがどうなるか投げかける。 ※ $y = \sin^2 \theta + 2 \sin \theta$ をどのようにしたら良いか投げかけ、考えさせる。 ※二次関数の問題に帰着させることができることを確認し、新しい変数の変域に注意させながら、解答する。	$y = \sin^2 \theta + 2 \sin \theta$ のグラフを黒板で示し、数学Ⅱの範囲では、このグラフをかくことはできないことを説明する。 生徒自ら気が付くまで根気強く考えさせる場面を設定し、生徒が自主的、主体的に取り組む学習の場とする。解決につまずいている生徒を、机間指導で援助する。	三角関数の最大値、最小値の問題を二次関数の最大値、最小値の問題に帰着させて考えることができる。 【数学的な見方や考え方】
問題づくり (20分)	原問題をもとに、既習の知識や技能を生かして、自分なりの新しい問題をつくらせ、解答する場面を設定する。 生徒がつくった問題を取りあげ、解答する。	新しくつくった問題を取りあげ解答する際、発問を工夫し、生徒が作問の過程における思考を振り返り、問題の内容・構造をより深く理解できるようにする。	
発展問題 (15分)	$0^\circ \leq \theta \leq 90^\circ$ の範囲で、 $y = \sin \theta + 2 \cos^2 \theta - 2$ の最大値と最小値を求めよ。(大阪国際大) 本日の授業を通して学んだことや感じたことを自己評価用紙に記入させる。作問における思考過程が、発展問題への取り組み状況に変容をもたらしたかどうかを生徒に問いかける。	本時の学習を定着させる為、問題を補充することを説明する。時間を十分に確保し、問題に取り組ませるようにする。その際、手順を踏まえて考察するよう、生徒に指示をする。 生徒が問題づくりにおける思考過程をふり返り、気づいたこと・考えたことを自由にかく場面を設定する。(自己評価用紙)	三角関数を含む関数の最大値・最小値を求めることができる。 【表現・処理】
まとめ 次時予告 課題配布 (5分)	三角関数の最大値・最小値の問題を二次関数の最大値・最小値の問題に帰着させることができる。 次時は、問題演習	このような考え方は、他の関数(次章で学習する対数関数等)をはじめ様々な場面で現れるので、しっかりと確認する。	

(5) 学習指導上の工夫

数学的な考え方を育成するために、本授業では、次のような点に留意し、工夫をもって取り組んでいく。

① 問題解決に当たっての数学的な見方や考え方の糸口は、復習の部分で一斉に示すが、生徒自ら気が付くまで根気強く考えさせる場面を設定する。生徒に教科書の問題文をノートにかかせるこ

とによって、「自分なりの考え」をもたせ、教え込むのではなく、生徒が自主的、主体的に取り組む学習の場とする。

- ② 問題づくりを通して、「自分なりの考え」をもち、その「考えを表現する」場を設定する。また、自分なりの考えで作問した問題を解答する場面においては、学習の有用性を感得させ、学習意欲を高める工夫をする。
- ③ 作問した問題を生徒に板書してもらい、教師が解答する場面を設定する。ここでは生徒に、「授業を大切に」「授業を活用する」ことの重要性を理解させる。また、生徒自らが授業に積極的に参加しようという意欲と、参加できるという自信を持ち、生徒自身が「授業に参加した」「授業が理解できた」という達成感や成就感を味わえるように授業を構成する。
- ④ 作問した問題を取りあげ、つくった問題が原問題をどのように発展させたのか、作問における思考過程を生徒にふり返らせ、「自分なりの考え」を「根拠を明らかにし筋道を立てて考える力」を育成する場をしっかりと設定する。

6 仮説の検証

三角関数の学習で、問題づくりを取り入れた問題解決的な学習活動を通して、発展問題への取り組みを可能にさせることにより、「数学的な考え方を育成することができたか」を検証授業における実践、ワークシート、自己評価及びアンケートによって検証する。

(1) 問題解決的な学習と数学的な考え方について

問題づくりへの取り組み状況から、数学的な考え方の観点を自己評価させた。問題づくりにおいては、図4のように生徒全員が自分なりの新しい問題をつくることができており、各自つくった問題を積極的に解答していた。表4は生徒のつくった問題を分類したものである。原問題をもとに、変更可能な条件(部分)に着目し、生徒全員が新しい問題をつくることができており、既習事項の三角比の値の範囲・三角比の相互関係等を活用して筋道(見通し)を立てて取り組んでいると考えられる。なお、生徒のつくった問題で、学習題として解決できるものが37題中36題、解決できないものが1題であった。表5は、問題づくりにおける生徒の理解度である。

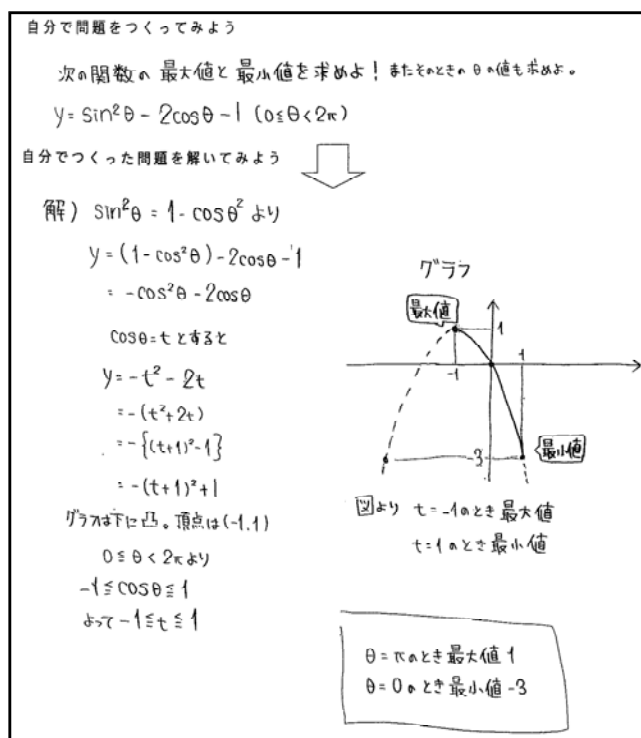


図4 問題づくりへの取り組み状況

また、「自分で問題をつくり解答することによって積極的に授業に参加することができましたか」の質問において、37名の生徒全員が「できた」と回答しており、問題づくりを取り入れた授業の有効性があると考えられる。

表4 生徒のつくった問題の分類

分類の観点		反応数
定義域を変える	$0 \leq \theta < 2\pi$	17
	$0 \leq \theta \leq 2\pi$	1
	$0 \leq \theta < \pi$	7
	$0 \leq \theta \leq \pi$	8
	$0 \leq \theta \leq 3/2\pi$	1
	$0 < \theta < 4\pi$	1
	$\pi < \theta < 2\pi$	1
	$\pi \leq \theta \leq 2\pi$	1
関数を変える (含まれる三角関数)	$\sin^2 \theta, \sin \theta$	6
	$\cos^2 \theta, \cos \theta$	4
	$\sin^2 \theta, \cos \theta$	5
	$\cos^2 \theta, \sin \theta$	16
	$\sin^2 \theta, \cos^2 \theta$	1
	$\sin^2 \theta, \cos^2 \theta, \sin \theta$	1
	$\sin^2 \theta, \cos \theta, \tan \theta$	1
	$\tan^2 \theta, \cos \theta$	1
	$\sin^2 \theta, \sin \theta, \text{変数 } a$	1
	$\cos \theta$	1

表5 問題づくりにおける生徒の理解度

最大値・最小値ともに正答	78% (29名)
最大値・最小値の一方のみ正答	8% (3名)
最大値・最小値ともに誤答	14% (5名)

表6は、「問題をつくっているとき、どのようなことを考えて問題をつくりましたか」の質問において、生徒の問題解決の過程における取り組みの状況をまとめたものである。自らの思考過程を振り返るなかで、生徒なりに発展的に考えたり、数学的考察・処理の質を高めようとしていることがわかる。

表6 問題解決の過程における取り組み状況(問題をつくったときの生徒の考え方)

- ・自分の好きな公式とか入りたいと思ってつくりました。めんどくさい計算にしたくなかったので符号に気をつけました。
- ・教科書では「 $0 \leq \theta < 2\pi$ 」の範囲であったから、自分は「 $0 \leq \theta \leq \pi$ 」で、関数の最大値と最小値を求めた。
- ・意外にすんなり解ける！みたいに、ひらめくと簡単な問題をつくろうとした。
- ・教科書の問題を参考に、自分にとって難しい問題を作った。
- ・ θ の範囲を $0 \leq \theta < 90^\circ$ など難しくする。
- ・答えが分数にならないようにした。
- ・ $\cos^2 \theta = 1 - \sin^2 \theta$ という公式が使えるように作った。
- ・解いている途中に作りかえました。
- ・問題と自分の考えている答えが矛盾しないようにした。
- ・平方完成するとき割り切れるようにした。

平成17年に国立教育政策研究所が実施した高等学校教育課程実施状況調査におけるペーパーテスト調査の結果概要において、「三角比の相互関係に関する問題」の通過率は約45%、「鈍角の三角比の理解をみる問題」の通過率は約35%であった。また、図4の問題づくりへの取り組み状況、表5の生徒の理解度及び表6の問題をつくったときの生徒の考え方から生徒一人一人が、既習の知識・技能(既習事項)を生かして筋道(見通し)を立て問題に取り組んでいることが考えられる。以上のことから、今回の手だては数学的な考え方を育成するのに有効だったと考える。また、この段階において、生徒全員が新しい問題をつくることができており、各自つくった問題を積極的に解答していたことや生徒の理解度の状況等から鑑みて、学習課題を達成した満足感が生まれたと考える。

(2) 数学的な考え方の育成について

① 発展問題への取り組み状況から

発展問題として、大学入試問題を取り入れた。生徒のワークシートから発展問題への取り組み状況を分析すると、図5のように37名の生徒全員が三角関数の最大値・最小値の問題を二次関数の最大値・最小値の問題に帰着させて考察することができていた。また、「自分で問題をつくり解答することによって発展問題(入試問題)の理解度が深まりましたか」の質問において、「深まった」という生徒が78%であった。表7は検証授業における発展問題の正答率で、最大値・最小値ともに正答率は80%を超える結果となっている。

教育課程実施状況調査における質問紙調査の結果概要において、「三角比の意味や三角比の相互関係」で、「よく分かった」と回答した生徒の割合は32.8%、「二次関数の最大・最小」で、「よく分かった」と回答した生徒の割合は、

34.3%であった。今回取り入れた発展問題は、三角比の相互関係を利用し、三角関数の最大値・最小値の問題を二次関数の最大値・最小値の問題に帰着させる問題である。以上のことから、今回の手だては数学的な考え方を育むのに有効だったと考える。また、発展問題への取り組み状況や正答率等から鑑みて、この学習段階においても前の学習段階に引き続き満

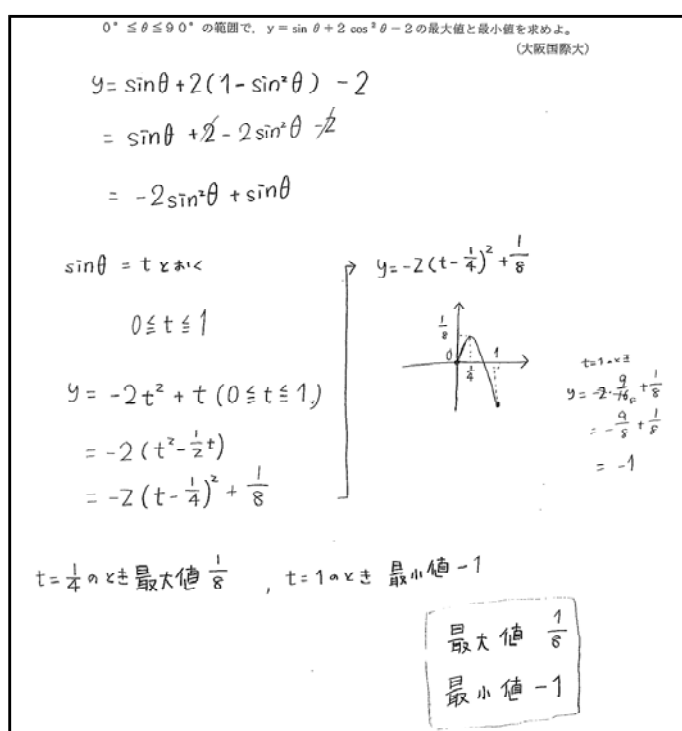


図5 発展問題への取り組み状況

表7 発展問題の正答率

分類	最大値	最小値
正答	86%(32名)	81%(30名)
誤答	14%(5名)	19%(7名)
無答	0%(0名)	0%(0名)

足感が生まれたと考える。こうした一連の学習で生徒が成功経験を重ねることによって生徒の学習意欲を高めることができたと考える。

② 生徒の感想から

表6・表8の検証授業後のアンケートから、問題づくりを取り入れた問題解決的な学習のねらいである「学ぶことの楽しさや充実感・達成感」、「発展問題への取り組みの手応え」、「数学的な考え方」に関する感想が多く見られた。授業においては、形式的な計算方法や解法の習得のみに終始せず、基礎的・基本的な知識・技能をしっかりと習得させるとともに、知識・技能を活用する学習活動を組み立てていくことが大切である。また、途中段階では生徒の関心・意欲・態度の高まりに十分配慮した指導が必要であり、そうした指導が今後の生徒の主体的な学習活動につながっていくと考えられる。

表8 生徒の感想(抜粋)

- ・自分で作って自分で解くことで、ちゃんと自分が理解できているというのがわかった。
- ・解けない所(自分がつまづいている部分)が分かって、そこを直すのには向いていると思います。
- ・自分で問題を作るのは、難しかった！新しい感じでよかった！これを続けたら頭がよくなりそう！
- ・自分で問題を作るのは楽しかったが、どのくらいのレベルで問題を作った方がいいのか考えるべきだと思った。
- ・この問題の意味が分かったし、このパターンの問題の解き方を覚えられた。
- ・問題を作っている段階では、答えがまだわからないから、解くときに、ちゃんとした答えになるかドキドキした。楽しかったです！
- ・自分で作ることで、問題を解くときに、作る側の気持ちになって解く力がつくかなと思った。
- ・自分で問題を作って取り組むことで、理解が深まると思う。
- ・問題を作ることで自分なりの解き方を考える事が出来た。
- ・作ったものを友達に解いてもらいたいと思う。
- ・みんなの問題を解いてみたいと思った。でも毎回取り入れたら教科書を進める時間がなくなりそう。
- ・自分で問題をつくるとなると難しかったです。

IV まとめと今後の課題

本研究では、「数学的な考え方を育成する指導の工夫」をテーマに、問題解決的な学習活動を通して、数学的な考え方の育成をめざして取り組んできた。その成果と課題をまとめる。

1 成果

- ・生徒に考えるきっかけを与え、自ら解決しようとする主体的な学習活動を展開することによって、生徒は学ぶことの楽しさに気づき、自分の中にある能力を自分で引き出していくことができ、数学的な考え方を育成することができたと考える。
- ・生徒一人一人が「自分なりの考え」をもち、既習の知識や技能を生かしてその「考えを表現する」ことにより、積極的に問題に取り組み、解決にいたるまでの思考過程をふり返り、自分の達成状況を確認することができ、その一連の過程で数学的な考え方を育成することができたと考える。
- ・数学的な考察の方法を体得させ、生徒が成功経験を重ねることによって、自分への自信をもたせることができ、学習意欲を高めることができたと考える。

2 課題

- ・「生徒に数学的な作業をさせる、問題を発見させる、考えさせる、説明させる、発表させる」等の数学的活動をとともなう授業展開を常に意識して授業計画を立てる必要がある。
- ・「数学的な思考力・表現力」を育成するために、生徒一人一人が自分の考えや意見を互いに認め合い、深め合う場面のある授業展開を工夫する必要がある。
- ・「生きる力」を育むことを目指し、授業においては、知識・技能の習得のみをゴールとせず、思考力・判断力・表現力等の育成及び学ぶ意欲の向上に向けて、活用の視点から授業づくりに取り組む必要がある。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 1999 『高等学校学習指導要領解説 数学編 理数編』
松原元一 1990 『数学的見方考え方』 国土社
竹内芳男・沢田利夫 1984 『問題から問題へ』 東洋館出版

(1) 自由研究の設定

自由研究は生徒がこれまで学んだことを活かし「保健」に関して興味を持っていることに対して自らテーマを設定し研究していく。できるだけ、幅広くテーマを許容することで、生徒は想像力をかきたてられ、自らの興味関心をより深く探ろうとすると考える。また、研究はグループを組み合わせる事が大切となる。

(2) グループ活動について

研究は原則として、2～4人で行うことを推奨していく。それによりコミュニケーションが行われ、互いの練り合いが深まっていく。特に共同で研究をするために、意見の相違や、自我のぶつかり合いもある。しかし、自らの性格や個性に気づき、相手を認めながら人間性を育てることは、研究を成功するために欠かせないことである。グループ同士で協力する姿勢が様々な相乗効果を生み、より良い研究につながっていくものと考ええる。

(3) 研究の行い方

インターネットの普及により必要な情報が容易に入手できる時代となった。しかし、研究テーマについて調べ、そのままデータを流していきただけでは本当の研究成果にはつながらない。また、それをすべて許容すれば、情報を入手しやすい物の中からテーマを選出し、興味関心や意欲を育てる学習へとつながっていかないことにもなりかねない。

研究を進める上で大切なことは、真に何がしたいのか、あるいはどのようなことが自分たちにとって大切な学習なのか、等を真剣に考えさせることである。インターネットによる情報は補助的な役割としてとらえさせ、研究したことを自分のものになるようしっかりと学習をさせたい。また、直に保健所などの機関を訪問、あるいは環境問題をテーマとするならそのポイントとなる場所の現地調査などを行わせること等を推奨していく。そのことにより専門性が深まるだけでなく、社会や地域との接点生まれコミュニケーション能力や礼儀や言葉遣い、作法と言った力も自然と備わってくると考える。

(4) 発表の仕方

発表は全員の前で行う。研究したことをいかに全員に分かり易く伝えていくかがポイントとなる。そのため、掲示物や機器などを用い、その上で個性を発揮しながら発表していく。グループ員全員が発表にもしっかりと関わり、十分な力を発揮できたか、それらを全員で評価していく。また、説明等は現行の棒読みではなく、自分の言葉で話すことを強く推奨していく。その課題を課すことで生徒は研究内容をより自分の物として理解していくことが出来るようになる。映像や動画、ロールプレイなども伝える手段としては有効である。

2 「可能性を引き出す」ことと評価のあり方

可能性を引き出すため、評価のあり方はとても重要である。まず、何を持って評価をするのか、あらかじめ生徒に伝えておくことは重要である。そして、生徒同士も相互評価することで、評価する方もされる方も互いに責任感を持って学習に臨むようになると思う。また、相互評価が妥協で安易なものになることがないよう最終の判断は教師が行う。研究・発表の過程で、十分な可能性を発揮していないグループには再度研究・発表の機会を与え再チャレンジさせていく。その厳しい姿勢を貫くことで生徒自身が自ら考え、反省しながらも気づきを得、より良い物をつくっていけるようになる。

3 教師の役割

クラス全体が発表に意欲的に取り組む雰囲気作りのために教師の役割は重要である。クラスや生徒の実態に応じては、なかなか研究に意欲的に取り組もうとしなかったり、他グループの発表を真剣に聞こうとしない生徒もいることがある。それは主に、評定や学習の目的にも意欲を失っている生徒であると考えられる。その様な生徒に対して教師の支援活動がより重要なことは言うまでもない。クラスメートの発表に対して「相手の思いやりを示すためにしっかり聞こう」や、自らの研究では「誰かの役に立つための発表をやろう」などの人間的な面や集団の連帯感を促していく支援、言葉がけが大切である。個々のグループの努力は全体により影響を与え、また、集団の力も個々のグループに力を与えていく。教師がその大切にすべきポイントをしっかり生徒に感じさせる姿勢と力量が求められる。

Ⅲ 指導の実際

1 自由研究取り組みの年間の流れ

年間計画の中で学習べき全単元を終了してから自由研究活動に入るのは理想ではあるが、少ない授業数の中でそれは難しい。そこで、未履修の学習内容については、それを自由研究として生徒に取り

組ませることもできる。また、研究のための時間は総合学習や放課後の時間を使って行わせる。

[自由研究活動の年間の流れ]

月	説明内容	留意点
4月	年間のシラバス紹介の中でしっかりと説明する	・学習のまとめとして自由研究活動があることを理解させ、年間の目標を持たせる
11月	グループ結成の活動開始 自由研究活動の開始 研究のため訪問する公的機関などとの調整・文書発送	・発表順番の決定 ・方法と評価についての説明 ・文書は教師が用意し、発送する
12月中旬	発表の開始	・研究内容を他の生徒に伝えることで、学習の伝達はもちろん、職員の理解や本人たちの自他肯定感の向上にもつなげていく。
2月末から3月	全グループの発表が終わった後、各グループの研究物を校内掲示 お礼状の発送	・学校長名のお礼状の他、生徒からの感謝の言葉や研究の成果等を加える。

2 1時間の授業の流れ

発表会は1時間に2つのグループが行う。また、司会を含めて生徒が主体的に授業を作っているという雰囲気作りが重要である。1時間の授業の流れは以下の通りである。

[1時間の授業の流れ]

時間	学習内容と生徒の活動	留意点
5分	挨拶 出席点呼 本日の司会者と発表者の確認	・発表者の心得と聞く者の心構えを説く。 ・評価の視点と方法を確認する。 ・司会は生徒が行うことが望ましい。
15分	○グループ1の発表	・質疑応答は発表者の評価にも良い影響を与えることを周知し、積極的な質疑を促す。
5分	質疑応答	
15分	○グループ2の発表	・各グループの要点をまとめ学習の深まりを促すと共に、研究から発表までの成果や課題を指摘し次時につなげる。
5分	質疑応答	
5分	教師からの好評	

3 発表の基本的な手順

発表の時間は約15分間とし、その後質疑応答を8分間設定する。全生徒が集中して聞けるために時間は15分程度が望ましい。また、基本的な発表の手順を以下のように設定する。

[発表の手順]

順	発表内容	割合	留意点
1	研究テーマ設定の理由	10%	なぜグループでこのテーマを選んだのか、その動機と目的を正直に素直な気持ちで話す。
2	研究の内容と考察	75%	研究の内容をスライドや掲示物などを使い発表する。また、編集・撮影した映像やロールプレイなどを用いるのも良い。グループの独創性や個性を発揮する様々な手法にも期待する。 問題等に対する課題、対策等をしっかり提案出来ることが大切。そのことで学習が生活に生かせるような手だてをとる。
3	まとめと感想	15%	研究内容や考察をわかりやすくまとめること

		で全員の理解を深める。
	感想では研究、内容にとどまらず、活動の過程での気づきや個人・グループの成長、お世話になった方々への御礼など、その時の想いを素直に語る。	
	質疑応答	多く質問が出ることは聞いている者の関心や意欲を引き出した証でもある。また、質問に的確に答えられるかは、グループの研究の深度を示すことでもあり重要である。

4 目標と評価規準

(1) 目標

- ① 体験・活用・参加型の授業を行い、学習への興味関心を促す。
- ② 基礎的・基本的な知識・技能の習得がはかられ、思考力・判断力・表現力を育成する。

(2) 評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断	知識・理解
・興味関心に応じたふさわしいテーマを設定し研究に取り組んでいる ・グループ員と協力し合い意欲的に研究に取り組んでいる。 ・他班の発表をしっかりと聞いている。	・研究の内容がよく検討され、考え出されたものになっている。 ・発表においては相手に伝わりやすい発表の方法になっている。 ・学習がより良い意志決定や行動選択する力につながっている。	・研究したことがしっかりと自分のものとなり質問にも的確に答えられる。 ・他班の研究発表をよく理解している。 ・学習したことが実践にうつせる力が備わっている

(3) 具体的な評価規準

	A (十分満足できる)	B (おおむね満足)	C (努力を要する生徒への手立て)
関心・意欲・態度	・より良いテーマが設定され、グループ員で協力し、よく研究された内容になっている。 ・発表においてはグループ員でよく協力し、個性やオリジナルティがよく発揮されている。 ・発表においてはグループの・資料や掲示物、発表資料などがわかりやすくまとめられている。 ・他班の発表をしっかりと聞き、質問を積極的に行っている。	・グループ員で協力して研究に取り組んでいる。 ・グループ員で協力して発表に取り組む、各々の力が発揮されている。 ・資料や掲示物、発表資料などがよくまとめられている。 ・他班の発表をしっかりと聞いている。	・ふさわしいテーマになっているか検討する機会を与え、必要に応じて助言する。 ・グループ員で協力して取り組める体制を確認させる。 ・調査・研究の方法を助言する。
思考・判断	・研究の方法や考察、まとめなどがしっかりと行われ、オリジナルティがよく発揮されている。 ・発表においては、各々の力がよく発揮され、相手に伝わりやすいものになっている。 ・意志決定や行動選択する力がしっかりと備わっている。	・研究の方法や考察、まとめなどがしっかりと行われている。 ・発表においては、各々の力がよく発揮されている。 ・意志決定や行動選択する力が備わっている。	・研究の方法や調査の仕方など助言する。 ・より良い発表ができるための資料や掲示物の作り方、PC機器などの使用法等について助言する。
知識・理解	・研究したことが十分に理解され、質問等にも的確に答えられる。 ・他班の発表をよく理解でき、しっかりとまとめられている。 ・学習したことが実践にうつせる力が十分備わっている。	・研究したことが十分に理解される。 ・他班の発表を理解でき、ノートにもしっかりとまとめられている。 ・学習したことが実践にうつせる力がある程度備わっている。	・研究したことを自分の言葉で話せるよう助言する。 ・ノートのまとめ方について助言する。 ・実践力をつけるために各々の課題に気づかせる助言をする。

5 高等学校での実践例

この実践は県立普通高校1学年と職業高校2学年の2クラスで行ったものであり、共にはじめてこの学習を行ったクラスである。1 グループ2～4名でグループを組み、1 クラス約12のグループが研究・発表を行った。以下、その主なテーマ一覧、相互評価シート、アンケート結果、生徒・教師の感想について紹介する。

(1) テーマと活動内容の例覧

テーマと活動内容の一例を表1で紹介する。

表1 テーマと活動内容一例

テーマ	活動内容
タバコについて	高校生の喫煙が問題となっていることから、生徒や職員に喫煙についてのアンケート調査を実施したり、学校周辺の落ちている吸い殻の本数調査を毎週実施したりしながら研究発表を進めていた。また、発表の中で喫煙の害だけでなく、タバコにまつわる社会的な問題（タスポ、医療費）なども取り上げた。
薬物乱用防止について	研究発表に加え、生徒自身で創作した劇を発表した。決してお笑いだけでなく教師自身も知らない最新の情報も取り入れられておりすばらしい内容となった。また、1・2学期の保健評価が「1」だった生徒が積極的に研究発表に参加していた所が印象的であった。
電磁波について	携帯電話の電磁波の影響についてアンケートを実施して調査したり、インターネットで様々な情報を入手して、安全な使用方法について説明した。生徒にとっても身近な問題でもあり、すぐに改善に役立つ学習となった。

(2) 評価シートの主な内容

評価シートは生徒が相互評価を行うと共に、必要な知識を獲得するためにも、その記入は大切なものとなる。A4サイズ用紙一枚の内容を紹介する（表2）。

表2 評価シートの内容

1. 発表の内容はどうでしたか？ ア. とてもよい イ. まあまあ ウ. 普通 エ. あまりよくない オ. よくない
2. 発表グループの協力度はどうでしたか？ ア. とてもよい イ. まあまあ ウ. 普通 エ. あまりよくない オ. よくない
3. 発表グループの良かった点を教えて下さい。
4. 今回の発表で勉強になったポイントを書いて下さい。
5. 発表グループに対して何か質問があれば書いて下さい。

(3) 生徒の変容

このアンケートの11項目の質問において解答はすべて「とても高まった・ある程度高まった・普通・あまり高まらなかった・高まらなかった」の5つを設定した（表2参照）。このアンケートから「意欲・関心」「分析・判断」「知識の高まり」「グループの協力」「自分への自信」「役に立った」「気づきや他者の理解」「新しい・深い体験」「コミュニケーション能力」「他グループの評価」「発表する力」のすべての質問に対し「とても高まった・ある程度高まった」が90%以上を占めていることがわかった。これは体験・活用・参加型のこの学習活動が生徒の思考力・判断力・表現力等を育成し、目標にある程度達成できたものと考えられ、この学習形態の有効性を示したものであると考える。

表3 アンケート結果

1 この活動を通して保健学習への意欲や関心が高まったか とても高まった 68% ある程度高まった 27% 普通 5% その他0%
2 分析・判断したりする力が高まったか

	とても高まった	68%	ある程度高まった	23%	普通	9%	その他0%
3	研究や他の発表を聞くことで知識が高まったか						
	とても高まった	82%	ある程度高まった	18%	その他0%		
4	グループで協力して活動することは高まったか						
	とても高まった	82%	ある程度高まった	13%	普通	5%	その他0%
5	自分への自信が高まりましたか						
	とても高まった	36%	ある程度高まった	54%	普通	10%	その他0%
6	誰かの役に立てたという思いは高まったか						
	とても高まった	50%	ある程度高まった	40%	普通	10%	その他0%
7	自分への気づきや他者を理解する気持ちが高まったか						
	とても高まった	64%	ある程度高まった	31%	普通	5%	その他0%
8	新しい体験や深い体験ができましたか						
	とても高まった	77%	ある程度高まった	18%	普通	5%	その他0%
9	コミュニケーション能力が高まったか						
	とても高まった	45%	ある程度高まった	45%	普通	10%	その他0%
10	他のグループの研究・発表はどうでしたか						
	とても高まった	77%	ある程度高まった	23%	その他0%		
11	発表する力は高まりましたか						
	とても高まった	59%	ある程度高まった	32%	普通	9%	その他0%

(4) 生徒の主な感想

生徒の感想の一例を紹介する。この感想からは、生徒が様々な自己やグループの課題を克服し努力した様子がうかがえる。また、生徒自身がこの学習の有効性と学習への満足度を感じている。さらに、はじめの発表で合格がもらえなかったことで、奮起し、向上が見られた様子もうかがえる（表4）。

表4 生徒の主な感想

○とても楽しくできてみんなと一緒にやることの素晴らしさ、大切さがわかった。とてもいい学習だと思います。毎日調べたりみんなと打ち合わせをすることで充実感があつた。発表も満足に出来、グループの仲も深まった気がする。
○研究を通して今まで知らないことがわかった。他のグループの発表を見て自分たちも頑張らないとだめだという気合いも出てきて、みんな真剣に取り組めたから良かったです。この学習はとても楽しかったです。
○人見知りが激しいので人の前で発表するのはとても厳しかったけど、知識が深まって、その上、グループの発表も素晴らしくて良かったです。パワーポイントはみんなとってもわかりやすく良かったですし、見習わないといけないと思いました。今回学んだことは、今後生活の役に立つと思います。
○タバコについて調べて、タバコが与える社会への影響や役割などいろいろなことがわかりました。そして、タバコを皆には吸って欲しくないと思い、その想いが届いてくれると嬉しいです。この発表をすることで本当にたくさんの経験が出来ました。グループの皆と協力して一つのことに取り組み信頼や互いを思いやる気持ち、そして自分を信じることの大切さを強く学びました。
○最初はとても緊張していて私に出来るわけないと思ってましたが、練習を重ねて2回目の発表のときには思いっきり伝えたいことを伝えることが出来、自信ができました。また、普通の1時間の授業では比べられないくらいの知識も得ることが出来、友達と協力して夢中になって取り組んでいました。また、どうやって発表するか、何を伝えるか、など皆で考えていく中で一人一人が自分の意見をはっきり述べて、とても真剣に討論することもできました。この発表で得た自信をこれからの将来に役立てていきたいです。
○自分たちでテーマを決め、自分たちで調べるので、普段の授業より身につくものが多い。この経験を他の授業でも生かせると思った。また、発表している人の話を聞くのが上手になったと感じる。

(5) 実践後の教師の感想

教師主導型で授業を展開してきた教師がこの学習形態にはじめて取り組んだ感想を書いたものが次の表5・表6である。はじめ、この活動に不安を感じていた教師がその有効性を実感できるまでの動きがよく感じられる。

表5 教師の感想1

初めて「自由研究」を生徒へ実施してみて、計画段階の時から「保健」の授業への可能性を感じていました。実施してみての成功・失敗や達成度など不安はもちろんありましたが、それよりも私自身が興味のあるテーマについて、「自分ならこれだ。」「あの施設に訪問し質問したい。と想像が膨らんでいました。

私のこれまでの「保健」の授業でも「保健の授業でいろいろな情報を基に、先生と一緒に健康を学んでいこう。」と常々話していたので、それこそ生徒が興味を持ち、自分の足で探した実体験を素に調査・研究をし、またその成果を皆の前で自分の言葉で発表するというのは、これからも生徒が忘れられない授業、財産になっていくと感じました。ただし、「自由研究」以外の授業、日々の教師の授業への取り組みが大切だと「発表会」を通して感じました。今後も「自由研究」を継続して「生徒の可能性・財産」を拡げていきたいと強く感じました。

表6 教師の感想2

私は保健の授業を担当して3年の経験しかありませんが、こんなに生徒達がいきいきして授業を受けているのは初めてです。生徒もそのような取り組みを望んでいるようです。はじめ、学習意欲に課題のある本校で「自由研究発表」を行うのは無理じゃないかと思っていました。しかし、今はそれだからこそこのような生きた学習を行っていき生徒に自信をつけさせてあげる必要があると思っています。小中学校時代にあまり期待されていなかった生徒達だからこそ高校で彼らが主役になれる「自由研究発表」は生徒にとっても嬉しいようです。

この授業を実施して良かったと思う中で印象に残っている点を以下に上げてみます。

- ① 生徒の目が輝いている。寝ている生徒や集中していない生徒がほとんどいない。
- ② 研究発表を創っていくなかで子ども一人ひとりと教師の関わりが深くなった。
- ③ 通常の授業形式では見ることでできなかった子どもの能力や可能性を実感することができた。(1・2学期の評価が「1」だった生徒がものすごい研究発表をしたなど)
- ④ 教師自身も知らない知識やプレゼンの方法などを子どもから学ぶことができた。
- ⑤ とにかく授業が盛り上がる。授業に行くのが楽しみ。
- ⑥ 生徒間で研究発表の相互評価をさせているが、正当な評価(合格、不合格)をしてもらえることがとても嬉しい。(自己評価では時折甘い評価をするグループもあるが、他者の評価と教師の評価はほとんどが同じである)
- ⑦ 発表のやり直しを通して子ども達の変容・成長が大きく見られる。

IV まとめと今後の課題

体験・活用・参加型の自由研究をグループで行うことで、95%の生徒が学習意欲の向上を感じた。また、既習事項を基に研究を深め、それを発表する過程において思考力・判断力・表現力が培われ学力の向上がはかれたものと考え。さらに、グループや学級、あるいは社会との交流の中でコミュニケーションがよくなる、[豊かな人間性]の育成にも寄与できたものと考え。授業後のアンケートでは「生徒の可能性を引き出す」ことを目的としたこの実践において90%以上の生徒がこの活動の目標を達成できたことがうかがえた。また、教師の観察からは学習意欲の日頃高くない生徒の意欲的な活動が認められ、日常生活から生活を改善していこうとする生徒も出始めている。

生徒を主体としたこの活動は有効であり、そのことで自ら考え行動していこうとする力が養われていく。また、自我のぶつかり合いや自他を認めていく過程においては、個人が内面に抱えている課題などに積極的に取り組んでいくきっかけにもなり得た。しかしまた、学習したことをもとに、より向上させていくためには継続した学習機会が必要になってくる。多くの学校において教科保健1単位ずつを2年間にわたって行っているが、それぞれの学年に於いて連携して行うことで、経験が生かされ、より高度な自由研究へとつながっていくことも期待できる。生徒が主体的に取り組める学習活動は生徒に真に必要なとされる「生きる力」を育むのに欠かせないものである。今後も継続的に研究を深め、各機関の専門家らとも連携を深めながら生徒の健やかな成長に寄与していきたい。

〈高校英語〉

英語による実践的コミュニケーション能力を高める指導の工夫

— 体験・活用・参加型のタスク活動を取り入れて —

上江洲 隆* 平 良 学** 島 田 純***

I テーマ設定の理由

自然破壊や地球温暖化に伴う環境問題や人口増加に伴う食糧やエネルギー問題、さらには民族や宗教間紛争等の地球規模で解決が求められている諸問題が山積している今日、国際社会における国家・地域間の対話の大切さが強く求められている。また、通信機器やコンピュータ、交通機関等の発達により、日常生活の中で必然的に母国語の異なる者同士による個人間の会話の機会も急速に増えつつある。このような社会情勢の中、我が国が世界の平和維持等に貢献するため、また、その反面、国際社会において不利益を被らないため、国際的共通言語としての英語の役割が益々増加してきている。このことから、学校現場における英語の授業では、実際に英語を使う機会の充実をととして生徒のコミュニケーション能力の向上を図ることが肝要だと考える。

文部科学省は、平成15年3月に『英語が使える日本人』の育成のための行動計画』を策定し、その中で「英語の授業においては、文法訳読中心の指導や教員の一方的な授業ではなく、英語をコミュニケーションの手段として使用する活動を積み重ね、これを通して、語彙や文法などの習熟を図り、『聞く』『話す』『読む』『書く』のコミュニケーション能力の育成を図っていく指導の工夫が必要である。」と英語の授業改善に向けての示唆を与えている。

しかし、国立教育政策研究所 高等学校教育過程実施状況調査 英語 I（平成17年11月実施、平成19年4月発表）によると「聞いたり読んだりして得た情報や自分の考えなどについて、話し合ったり意見の交換をしたりするコミュニケーション活動を行っていますか。」という質問に対して「多くの時間で行っている」「どちらかといえば行っている方が多い」と回答した教師はわずか16.7%にとどまっている。このことから学習指導要領 外国語編における目標でも述べられている「情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。」ことを実現するための手だてを講じる必要がある。

以上のことから、主に「聞く」「話す」「読む」「書く」の各領域を有機的に結びつけるタスク活動やタスク活動を行う際の効果的なペアワークやグループワークの活用の工夫に視点をおきながら、生徒相互における双方向的言語使用を伴う体験・活用・参加型のタスク活動をととして生徒の英語における実践的コミュニケーション能力の育成を図ろうと考え、本テーマを設定した。特に、本稿ではスキットとディベートをととした実践事例を紹介する。

〈研究仮説〉

英語Ⅱあるいは時事英語の授業において、体験・活用・参加型のタスク活動を取り入れることによって、生徒の英語による実践的コミュニケーション能力が育成されるであろう。

II 研究内容

1 英語による実践的コミュニケーション能力について

(1) 英語による実践的コミュニケーション能力とは

英語による「実践的コミュニケーション」について次のような定義がなされている。『実践的コミュニケーション』とは、単に外国語の文法規則や語彙などについての知識をもっているというだけではなく、実際のコミュニケーションを目的として外国語を運用することができる能力のことである。（平成10年告示学習指導要領『解説』）。換言すれば、コミュニケーションの手段として、現実の場面で英語を適切に使うことができる総合的な力と言い換えることができる。

カナルとスウェイン（Canale and Swain 1980）は、下記のとおり4領域からなるコミュニケーション能力モデルを提唱した。（表1）このことから、コミュニケーション能力とは、単に言語に対する知識だけではなく、様々な技能的な要素も含む複合的なものであることがわかる。

* 沖縄県立総合教育センター指導主事

** 沖縄県立球陽高等学校教諭

*** 沖縄県立西原高等学校教諭

表1 コミュニケーション能力 (Communicative Competence) を構成する4領域

① 文法能力 (Grammatical Competence) : 語句・構文・文法・発音等についての知識
② 社会言語能力 (Sociolinguistic Competence) : 対人関係に必要な言語能力
③ 談話能力 (Discourse Competence) : 文脈や場面、話題の流れを読む力
④ 方略的能力 (Strategic Competence)
あらゆる言語、あるいは非言語的手段を用いてコミュニケーションを行うことのできる力
例: 「言い換え (paraphrase)」「繰り返し (repetition)」「確認 (clarification)」「身振り (gesture)」「感情移入 (empathy)」等

以上の4領域を有機的に関連させた指導を工夫することにより、生徒の「実践的コミュニケーション能力」育成につながるものとする。

(2) 英語による実践的コミュニケーション能力を高めることの意義

文部科学省教育課程審議会答申(1998)では、「自分の考えや意志を適切に表現できる基礎的・実践的コミュニケーション能力の育成を目指すこと」をねらいとし、「外国語教育については、国際社会の中で日本人としての自覚を持ち主体的に生きていく上で必要な資質や能力を育成することが極めて重要である」としている。すなわち、これからの国際社会をたくましく生き抜く力を育成することを目的とする外国語科の指導は、「言語知識の詰め込みではなく、生徒の学ぶ力と意欲を大切に、しかも実社会との結びつきを重視した学習や体験を与えることによって、文化や言語の異なる人達とも情報や自分の考えを積極的に伝え合うことができる『実践的コミュニケーション能力』の育成」を重視しなければならないと考える。

「実践的コミュニケーション能力」を高めることにより、生徒は、世界中から発信される様々な情報やこれまでに知ることのなかった異文化に直にふれ、多様な価値観を理解することができるものと思われる。さらに、文化や言語の異なる人達との情報交換をととして、自分の視野を広げると共に、我が国や自分が住んでいる地域の伝統・文化を再認識し、アイデンティティーの確立にもつながるものとする。

(3) 英語による実践的コミュニケーション能力を高めるために

文法訳読式による教師中心の一方向的な授業では、語彙や文法、構文といった所謂「英語についての知識」は習得できるが、いかに英語を使用するかといった「英語の運用についての知識(技能)」は、身に付くことは困難である。青谷正妥(2005)は、このことを「顕在的知識(Explicit Knowledge)」と「潜在的知識(Implicit Knowledge)」という二つのことばで説明している。顕在的知識とは、「自分でどういうものかはっきりと説明できる知識」のことで、英語学習では、文法的な要素を表す。これに対して、潜在的知識は、「できるけれども言葉で説明できない知識(知識というよりむしろ技能のこと)」のことである。英語のネイティブスピーカーが、英語の文法について説明することができなくても、ほとんど正確かつ流暢に話すことができるのは、その言語の顕在的知識はなくても潜在的知識に優れているからである。その反面、日本人が、長年英語を学習しても実際の会話を要する場面において英語を話すことができないといわれ続けてきたのは潜在的知識の不足にあると考える。われわれ外国語学習者が、英語を学ぶ場合、これら双方の知識のバランスに配慮することが大切であり、そのことが実際にコミュニケーションを目的として英語を運用する能力すなわち実践的コミュニケーションの育成につながるものであると思われる。

2 体験・活用・参加型のタスク活動について

(1) タスク活動とは

白畑友彦(2003)は、外国語教育におけるタスクについて「言語習得を目的として行う課題や作業をタスクと呼ぶ。特に、学習者に目標言語でコミュニケーション活動を行わせるための課題をタスクと呼ぶことが多い」と定義している。また、効果的なタスクについて以下の4点を挙げている。

(表2)

表2 効果的なタスクの特徴(白畑友彦 2003)

① タスクの到達点(goal)が明確である。
② タスク完了のために情報交換を必要とする。
③ 実際のコミュニケーションと同じ作業、または類似した作業である。
④ 内容が現実の社会活動と深く関わっていて、学習者の興味・関心、および知的レベルにあっている。

このように、効果的なタスクを取り入れた活動を行うことにより、学習者同士のコミュニケーション

ョンにおける相互交流が生まれ、それに伴う意味交渉をととして学習者の言語習得が促進されるものとする。

(2) 体験型学習 ― 言語体験について

表1に示したとおり、英語による実践的コミュニケーションには、文法能力、社会言語能力、談話能力、方略的能力の4つの構成要素があると考えられている。文法能力がいかに優れていても、他の3つの要素が大きく欠けていると意志や情報の伝達に必要な真の英語力には結びつかない。また、長瀬荘一(1996)は、英語のコミュニケーション能力を育てるために、「①基本的な語句、文型を身につけさせること ②英語をシャワーのようにたくさん浴びさせること ③英語を使う体験を豊富に持たせること」の3点が必要であると述べ、言語体験指導の意義を以下のように示している。(表3)

表3 言語体験指導の意義(長瀬荘一 1996)

① 言語体験によって、真の「わかること」を獲得する。
英語学習において「わかったつもり」が「わかった」に転化するためには、生徒の自主的、能動的な言語体験が必要となる。なぜなら、生徒の中に生じた「わかったつもり」は、行動化され言語化されて、はじめて「わかった」に生まれ変わるからである。
② 自主的言語体験(英語学習において生徒が自主的、能動的に英語を使いながら学んでいく活動)は「効力感」を生み、「やる気」を喚起する。
稲垣佳世子氏(1985)の言う「効力感」すなわち、「努力すれば、あるいは行動すれば、環境に好ましい変化をもたらすことができる」という見通しとそれにともなう感情(自信)を生みだし、生徒の「やる気」を喚起する。
③ 自主的言語体験は「コミュニケーション能力」を育てる。
自主的言語体験には、生徒が学んだことをもとにして自分で英語を使う体験を豊かにする側面があるため、「コミュニケーション能力」育成に重要な役割を果たすことになる。
④ 自主的言語体験は「自学能力」を育てる。
自主的言語体験をととして「繰り返して練習する技能」「調べる技能」「関係づける技能」などの「個人的な学習技能」と、「聞き方・話し方の技能」「協力して練習する技能」など「集団的な学習技能」が養われる。
⑤ 自主的言語体験は「国際理解能力」を育てる。
コミュニケーション活動において、話題や題材をととして必然的に他の文化や他の人との関わりを生じ、それによって他の文化や他の人を理解しようとする心を養う。

(3) 活用型学習について

知識基盤型社会と呼ばれる今日、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力を基盤とした確かな学力の育成が求められている。2008年1月17日付けの中教審答申によると、活用型とは、基礎的な知識や概念を活用することを意味しており、「それぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させることを重視する必要がある」と記されている。

換言すると、知識の詰め込みによる「知識偏重型学習」から脱却し、習得した知識や技能を普段の生活の中で活かすことのできる確かな学力を育むための「活用型学習」を普段の授業のなかに取り入れていくことが大切であるとする。活用型学習では、図1にみられるように、習得した基礎的・基本的な知識・技能と既習事項・既有経験および思考力・判断力・表現力等を活用しながらタスクを解決することにより、確かな学力の育成につながるものとする。その際にはそれぞれ個別の知識であった既習事項とその場で習得した事項とが思考力・判断力・表現力により統合されより大きな知識形態ができあがるものと考えられる。さらに、そこで身に付いた基礎的・基本的な知識・技能に対して「活用」と「フィードバック」をスパイラルに繰り返すことにより、演繹・帰納双方の論理的思考力が培われ、その定着につながっていくものとする。

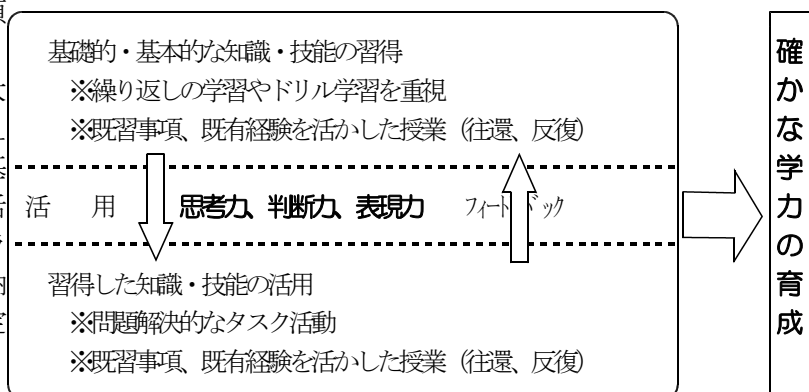


図1 習得・活用を充実・深化する授業モデル

(4) 参加型学習について

大和隆介（2004）は、授業の手法と指導内容の定着度について、図2のように「学習ピラミッド」と呼ばれるデータを示し、「新しい知識や技能を習得するためには、ただ『聞く』だけではなく、自分の目で見て、自分の頭で考え、実際に行動し、教えあうことが大切である」と述べている。

また、「知識中心の講義型の学習や、教えるものと教えられるものとの関係を固定化した一方通行の学習に対して、教えるものと教えられるものとの関係が固定化されず、参加者の相互作用による理解が図られる」と、開発教育協会（2008）は、その学び方重視の参加型学習の有用性にふれている。また、その手法として発表・対話・実験・見学・調査・スタディツアー・ワークキャンプ、ディベート、ランキング、フ

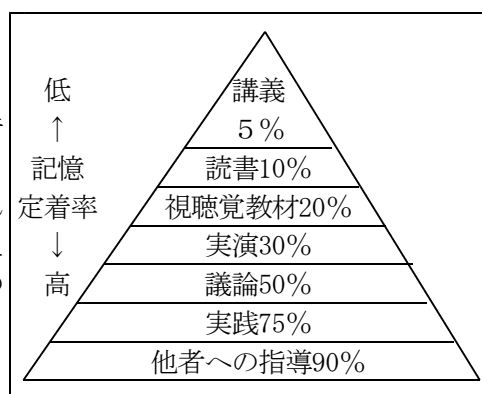


図2 学習ピラミッド（大和隆介 2004）

ォトランゲージ、シミュレーション、ロールプレイ、プランニングがあり、「学習者が、単に受け手や聞き手としてではなく、その学習過程に自主的に協力的に参加することをめざす学習方法」と捉えている。そして、いずれの手法にも共通する基本的な特徴として、「①学習者の緊張を解き、その場の雰囲気や和ませる中で、学習者が持っている知識や経験、個性や能力を引き出し、相互の意見交流や相互理解を促進すること ②その過程で学習者が新しい発見をしていくこと」を重視していることを指摘している。

参加型学習では、教師のことを「ファシリテーター(促進者)」と呼び、「生徒ひとりひとりがもっている経験・知識・意見などを引き出し、対話を生み出し、相互の学び合いを促進する役割である」としている。教師は、生徒に「自分と現実世界との関わりに気づく中で、自分がその世界に主体的に関われる楽しさ、またその世界の変革や創造に参加できる楽しさ」（開発教育協会）を実感させるため、学びを現実感あるもの、未来につながるものにしていくことが大切である。

(5) 体験・活用・参加型のタスク活動を用いることの意義

体験・活用・参加型の学習について、それぞれ述べてきたが、図3に示すとおり、これらは切り離して捉えるよりも各活動を交互に用いたり、統合的に学習に取り入れたときに、生徒の学習意欲をひきだす動機付けとなり、言語習得のより大きな効果が期待できる。このことは、中央教育審議会答申（2008）において記されている「思考力・判断力・表現力の育成のために不可欠な学習活動」からも読み取ることができる（表4）。同答申の①が体験型、③が活定型、⑥が参加型学習のそれぞれの特徴を表しており、これらの要素を含むタスク活動を用い、計画的、

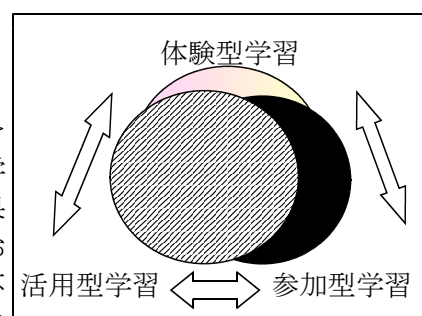


図3 体験・活用・参加型の学習の関連イメージ

且つ継続的に授業を組み立てることにより、学習者の思考力・判断力・表現力等が育成されると考える。また、体験・活用・参加型のタスク活動をとおして、個々の既習の知識と習得した知識が融合され、大きな組織的知識体系が確立されると考える。さらに、語学学習の面においても、個々の語彙や文法事項等に係る文法能力が、上記のタスク活動をとおして社会言語能力や談話能力、方略的能力等と結びつき、実践的コミュニケーション能力が育成されるであろうと考える。

表4 思考力・判断力・表現力を育むために必要な学習活動（中教審答申 2008.1.17より抜粋）

- | |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> ① 体験から感じ取ったことを表現する ② 事実を正確に理解し伝達する ③ 概念・法則・意図などを解釈し、説明したり活用したりする ④ 情報を分析・評価し、論述する ⑤ 課題について考え、構想を立て実践し、評価・改善する ⑥ 互いの考えを伝え合い、自らの考えや集団の考えを発展させる |
|---|

3 授業の工夫

(1) スキットをいかに授業にとりいれるか

高等学校学習指導要領解説（1999）によると『スキットなど』とは、モデルとなる会話をもと

に筋や役割を工夫して演技することや、簡単な台本をもとにした寸劇、与えられた役割に即し、場面や目的に応じて自分の英語で発話するロール・プレイ、与えられた状況で自由に演技する即興劇、舞台などで演じる戯曲などを意味する。」とある。

本研究では、生徒が、授業で学習した言語材料の「命令文」を用いて、話の展開、登場人物、それぞれの人間関係、場面などにポイントをおいて、オリジナルの台本を制作した。スキットの台本作成、及び演技発表については、「意見をまとめやすい」という点と「全員が演技に参加する機会をあたえやすい」という視点から3名1グループの活動とした。

スキットの演技のために必要な要素を表5にまとめる。

表5 スキット演技のために必要な要素

① スキットなどの内容を十分に理解し、全体の流れ、登場人物の心の動きなどを的確につかむ。
② どのような英語表現を使い、どのような非言語的手段を使えば、それらを効果的に表現できるかを工夫する。
③ スキットなどを見ている生徒たちも、物語の流れ、登場人物の心の動きなどを的確につかむ。

また、他のグループのスキットを評価することにより、クラス全員が授業へ参加しているという意識と、英語を聞こうとする集中力が高まるものと考ええる。しかし、生徒の実態に応じて、評価項目等を工夫することも大切である。本研究においては、表6のように「内容、演技、英語力」の3つの視点からお互い同士の評価を求めた。さらに、授業の最後には、スキット全体のフィードバックとして、ALTにグループ毎の演技に対するコメントを述べてもらい、スキット活動が今後の学習指導に生かせるよう工夫を施した。

表6 Judging Sheet

Judging Criteria			A	B	C	D	E
1	Content (5)	Creativity of scene	5	4	3	2	1
2	Performance/Delivery (10)	1.Audience appeal 2.Overall quality of performance 3. Memorization	10	8	6	4	2
3	English(5)	intonation, pause	5	4	3	2	1

(2) ディベートをいかに授業にとりいれるか

高等学校学習指導要領解説（1999）では、「ディベートは、与えられた論題をもとに肯定側と否定側に分かれ、一定の規則、進行の仕方、制限時間などに従って、自分たちの立場の正当性を聞き手に受け入れてもらうことを目的として議論する対立型コミュニケーションの形態である。」と定義されている。以下に、同指導要領解説を参考にディベートを行う際の注意点についてまとめる。

（表7）

表7 ディベートを行う際の注意点（高等学校学習指導要領解説 1999を参考に作成）

① 準備段階やディベートの実施段階にあつては、4領域を有機的に関連付けた学習を行うよう配慮すること。
② 生徒が論題について主体的に考えた上で活発にディベートができるようにするため、生徒の興味・関心や英語の理解力及び表現力などを考慮して論題を設定し、事前の指導を行い、生徒に十分な準備をさせること。
③ 話し手の議論のポイントや展開を注意深く聞きながら理解し、その反論を考えて発表するといったように、相手の論点に直接対応すること。
④ 選ばれた数名が、時には聴衆全員がジャッジになり、一定のルールと方法によって、それぞれの主張を評価し、肯定側と否定側のどちらが論理的により説得力があったかを判定すること。その際、なるべく多くの聴衆をジャッジとすることで、全員参加型の学習とすることができる。
⑤ ディベートの優劣の判定に当たっては、感情的にどちらの側へ賛成するかではなく、提示された議論の適切さと一貫性を判定するよう求め、判定の方法についての指導も行うこと。

上記の①、②及び③について、本研究では、“Guess Game”や“One Minute Chat”“ChainTalk”等の4領域を有機的に関連づけた事前活動を取り入れることにより、相手の言っていることを積極的に理解しようとする姿勢や自分の言いたいことを論理的に伝えようとする態度、及びディベートに必要な表現等を身につけさせることにより、生徒のディベートに対する興味・関心を喚起した。また、あまりディベートになれていない生徒達の準備にかかる負担を軽減するため、「お正月はクリスマスよりも素晴らしい」という生徒にとって身近な論題を設定することにより、活発にディベートができるような態勢作りを図った。以下に“GuessGame”“One Minute Chat”“Chain Talk”についての説明を付す。

① Guess Gameとは

- ア まず始めに、2名1組のペアを作る。
- イ 相互に向かい合わせ、一方は黒板が見える位置、他方は見えない位置に立たせる。
- ウ 教師が黒板にある一つの英単語を書く。
- エ 黒板の見える側に立っている生徒は、その単語を確認し自分のペアに対し、その単語についての説明を英語で行う。(但し、説明の中で、その単語自体を用いることはできない)
- オ 説明を受けた側の生徒は、それをもとに推測し、黒板に書かれている単語を一定の時間内にあてる。

② One Minute Talkとは(別添資料6参照)

- ア まず始めに、2名1組のペアを作る。
- イ 発話例をもとに、「プラス1文」「関連した質問」「相づち」「会話がとぎれたときの質問」を付け加えながら、1分間、会話を繋げていく。
- ウ うまくできたかどうかを自己評価表に記入する。

③ Chian Talkとは(別添資料7)

- ア まず始めに、3名1組のグループを作る。
- イ 最初の発言者が、「自分はEメールを送るよりも電話をするほうが好きだ」あるいは、「自分は電話をするよりもEメールを送るほうが好きだ」という意見を述べる。
- ウ 他のメンバーは、「〇〇さんは、△△ということを言っている。私も同じ意見です。(私は意見が違います) 私は◇◇することが好きです。」というように、最初の発言者の意見と比較しながら、自分の意見を明確に伝える。
- エ Stage 2では、最初の発言者の意見と比較しながら、自分の意見を明確に伝えた後、「どうして意見が同じなのか(違うのか)」について理由を述べる。

本研究で行ったディベートは3名1組のミニ・ディベートであり、図4のような流れで行った。特に、賛成派、反対派それぞれの3名のグループメンバー全員が、ディベートに参加できるよう、立論から質疑応答にわたり第1スピーカーから第3スピーカーを設定した。さらに、作戦タイムを設け、相手を論破するため、それぞれのチームワークを発揮する場面も設けた。

今回は、クラスサイズが小さかったため、全体を9名ずつに分け、2つのグループがディベートを行っている際は、他の1グループが司会、並びに審査を行った。そして、ディベートに勝ったチームは、次に司会・審査だったチームとの対戦を行い、負けたチームが司会・審査へとまわる勝ち残り方式を採用した。

表7④⑤の評価については、別添資料8、9にあるとおり自己と他者の両方について評価できるようにし、常に全員が授業へ参加できるよう工夫を図った。

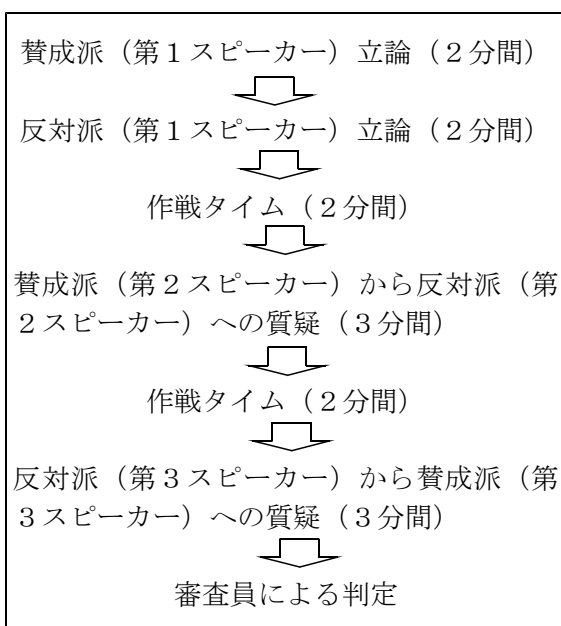


図4 ミニ・ディベートの流れ

Ⅲ 指導の実際

実践事例 1 高等学校の実践より 沖縄県立西原高等学校教諭 島田 純

1 単元名 : Reading 13 Cashier Defeats Gunman

ORBIT English Reading New Edition (SANSEIDO)

2 単元設定の理由

(1) 教材観：比較的平易な文章で書かれた文章であるが、命令文を使ったレジ係と武装犯人のやりとりから、その場の雰囲気やストーリー展開（おち）を理解しなければならない。文の前後関係から意味を推測することが難しい生徒がでくると予想される、単語や表現の定着を図り、適宜場面の説明を加えなければならないと考える。

(2) 生徒観：検証授業を実施した8組は文理進学コースであり、習熟度で成績が上の方のクラスである。英語に対して、興味関心が高く、授業に向かう姿勢も積極的である。しかし、基礎的な英語の力の定着がなされていない生徒もあり、英語の実力差が伺えるのが現状である。

本年度の3学年は、2年次より習熟度による授業展開を行っており、その中で、Aクラスは大学受験を希望している生徒が多い。しかし、一般入試で大学を受験する生徒は少数で、9割以上が推薦入試制度を利用した進学を考えている。そのため、受験に対する学習意識は低い。

(3) 指導観：教育課程において、3年次に「リーディング」4単位を設置しており、英語の学習指導は基本的に選択科目履修者を除けば、この4単位内で行っている。本教材では、速読を意識した授業展開を行い、大意をとる練習を繰り返してきたが、文法訳読式の授業でフォローを入れなければならないのが現状である。

本課のまとめとして、実践的コミュニケーション能力の育成の観点より、リーディングの授業内で4技能を効果的に身につけ自発的な活動として、どのようなTaskが課せられるのかを考えたとき、評価の観点の『命令文が、どのような場面でどのように使われているのか理解でき、適切な場面で使う事ができる。又、物語文で、どのようにしたら「おち」を効果的に伝えることができるのか理解できる。』ということから、命令文を使用した短いスキットを作成させることで、4技能を効果的に使用しながら、実践的コミュニケーション能力の育成が図れるのではないかと考えた。検証授業クラス8組はオーラルコミュニケーション（2単位）も必修としているため、今回、英語を発話することに関しての動機付けはされているものと考えるが、実際のところ、ほとんどの生徒が英語で発話することに関しては消極的な生徒達である。よって、動機付けと環境作りが必要である。

3 単元の学習目標

- (1) 難解な表現があっても、挿し絵や文の前後関係から意味を推測し、内容を理解する。
- (2) 命令文が、どのような場面でどのように使われているのか理解でき、適切な場面で使う事ができる。
- (3) 物語文を読み、そこに埋め込まれた伏線と「おち」との関係に注意しながら読むことができる。
- (4) 物語文の構成を理解し、あらすじをとらえてそれを日本語で説明することができる。
- (5) 場面を構成し、簡単な英語でスキットを作成し、発表することができる。

4 単元の具体的な評価基準

関心・意欲・態度	表現の能力	理解の能力	言語や文化についての知識・理解
① 物語文に興味・関心を持って読もうとしている。 ② 物語のユーモアを理解し、楽しんで読もうとしている。 ③ 難解な表現があっても、挿し絵や文の前後関係から意味を推測しようとしている。	一話すること ① 物語文を聞いて、そのあらすじを簡単に伝えることができる。 ② 物語文の内容を尋ねる質問を英語で作成し、またそれに英語で応答することができる。 ③ 命令文を聞き、そ	一聞くこと ① 物語文を聞き、そのあらすじとおもしろさを日本語で説明することができる。 ② 物語文の中で、命令文を使ったレジ係と武装犯人のやりとりを聞き、その場の雰囲気を理解できる。 ③ 命令文を聞き、そ	① 命令文が、どのような場面でどのように使われているのか理解でき、適切な場面で使う事ができる。 ② 物語文で、どのようにしたら「おち」を効果的に伝えることができるのか理解できる。

④与えられた課題を組み込んだスキットを楽しく表現し，発表している。	の用件の緊急性を理解することができる。 ④自分の意見や考えを英語で，相手に伝えることができる。 —書くこと— ①肯定・否定の命令文を含む簡単な文を書くことができる。 ②過去完了を用いて，自分の経験や出来事を前後関係がわかるように書くことができる。 ③場面を設定し，簡単な英語で，スキットを作成することができる。	③過去完了の含まれる文を聞き，過去に起きたことを順序立てて理解できる。 ④スキット作成過程でALTの指導助言を理解し応答できる。 —読むこと— ①物語文の構成を理解し，あらすじをとらえてそれを日本語で説明することができる。 ②物語文を読み，そこに埋め込まれた伏線と「おち」との関係に注意しながら読むことができる。 ③命令文が使われている文に注意し，臨場感のある音読ができる。 ④過去完了の用法を理解した上で，出来事の前後関係を正確に理解ができる。	③スキットを作成する過程で自分の考えていることを相手，（ALT）に伝え、英語で表現することができる。
--	---	--	---

5 学習計画（配当時間 5 時間）

時間	指導目標	学習活動	評価方法
1	Introduction Pre-reading task Reading section 1	■ listening ■ Check the new words and new phrases. ■ Grammar focus ■ Reading Comprehension	Check their worksheet and ask some questions about the lesson
2	Reading section 2	■ listening ■ Check the new words and new phrases. ■ Grammar focus ■ Reading Comprehension	Check their worksheet and ask some questions about the lesson
3	Task-based activities in groups Make a skit	■ Work in groups of three. ■ Students make a skit manuscript in Japanese. Act (role play) and work out the task in groups.	Check each group's composition
4	Task-based activities in groups Make a skit	■ Work in groups of three. ■ Students make a skit in English. Act (role playing) and work out the task in groups. Students ask ALT to help their skit	Check each group's skit
5	- 'Today' s lesson - ☛ Presentation of skit	☐ Work in groups of three. ☐ Students play a role in their skit.	Evaluate each group's skit performance

6 本時の授業展開

Procedure	Learners' Activities	Instructor's Guidance	Skills	Remarks
Greeting & casual conversations (1min)	■ Greet Teacher ■ Listen to the teacher and answer the questions ■ Make a group of three (Skit group)	■ Greet students - Say a few words and ask some questions	L,S	Make a group of three (Skit group)
Introductions Presentation of today's class (2min)	■ Listen to the teacher ■ Prepare for their skit	■ Give the students Judging sheet ■ Tell the students skit definitions and presentation rules ■ Give some advise to the students about their skit performance	L,S	△ Judging sheets
Rehearsal (5min)	■ Students practice before their skit performance - Make sure of each role - Check the pronunciation of words and phrases	■ Encourage the students perform their skit without hesitation ■ Ask ALT to help the students	L,S,W,R	△ Skit manuscript To give Some advise if necessary
Presentation of skit (35min)	■ Perform their skit within 5min ■ Observe the other student's skit and evaluate it	■ Introduce judge ■ Observe the student's skit and evaluate it	L,W,S	△ Judging sheets To give Some advice if necessary
Consolidation (5min)	■ Listen to the teacher and respond appropriately ■ Share their feelings and thoughts with each other	■ Give the students some comments about their skit	L,W,S,	△ Judging sheets (Task2)
Closing (2min)	■ Students take notes	■ Give the students home assignment	L,W	△ Work sheets

1 Goal:

- (1) To promote students' communicative abilities through presentations of skit performance
- (2) To encourage the students speak and write in English their skit

2 Date: Nov 10th mon, 08

3 Skit definition and presentation rules:

- (1) Style and content: Free, but should be original.
- (2) A skit is by definition a short, usually comical, theatrical sketch.
- (3) Presentation time limit: within 5 minutes.
- (4) Skit Manuscript: should be used Imperative Sentence in their skit manuscript. should be memorized their skit with each role.

(5) Evaluation: Content (5), Performance /
Delivery (10), English (5)

7 事前アンケートについて

生徒の事前アンケート（受け持ちクラス82名対象）の結果を考察すると、学習者の理解度（図5）において、教科書の内容を読んで「理解する割合が半分」であるという生徒の割合が半数以上を占め、「読めない」・「理解できない」を含めると8割以上を占めている。教科書の難易度の妥当性は今回の主旨ではないのでふれないが、生徒自身が英語の教科書に持っている気持ちの閉塞感みたいなものが伺える。実際、授業の雰囲気や生徒の英語力からすると少し自嘲気味なところはあるが、自己理解は行われている。リーディング活動の障害（図6）になっていることでは語彙不足・文法的知識不足の割合が半数以上を占める。教えていて感じることであるが、習熟度で上位クラスであるにもかかわらず、基礎的な英語の力が定着されていないのが現状である。

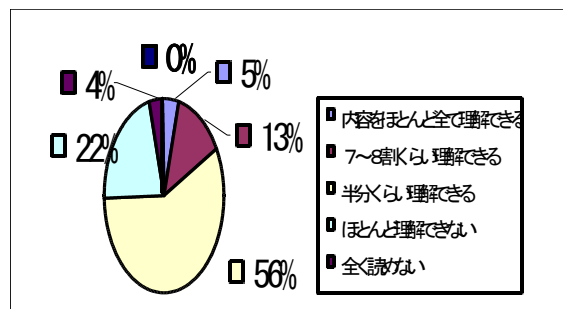


図5 英語の教科書を読んだ理解度

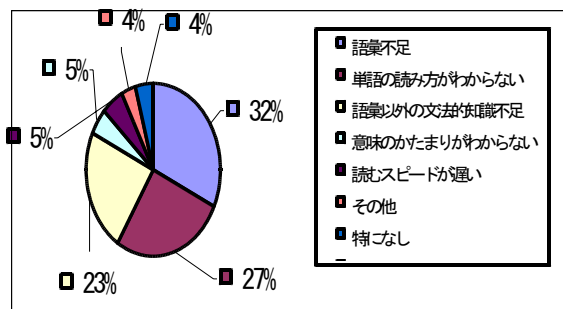


図6 リーディング活動の障害になっていること

8 授業実践の考察

リーディングの授業を行う中で、上記の結果を考慮し、生徒の自発的な活動として、どのような取り組みが可能であろうかという事を考えた。本教材では、速読を意識した授業展開を行い、大意をとる練習を繰り返してきたが、文法訳読式の授業でフォローを入れなければならない。学習者にとって高次のタスクを与えても決して有益には働かないのではないかと考えた。出来るだけ学習者にとって無理のないタスクとなるよう考慮し、『命令文を使用した短いスキットを作成・発表させることで、4技能を効果的に使用し、生徒達の実践的コミュニケーション能力が育成される』という仮説のもと本授業実践を行った。

本課の本文理解を終えた後、3人一組のグループをつくり、グループでスキットを作成させた。本課の表現の一つである『命令文』を使用することとグループ全員が必ず役割を持ち英語で発話するという条件を与えた。原稿作成1時間、英文作成及びネイティブチェック1時間、発表1時間の計3時間を配し、時間内で終われないことに関しては宿題とした。普段の授業で行っていることと違う課題を与えた事による動揺みたいなものが少なからずある生徒もいたのだが、全体的には積極的に取り組む生徒が多く、主旨を説明すると楽しんで活動している様子が伺えた。何より英文を作成するというのが生徒達には初めての経験となり、ALTに添削してもらい際にも積極的に自分たちの考えを伝えようとする姿勢がみられた。英語による発話や英作文をほとんど行っていない中で、生徒達が活動を通して自分の英語力を顧みて英語学習

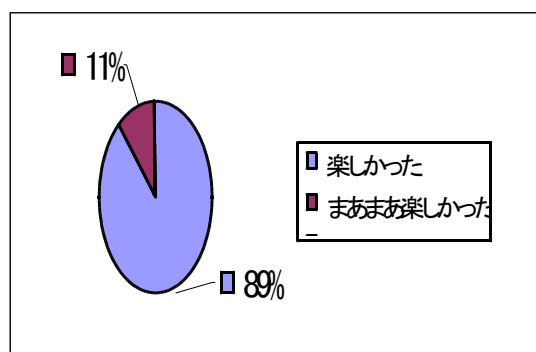


図7 スキットを作成してどうでしたか

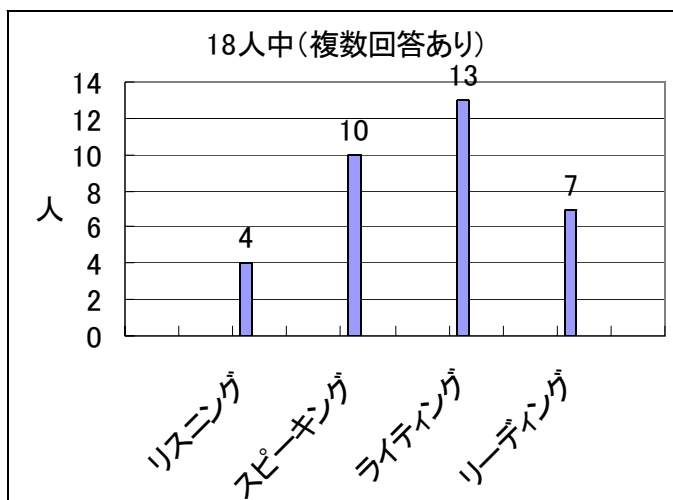


図8 スキット作成でついたと思う英語力

に対する動機付けには非常に効果があったと考える。事後アンケートの結果では今回のスキット作成が楽しかったと回答（図7）しており、スキットを作成してついたと思う英語の力は何か（図8）との問いに、1つ以上を回答する生徒がほとんどであった。スキットを作成すると一番困ったことは何かとの問いには、ストーリー設定（おちを作ること）や英作文など様々な意見がでてきた（表8）。これから分かるように生徒にとってスキット作成は4技能を使用する活動となり、その上、生徒自身もそれを認識できたものとする。

9 成果と課題

表8 生徒の感想

本検証授業の生徒のアンケート結果から考察すると、評価の観点である「生徒自身がスキットを作成する過程で自分の考えていることを相手に伝え、英語で表現することができる」・「与えられた課題を組み込んだスキットを楽しく表現し、発表する」・「自分の意見や考えを英語で相手に伝えることができる」など全ての観点で目標達成できたのではないかと考える。生徒自身がスキットを作成する中でALTとの会話が成立したときの目の輝き、スキットを作成し、演じることで英語を楽しむという素朴な感動を生徒はもとより、私自身も感じた。作品の完成度や英語の表現については、確かに多くの課題が残るが、学習意欲をひきだす動機付けとなり、言語習得の大きな効果が期待できるのではないだろうか。

・話の落ちを作ることが難しい。わかりやすく伝えること。
・会話文の作成。
・話を作って英語にするのが大変だったけどトーニャに教えてもらって出来て良かった。
・みんながユニークなストーリーを作り、名演技をやって、とても楽しかったです。
・授業（スキット）は楽しくてやり方もいいと思う。
・自分たちで文章を考えるのは大変だった。でも自分で英語の文章を考えることは、英語の力がつくと思った。
・スキットの授業を受けたのは初めてだったので少し難しかったけど、楽しくできました。文を作るのが難しかったけど、教えてもらったりしてちゃんと仕上がったのが良かったです。

教材観・生徒観によって『体験・活用・参加型の学習』に違いがでる上、それに対応した工夫が必要であると切実に感じた。今回の仮説である『命令文を使用した短いスキットを作成・発表させることで、4技能を効果的に使用し、生徒達の実践的コミュニケーション能力が育成される』ことについての検証は不十分である。「動機付け」という本当に導入の部分で終わってしまった感が残る。リーディングという教科であることと、受験を控えた3年生の場合について「生徒の活動」に対しては消極的になってしまい、講義形式の授業中心に陥りがちである。『体験・活用・参加型』の学習をさらに研究し、いかにうまく教材に導入するかが、今後の研究課題となった。

実践事例2 高等学校の実践より 沖縄県立球陽高等学校教諭 平良 学

1 単元名：第2部 活動編

段階的スピーキング活動42（三省堂）

2 単元設定の理由

- (1) 教材観：生徒たちは中学校、高等学校とほぼ6年間ものあいだ英語の学習をしてきている。では、実際外国人を前にして英語を使い自分の意見を伝え、また、相手の意見を正しく聞きとることができるだろうか。本課では生徒達に、英語を話すこと、また聞くことに慣れさせ、基本的な会話から、お互いの意見を論理的に交換していくディベートにまで高めていこうというねらいを持っている。ある事柄について意見を述べる場合、相手を納得させる言い方、反対する言い方などを具体的・体験的に実施してるところまでもっていきたい。
- (2) 生徒観：球陽高校はほとんどの生徒が国公立大学進学を希望するいわゆる進学校である。今回授業を行った3年生のB選択の生徒17名は英語の実力という点ではレベル的に差がやや見られるものの、概して総合的な力のある生徒たちである。素直で明るい生徒が多く、コミュニケーション重視の活動にはとても積極的である。
- (3) 指導観：高等学校学習指導要領には外国語の目標として「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や相手の意向などを理解したり自分の考えなどを表現したりする実践的コミュニケーション能力を養う。」とある。

「自分の意見・考え・感想を言える」「会話を継続できる」「論理的に話ができる」「話題に関する質問やその応答ができる」「自分の持っている情報を第三者に伝えることができる」これらの力は実際に英語を運用していく上で必要不可欠な能力である。そして、これらを養っていくには単なるパ

ターンプラクティスやドリル演習では不十分であろう。体験的な活動を通して、実際に理解しようとする態度、理解させようとする態度を持ってターゲットとなる言語を使用しなくてはならない。そういう点で、ディベートを最終目標と置く今回の指導計画は実践的コミュニケーション能力を育むに最良の方法である。

3 単元の目標

- (1) ディベートへの橋渡しタスクとしての“One Minute Chat”で、英語で会話をする態度を養う。
- (2) 二つ目のタスクとしての“Chain Talk”により、相手の意見を聞こうとする態度、また、自分の考えを相手に伝えようとする態度を育てる。
- (3) 自分の意見を述べる時、どのような表現を用いたらよいか、また、賛成したいときや違った意見を述べたいときにはどうしたらよいか学び、ディベートの基礎をつくることができる。
- (4) 上記(1)から(3)を基にディベートを行い、実践的コミュニケーション能力を高め、論理的思考を養うことができる。

4 キャリア教育の視点

本単元においては、キャリア教育で育成すべき4つの能力領域の中では、特に「人間関係形成能力」が特に関連していると考えられる。「自己理解を深め、他者の多様な個性を理解し、互いに認め合うことを大切にして行動していく能力」とされている「自己の理解能力」、また、「多様な集団・組織の中で、コミュニケーションや豊かな人間関係を築きながら、自己の成長を果たしていく能力」とされる「コミュニケーション能力」両方の能力の育成につながるだろう。加えて、スキットを取り入れた学習においては、現実の場面を演じさせるということで「コミュニケーション能力」の向上が期待される。

5 単元の評価規準

【関心・意欲・態度】	【表現の能力】	【理解の能力】	【知識・理解】
① 相手の意見について関心を持ち、授業に積極的に参加しようとする。	① 英語での基本的な会話技術を身につけている。	① 相手の発言を聞き取り、理解することができる。	① 「賛成や反対の意思を表す」に用いられる語句や文法を理解している。
② 与えられたトピックについて自らの意見を持ち、意見交換をしようとする。	② 場面や話題に応じた英文を書いたり話したりすることができる。	② 相手の意見に対する適切な質問をすることができる。	② その他学習したディベートで使える表現などを使い活用できる。
	③ 「賛成・反対する」表現の働きについて理解し対話することができる。		③ 場面や状況、目的に応じた表現を知っている。

6 授業における単元の指導と評価の計画

時間	学 習 活 動	学 習 目 標	評価規準				評 価 資 料
			関	表	理	知	
1	・ディベートについての紹介 ・日本語によるディベート	・ディベートにについて知る ・グループをつくり、ワークシートに従って日本語でディベートを行える	①				行動観察 発表
2	・ブレインストーミングをしてディベートの準備をする ・ディベートで使える表現を学習する	・ワークシートを利用したブレインストーミングができる ・ディベートでよく用いられる表現を知る				①	行動観察 ワークシート

3	・ 実際のディベートに向けていくつかのタスクを行う ①ワンミニットチャット ②チェーントーク	・ 英語で、あるテーマに従って自分の言いたいことを表現できるようにする ・ ディベートに必要な「相手の意見を注意して聞く」という力と「理由を簡潔に答える」という力をつける		①			行動観察 ワークシート テスト
4	・ 前回①②2つのタスクを実施。 ・ ワークシートを利用しディベートに向けての準備	・ 英語で、あるテーマに従って自分の言いたいことを表現できるようにする ・ ディベートに必要な「相手の意見を注意して聞く」という力と「理由を簡潔に答える」という力をつける ・ 次回のディベート活動に向けグループで発言内容や質疑応答を考える	②	②			行動観察 ワークシート
5	・ 前回同様①②2つのタスクを実施 ・ ディベート活動	・ 英語で、あるテーマに従って自分の言いたいことを表現できるようにする ・ ディベートに必要な「相手の意見を注意して聞く」という力と「理由を簡潔に答える」という力をつける ・ ディベート活動を通して、自分の立場で意見や理由を述べる方法を身につけ、ディベートで用いる表現になれるとともに、対立する二者（肯定・否定）の立場にもとづく意見の述べ方を身につける。			① ②	② ③	行動観察 ワークシート テスト

本
時

7 本時の学習指導

(1) 本時の単元名

第2部 活動編 段階的スピーキング活動42（三省堂）

(2) 本時の指導目標

- ① ディベートへの橋渡しとして行う“One Minute Chat”で、英語で会話をする態度を養う。
- ② 2つ目の活動として“Chain Talk”を行い、相手の意見を聞こうとする態度、また、自分の考えを相手に伝えようとする態度を育てる。
- ③ 自分の意見を述べる時、どのような表現を用いたらよいか、また、賛成したいときや違った意見を述べたいときにはどうしたらよいか学び、ディベートの基礎をつくることができる。

④ 上記(1)から(3)を基にディベートを行い、実践的コミュニケーション能力を高め、論理的思考を養うことができる。

(3) 授業の仮説

生徒が学習を進める過程において、相手の意見を注意して聞き、自分の意見をまとめ発表するディベート等の体験的タスクを通し、実践的コミュニケーション能力（自己を表現し、また他者の意見を理解しようとする態度）を伸ばすことができるだろう。

(4) 言語材料

Oh, did you? / No kidding. / What else did you do? / You said that ～. / I think [believe, feel] ～. / I agree[disagree] with ～. / S said that ～. / I have a different opinion. / I don't think so. 等

8 本時の具体的な評価規準

学 習 活 動	具体的な評価規準 (評価の観点)	評価基準			評価材料
		A	B	C (支援)	
ワークシートを使い、ペアで会話練習をする。 グループに分かれ、ワークシートによる会話練習をする。	英語での基本的な会話技術を身につけている。 (関心・意欲・態度) (表現の能力) 【One Minute Chat】	相手の話を正確に理解し、自分の言いたいことも正しく表現できている。	相手の話に耳を傾けて、積極的に自分の言いたいことを伝えようとしている。	自分の考えを日本語で表現させ、英語で必要な単語や文型を確認させる。	行動観察
	相手の意見を聞き、それに対して自分の意見を述べる方法を身につける。 (表現の能力) 【Chain Talk】	前の順番の生徒が述べた意見をしっかりと聞き取り繰り返すことができ、自分の意見もしっかりと述べる事ができている。	前の順番の生徒の述べた意見を概して聞き取ることができ、自分の意見もある程度伝えることができている。	聞き取れなかった部分を繰り返させる。自分の考えを日本語で表現させ、英訳に必要な単語や文型を確認させる。	行動観察発表
グループに分かれ、ディベート活動をする。(自己評価・生徒間評価を含む)	自分の立場で意見や理由を述べる方法を身につける。また、ディベートで用いる表現になれるとともに、対立する二者(肯定・否定)の立場にもとづく意見の述べ方を身につける。 【Mini Debate】	グループ内で協力しディベート活動を行える。相手の発言(意見)を理解し、自分たちの意見もしっかりと述べる事ができる。相手に適当な質問をすることができ、また、相手からの質問にも積極的に答えられる。	グループ内で協力しディベート活動を行える。相手の発言(意見)をだいたい理解し、自分たちの意見も述べる事ができる。相手にも質問することができ、相手からの質問にもある程度答えられる。	発言したい文章を英語にするためにヒントとなる単語や文型を確認させる。聞き取れていなかった部分は他の表現で述べさせたり、教師が繰り返したりする。質問もまたそれに対する応答も同じような支援を行う。	行動観察発表

9 本時の指導過程

Procedure	Instructor's Activities	Students' Activities	Remarks
Greeting & Introduction(1min)	Greet students Announce today's schedule briefly	Greet the instructor	Whole Attendance

Warm-up (3min)	Guess Game: Give a pop quiz writing an English word on the board	Guess Game: Make pairs and enjoy the game One student in a pair faces the board and explains what the word it is on the board in English, while the other guesses what it is.	Pairs
Task 1 (3min)	One minute chat: Make the students find their partners Give them the worksheets Listen to the conversations among the students and give them some help if needed	One minute chat: Find a partner and enjoy chatting Use the worksheet (which includes self evaluation part)	Pairs Worksheet
Task 2 (3min)	Chain Talk: Divide the students into 6 groups; each group has 3 members. Give them the worksheets Listen to them talking with the worksheet	Chain Talk: Make groups of 3 (which are going to be debate teams) Talk with the members using the worksheet	Group Worksheet
Task 3 (45min)	Mini Debate: Make the students arrange the desks for a debate Hand them the worksheets and give them 5 minutes to prepare for a debate Give them some help if needed Make sure they are ready for the debate. Make them begin the debate	Mini Debate: Arrange the desks for a debate. Prepare for the debate using the worksheet Begin the debate	Groups Worksheet Presentation
Self Evaluation (3min)	Give the students the evaluation sheet to fill in	Evaluate themselves using the evaluation sheet	Worksheet
Consolidation (1min)	Give the results of debate competition again Make a few comments about the debate	Listen to the instructor	Whole
Closing (1min)	Discuss the next class	Listen to the instructor	Whole

※ Procedure will be changed according to the time spent in each activity.

10 授業実践の考察

本授業実践は、「生徒が学習を進める過程において、相手の意見を注意して聞き、自分の意見をまとめ発表するディベート等の体験的タスクを通し、実践的コミュニケーション能力（自己を表現し、また他者の意見を理解しようとする態度）を伸ばすことができるだろう。」という仮説のもと行った。生徒に対して実施したアンケート結果を踏まえ考察していく。アンケートは2回行い、まず事前アンケートとして検証授業2カ月ほど前の9月11日に授業内で実施した。そして11月6日、事後アンケートを検証授業が終わったその次の授業内で行った。

(1) 生徒の感想からみえてくるもの

表9は「ディベート学習でよかったと思うことは何ですか」という質問への回答である。「楽しく活動できた」という旨の答えがいくつか見られ、生徒たちが積極的に取り組めた様子がうかがえ良い結果ではあるが、注目したいのは「英語をしゃべる機会を与えてくれた」や「自分の思っていることを相手に伝えようと頑張れた」という回答である。これらはまさにこの一連の学習計画における大きな目的である「実際に英語を使用させコミュニケーションを体験させる」への結果であると考えられる。生徒たちには指導者中心ではない生徒中心の学習スタイルは新鮮だったかもしれない。やはり、学習した言語材料を実際に使ってみたいという彼らの欲求を満たす場を与える必要があるだろう。

今回のディベート等のインタラクティブな活動は、生徒たちのそういう「コミュニケーションをとりたい」という部分の「実践的コミュニケーション能力を高める良い活動であっただろう。

表10は逆に「ディベート学習でだめだったと思うことは何ですか」という質問への回答である。3年生であったということで「受験に必要ななかった」や「受験前には・

・・×」という答えが返ってきている。もっとセンター試験等の受験に直結したいいわゆる「受験英語」をやりたいという声も聞こえてはいた。今授業実践を実施したクラスは選択の授業であり、オールイングリッシュのコミュニケーションな授業になると始めから伝えていたが、それでもやはり2学期になると心配になるのだろう。実践的コミュニケーションを育むには現実に迫ってくる「受験」というシステムが大きな壁になっていると実感させられた。

(2) 4技能に関連した「実践的コミュニケーション能力」について

「特に伸ばしたい英語の力は何ですか」(図9)という問いには、事前で「単語・文法の知識」や「リーディング」といったどちらかというと「受験」に関連した力を伸ばしたいと考えている生徒が多かったが、事後には、「スピーキング」を伸ばしたいとする生徒が増えた。これは、ディベートを始めとする様々な体験的学習をさせることで、英語は自分を理解してもらい他人を理解する

表9 アンケート結果1

- ・自分の意見をいえるようになった。
- ・日常会話はできるようになった。
- ・みんなと一つになれた。
- ・笑えたのがよかった。
- ・少し話せるようになった。
- ・時間があつという間に過ぎるくらい楽しかった。
- ・みんなでやるのは楽しかった。
- ・自分の思っていることを相手に伝えようと頑張れた。
- ・英語をしゃべる機会を与えてくれた。
- ・リスニングに注意して聞けるようになったこと。
- ・楽しく英語に触れあえた。
- ・スピーキングに少し自信がついた。恥じらいをなくせた。
- ・時間に制限があるので、伝えたいことを速く頭の中で組み立てる力がついてよかった。
- ・どうにか英文を作ろうと努力ができる。

表10 アンケート結果2

- ・負けたら落ち込む。
- ・考えすぎて何も発言せず自分たちの持ち時間を使ってしまった。
- ・協力が足りなかった。
- ・受験前には・・・×。
- ・文を作れなくて答えられなかったこと。
- ・少し文法にとらわれそうになったこと。
- ・たまにぐだぐだだった。
- ・文にできなかった。
- ・自分発言が少なかった。
- ・受験に必要ななかった。
- ・言いたいことが英語ですぐに思いつかなかったりした。

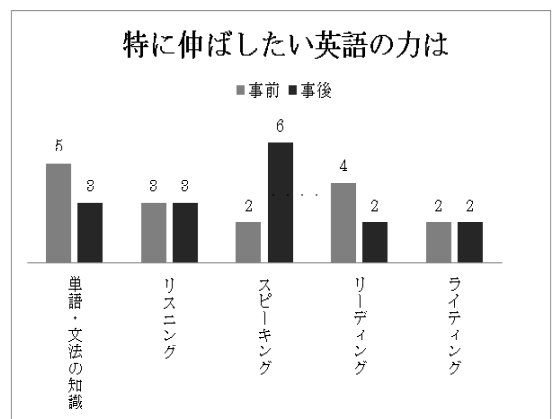


図9 アンケート結果3

手段であり、実際にそれを使いコミュニケーションできることの大切気付いた結果だと考える。続く「英語で話すことは楽しいですか」(図10)という質問に「楽しい」と答えた生徒が増えていることもそれに関連した結果であろう。

以上からスピーキングへの関心と意欲が高まっている生徒が増えているのが分かるが、では実際「どの程度英語を話せる」と感じているのか図3がその回答である。「三つ以上の単語をつなぎ合わせながら、何とか自分の思っていることを伝えることができる。日常会話であれば、思っていることの半分くらいは伝えることができる。」又は「多少、語順や文法的な間違いはあるが、文の形で自分の思っていることを伝えることができる。日常会話であれば、思っていることの半分くらいは伝えることができる。」と答えた生徒が事前アンケートにおいては8名だったのが、事後には13名に増えている。これほどの短期間で急激に英語作文の能力が伸びていることはないと考え、これまでその力はあるながら間違えることへの恐れや英語を話すこと自体への恥ずかしさから積極的な発話につながらなかったのが、今授業実践を通して「自分を表現する」という面での「実践的コミュニケーション能力」が高まりこの結果につながっているのだろう。

(3) 情意面に関連した「実践的コミュニケーション能力」について

「好きな活動はどれですか」(図12)という質問で、事前に行ったアンケートでは「ゲーム」が多かった。しかし、事後のアンケートでは「ディベート」や「スキット」など実際に英語をコミュニケーションの手段として使う活動が好きと答えた生徒が増えた。ビンゴなどのゲームのように使用する言葉が限られ、相手とのインタラクティブもあまりない活動に対し、これらの活動はより高度な知的作業と豊富な言語知識を必要とする。つまり、「チャレンジング」な活動である。前述の特に伸ばしたい英語の力がスピーキングとあげた生徒が増えているのとの関係があるだろう。本実践授業を通しコミュニケーションの大切さを実感することができ、積極的に自らのコミュニケーション力を試してみたいという積極的な姿勢が出来上がってきていることの表れである。

また、「ディベート学習を通じて英語運用能力以外のどういった力がついたと思いますか」(図13)という問いにおいては、「相手の言いたいことを推測する」や「コミュニケーション能力」「洞察力」などをあげている生徒が多く、「受験英語」

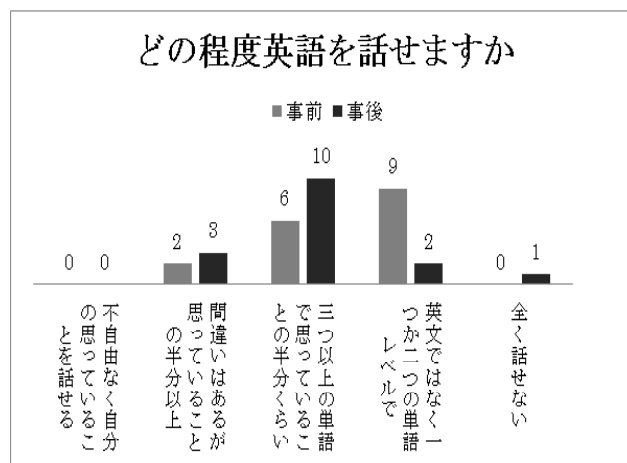


図10 アンケート結果4

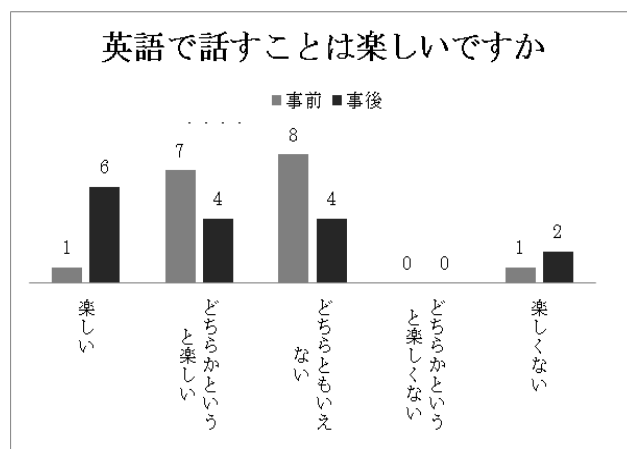


図11 アンケート結果5

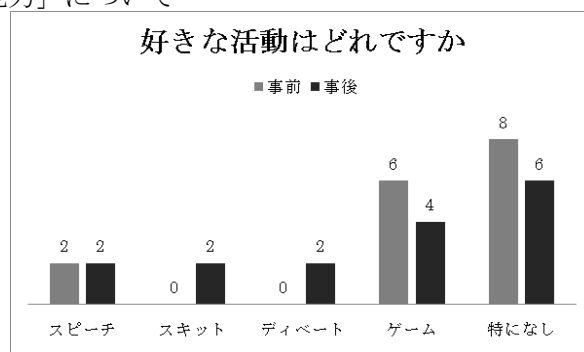


図12 アンケート結果6

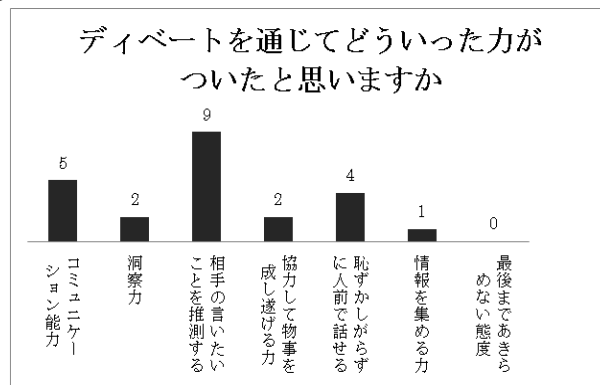


図13 アンケート結果7

ではない実際に現実世界で使われる「実戦的な英語」を使用するときに役立つ能力を身につけることができた実感していることがわかる。もちろん、「実戦的コミュニケーション能力」とはこれらの力そのものであり、本授業実践の仮説「生徒が学習を進める過程において、相手の意見を注意して聞き、自分の意見をまとめ発表するディベート等の体験的タスクを通し、実践的コミュニケーション能力を伸ばすことができるだろう。」を実証する成果の一つになるであろうと考える。

「英語でのディベート学習は英語の力をつけるのに効果的だと思いますか」(図14)という質問においては、12名が肯定的な意見を持っていた。しかし、4名はディベートが効果的ではないと答えている。大半が「効果的である」と答えているが、個人によってどういったものを「英語の力」と捉えているかが異なっているとも考えられ、アンケートの質問の仕方に課題が残ったともいえる。

同じように次の質問「またディベート学習をやってみたいと思いますか」(図15)においても、「やってみたい」「どちらかというをやってみたい」が12名いる一方、「やりたくない」が4名という結果となった。前述にもあるが、受験前であったということもあり、楽しんで活動していても受験が近づいているため授業は受験対策中心で進めて欲しいという声も聞こえ、そのことも影響しているかもしれない。

11 成果と課題

ディベート学習を始めとする様々な体験的学習を通して、実践的コミュニケーション能力を高めるというのが本授業実践のテーマであった。本授業実践において生徒たちは、教科書に載っている本文を音読練習したり、英語構文を暗記して言うなどという単純なスピーキング活動ではなく、現実に関心とインタラクティブしながら自然な会話をしたり、チームで協力して勝利を目指すというゲーム性も伴った討論学習であるディベート活動を行った。考察でも述べたように、これら活動を通して生徒たちの実践的なコミュニケーション能力は高まったであろうと考える。「自分の意見・考え・感想を言える」「会話を継続できる」「論理的に話ができる」「話題に関する質問やその応答ができる」「自分の持っている情報を第三者に伝えることができる」という実際に英語を使用してコミュニケーションを図っていく上で必要とされる力を実践を通して養うことができたのである。

課題は多く残る。中でも、こういったコミュニケーション学習形態といわれる「受験英語」指導を、どうやってうまく折り合いをつけるかというのは大きい問題であろう。語彙や文法事項等のインプットは豊富に与えられ、リーディングを中心とした問題には答えることのできる生徒が、スピーキングのアウトプットの場がなく、現実世界で英語話者と理解しあうために必要な実践的コミュニケーションを伸ばすことができていないのではないだろうか。二つ目の大きな課題は評価である。生徒間評価用にワークシートとして自己評価表と審査員による他者評価表を用意したが、評価項目や評価段階の工夫、教師用の評価表作成などさらに改善の余地があり研究を進めていきたいと考えている。また、この学習法は年間を通して各単元のまとめとして継続的に行うとさらに良い結果が期待できると考えている。年間計画や単元計画へ取り入れ方の工夫、さらにALTとのティームティーチングによる指導も効果的と思われるので、それらの研究も課題として研究していきたい。

IV まとめと今後の課題

本研究では、「英語による実践的コミュニケーション能力を高める指導の工夫 ― 体験・活用・参加型のタスク活動を取り入れて ―」をテーマに、スキットとディベートをとおして英語による実践的コミュ

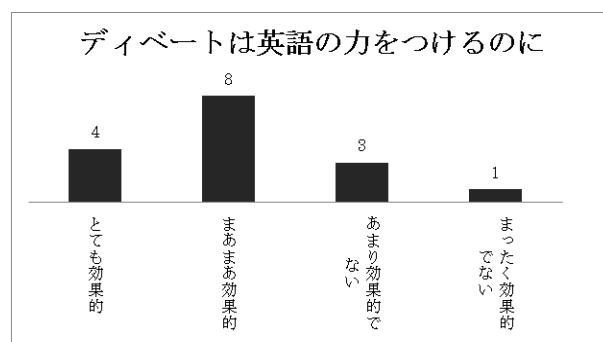


図14 アンケート結果 8

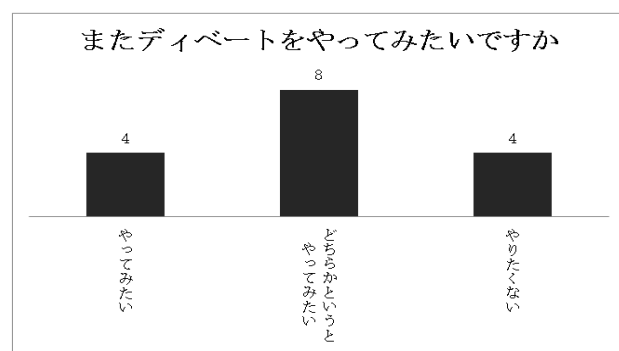


図15 アンケート結果 9

コミュニケーション能力の育成を目指して取り組んできた。その成果と課題をまとめる。

1 成果

- ・スキットとディベートというタスク活動をとおして、多くの生徒が授業に参加し、習得した言語材料を活用した言語体験に取り組むことができた。特に、これらの学習法は年間を通して各単元のまとめとして継続的に行うとさらに良い結果が期待できると考える。
- ・スキットやディベートの準備段階、あるいは実施段階で、既習の知識を生かしながら実際に目の前にいる相手と英語で会話をする、つまり言葉の意味・内容の交渉を行うことにより、文法能力という言語知識のみではなく、社会言語能力や談話能力、方略的能力といった言語運用力を包括する実践的コミュニケーション能力を育成することができたと考える。
- ・グループ、あるいはペアで協力しながら自作・自演のスキットやゲーム性のある討論学習でもあるディベート等のタスク活動を行うことにより、学習意欲をひきだす動機付けとなった。

2 課題

- ・教科書をとおして習得した言語知識や4領域の技能を活用し、実際の言語使用場面を考慮した活動を授業に取り入れていく工夫が必要である。
- ・教材観・生徒観によって「体験・活用・参加型の学習」に違いがでる上、それに対応した工夫が必要である。
- ・コミュニケーションな学習形態といわゆる「受験英語」指導の折り合いをうまくつけるための工夫が必要である。特に、年間計画や単元計画への取り入れ方の工夫、さらにALTとのチームティーチングによる指導も効果的と思われる。それらの研究が今後の課題として残る。

〈主な参考文献〉

青谷正妥 2005『英語の勉強力』 PHP

大和隆介 2004『英語教育』「導入期の指導：ストラテジーは使いながら身につけさせよう」大修館

長瀬荘一 1996「英語授業改革双書 No.8『コミュニケーション能力を育てる英語の授業改造』
明治図書

〈小学校外国語活動〉

コミュニケーション能力の素地をはぐくむ指導の工夫

— 英語ノートの単元「オリジナルの劇をつくろう」を通して —

* * * * * *
上 江 洲 隆 下 地 洋 子 幸 喜 め ぐ み

I テーマ設定の理由

グローバル化の進展と共に、経済的なつながりをはじめとして国際的な相互依存関係が深まり、環境問題など地球的規模の課題の解決に向けて、国際的な理解と協調が不可欠になっている。

中央教育審議会、外国語専門部会（平成18年）で審議された子どもたちの課題として、他者を理解し、自分を表現し、社会と対話するための言語コミュニケーション能力を育成することが挙げられ、グローバル化した時代を生きるために、異文化理解、自国文化を発信する力等を育てる視点の重要性を述べている。

さらに小学校外国語活動は中・高での英語教育につながるコミュニケーション能力の素地づくりをねらいとし、英語を活用して他者理解や自己表現する楽しさを実感させ、体験させる重要性も指摘している。

文部科学省は、小学生の柔軟な適応力を生かすこと、グローバル化への進展への対応、教育の機会均等の確保等の理由から、小学校外国語活動を新設した。

新学習指導要領では小学校外国語活動の目標として「外国語を通じて、①言語や文化について体験的に理解を深め、②積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、③外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーション能力の素地を養う。」と述べている。これはコミュニケーション能力の素地を養うことで中学校との連携を図るとともに、外国語を用いて積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に重点をおくこととしている。

平成20年度文部科学省「小学校英語活動実施状況調査」によると、英語活動を実施している全国の小学校は97.1パーセントである。本県は100%の実施率であるが、研究開発学校、構造改革特別区域研究開発学校、部分イメージン実施校、学校や地域により指導形態も多様である。

今後の課題として、前述の3つの目標を念頭においたバランスのとれた指導方法が求められている。このような中、文部科学省は児童の音声面での学習支援、指導方法改善を図る観点から、英語ノート及び教師用指導資料を作成、ICTの活用、テキストに準拠した音声・画像の教材や教具資料等を開発している。本研究では英語ノートの単元において、絵本を活用した、児童自ら参加するオリジナル劇づくりの授業実践を通して、指導方法の改善を図りたい。

〈研究仮説〉

英語ノートの単元「オリジナルの劇をつくろう」において、慣れ親しんだ絵本を活用して語彙や表現方法の習得や活用を図り、絵本の内容をロールプレイやスキット活動を通して児童一人ひとりが「参加する授業」を試み、習得した語彙や表現を活用してグループ毎にオリジナル劇を発表することでコミュニケーション能力の素地をはぐくめるであろう。

II 研究内容

1 コミュニケーション能力の素地をはぐくむとは

(1) 小学校段階におけるコミュニケーション能力の素地を養うとは

文部科学省、小学校外国語活動研修ハンドブックではコミュニケーション能力の素地を養うとは「コミュニケーション活動を通して、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ったり、言語や文化について体験的に理解を深めたりする活動を行う。」とある。小学校学習指導要領解説外国語活動編によると「コミュニケーション能力の素地を育成するためにはコミュニケーションへの積極的な態度を身に付けることが重要である。」と述べ、さらに「コミュニケーションへの積極的な態度とは、日本語と異なる外国語の音に触れることにより、外国語を注意深く聞いて相手の思いを理解しようとしたり、他者に対して自分の思いを伝えようとすることの難しさ

や大切さを実感したりしながら、積極的に自分の思いを伝えようとする態度などのことである。」と定義している。

そこで本研究では、英語ノート「オリジナルの劇をつくろう」の単元を活用して、児童同士が協力でき、活動そのものが自分の思いを伝えるコミュニケーション活動になるように場の設定を工夫する。児童はオリジナル劇の発表という体験的な活動を通して積極的に自分の思いを伝えようとするコミュニケーション能力の素地をはぐくみたい。

(2) 小学校外国語活動でのコミュニケーション能力について

村野井、千葉、畑中（2001）は日本人英語学習者にとっての外国語コミュニケーション能力は5つの能力より構成されるとした（表1）。

言語能力とは言語を理解する際に必要な文法能力や言語使用の際の談話能力、社会言語能力及び言語使用場面で言語を使用してコミュニケーションを機能させる機能能力を含む。すなわち、言語に関する知識とそれを理解・表現の面で使いこなす能力である。

要約すると、会話をするためには、まず習得した音声・語彙や表現及び文法で文を作成する文法能力が必要である。次に、作成した文章をつなげて会話にする談話能力で会話の幅を広げることができる。さらに場面や状況に合った会話をする社会言語能力及び情報伝達機能等コミュニケーションを円滑に進める機能能力等を包括する言語能力が必要になる。

その上に、社会の中で適切に言語を使用する論理的思考力や創造力、予測力、類推力である認知能力や世界の様々な事柄についての知識・考えはグローバル社会の中で、異文化の人々と交流する際に重要となる。その他にコミュニケーションが困難な場合に意思の疎通を図る言語的・非言語的方略としての方略的能力、相手の価値観や人間性を尊重する態度や姿勢を育成することで日本人外国語学習者がスムーズに他者とコミュニケーションが図れるとしている。

小学校外国語活動においては児童が習得できる語彙や表現は限られており、小学校段階でのコミュニケーション能力は外国語活動を通してまず、①異文化の価値観や人間性など人権尊重の態度や姿勢の育成を図ること。②身近なことを通して教科、横断的に世界のさまざまな事柄についての知識・考えを学ぶことで将来的に、人類共通の課題解決に寄与できると考える。そして、③児童の限られた言語能力を活用し、自分の思いを相手に効果的に伝えるための様々な方略を駆使して伝える、方略的能力の育成を図るという3つの視点で捉える。

(3) 絵本を活用したコミュニケーション能力の素地づくり

小学校外国語活動では、まとまりのある物語を聞いて、聞いた内容について考えたり、質問に答えたりといった活動はあまり多くない。そこで児童が慣れ親しんだ絵本の英訳版を活用した「聞くこと」の活動を授業に取り入れることで、児童も容易に絵本の内容が理解できる。いわゆる、理解可能なインプットとなり、児童の興味・関心も高まると考える。

児童はオリジナル劇づくりを通して、相手に自作の劇の内容を他の児童に、効果的に伝えようと工夫することで、方略的能力の向上が図られ、コミュニケーションへの積極的な態度の育成に繋がると考える。

コミュニケーションを図るためには、コミュニケーションを図るための語彙や表現の習得を図るためのインプット活動、習得した語彙や表現等を活用して、情報のやりとりがあるなどコミュニケーション活動を実際に体験させることが大切である。"Language is best taught when it is being used to transmit messages, not when it is explicitly taught for conscious learning" (Krashen & Terrell 1983) は伝えるメッセージの重要性について述べている。さらに Swain(1985)はアウトプットの重要性を述べ、Long (1996)はアウトプット活動における相互交流の重要性を説いている。Eliss & He (1999) は相互交流活動の中でも意味交渉を通してアウトプットさせる指導が最も効果的であると報告している。

小学校外国語活動におけるコミュニケーションの場面としては、教師と児童、児童同士、ALT と教師及び ALT と児童等が考えられる。本研究では単元計画全体を通してコミュニケーションの場の設定を図り、方略的能力を意識した児童へのインプット活動及びアウトプット活動の機会を増やしたいと考える。

児童はオリジナル劇を発表する際に、相手に伝えるためにボディーランゲージで説明したり、聞き手の知っている絵本の背景知識を活用して理解につなげたり、具体物を活用して、内容理解を図るための様々な工夫、つまり方略的能力を駆使して相手に思いを伝える努力をする。

表1 外国語コミュニケーション能力

1	Lanaguage Competence	言語能力
2	Strategic Competence	方略能力
3	Cognitive Abilities	認知能力
4	Real-World Knowledge/Thought	世界の様々な事柄についての知識・考え
5	Attitude	態度・姿勢 (価値観、人間性などを含む)

このように方略的能力が網羅され、効果的に相手に伝えるインプット活動の手段としてカナダイマージョン教師協会 (CAIT) より提示されているイマージョン教育指導法 (表 2) と MERRIER APPROACH (表 3) がある。それぞれが指導内容に応じて指導の工夫を図る際の指針となり、語彙や表現及び内容理解等を図る有効な指導法である。児童がオリジナル劇を発表する際にも有効である。

表 2 Instructional strategies in French Immersion (1995)

1	Extensive use of body language. (ボディーランゲージを多用して説明)
2	Predictability in instructional routines. (指導手順を固定化, 児童に次の活動を予測させる)
3	Drawing on background knowledge to aid comprehension. (背景知識を活用し, 理解につなげる)
4	Extensive use of realia, visual, manipulatives. (実物や具体物を視聴覚器具を多用する)
5	Review of previously covered material. (復習 (繰り返し) で基礎の確認, スパイラルで応用へ)
6	Building redundancy into the lessons. (必要なことは何度も繰り返す等授業に余剰性を持たせる)
7	Explicit teacher modeling. (はっきりとした教師のモデルをしめす)
8	Indirect error correction. (直接誤りを訂正せずさりげなく)
9	Variety of teaching methods and types of activities. (指導方法と活動の多様化を図る)
10	Use of clarification/comprehension checks. (理解の確認を適宜行う)

MERRIER APPROACHは1988年にKrashenのインプット理論に基づき、渡辺等 (1988) によって理解可能なインプットを与えるための指針として提案され、その後、渡辺、野澤、酒井 (1988) らによって修正された指導の指針の頭文字をとって名付けられたものである。絵本の読み聞かせの際の教師のインプット活動の指導にも有効であると考えられる。(表 3)

表 3 MERRIER APPROACHの教師が指導する際の7つの指針の定義 (2003)

指 針	定 義 と 内 容 の 説 明
1 Model / Mime 2 Example	身振り、表情、実物、視聴覚教材などの言語外情報を活用したり見本を示すこと。抽象的な内容を具体例に示すこと。(具体物の列挙、具体物を活用して抽象語を説明しイメージにつなげる、エピソードで説明、児童の知っていることと対照しながら話す)
3 Redundancy	同一の内容を別の発想で言い換えること。(様々な言語表現や発想で理解を容易にする工夫をする)
4 Repetition 5 Interaction	大切なことを繰り返すこと。(必要な内容は意図的に繰り返し使う) 学習者と相互交渉をすること。(学習しやすい雰囲気づくりや学びやすい手順の工夫等を行い学習者が発話しやすくする)
6 Expansion	学習者の発話を補強して繰り返すこと。(学習者情意フィルターに考慮して、目立った訂正をせず間違った部分を修正し、正しい文で復唱する)
7 Reward	学習者の反応に対して肯定的なコメントをすること。

MERRIER APPROACHによる7つのインプット活動の指針は絵本の読み聞かせの際の教師の指針として活用することで、児童も絵本の内容理解が容易に図られ効果的であると考えられる。

児童がオリジナル劇を発表する際には、①ボディーランゲージを多用して説明する、②慣れ親しんだ絵本の背景知識等を活用し、内容理解につなげる。③実物や具体物等を多用して説明する。④過去に学んだ語彙、表現を活用して新しい語彙や表現と結びつけた活動を行う。⑤内容を伝えるという目的がある。の5つの面からも絵本を活用した外国語活動は有効であると考えられる。

2 英語ノートの単元「オリジナル劇をつくろう」の活用について

伊藤嘉一(1981)は教科書が教材として優れている理由としてまず、学習者のレベルの考慮、適切な段階づけ、語彙選択への配慮、1年で消化できる編集、写真やイラスト等児童生徒の興味づけや動機づけのために考慮、多くの付属教材が整備、教師の使用に配慮、専門家の共同作業の産物である等を挙げている。

英語ノートは上記の内容を考慮して作成されており、優れた教材と言える。小学校外国語活動における英語ノートの活用に関しては、活動自体がコミュニケーションを伴う設定であることが必要となる。児童の身近にある内容で、自然に聞いたり、話したりできる場の設定が必要である。

本研究では英語ノートの単元「オリジナルの劇をつくろう」において、児童が慣れ親しんだ絵本である「A BIG TURNIP おおきなかぶ」を英語で読み聞かせ、その際に使用した語彙や表現を目標言語

として歌、チャンツでの音声練習及びクイズ等での絵本の内容理解を図る、さらに目標文を習得させるためのインターアクション活動を行い、習得した語彙や表現を活用して絵本の内容をロールプレイすることで英語表現に慣れさせたい。このように実際のコミュニケーションの場を多く設定することで児童が容易に取り組めるようにしたい。そして、グループ毎にオリジナル劇づくりを行うことで、今までに学んだ語彙や表現を活用し、積極的に思いを伝えようとする態度をはぐくみたい。

3 絵本を活用したロールプレイからスキット活動までの指導

英語ノートを活用した指導は、まず担任による ICT を活用した絵本の読み聞かせで始まる (図 1)。これは実物や具体物を ICT を通して提示することで児童は表示された画面を見ながら内容理解が図れる。

次に担任と ALT とで表示された絵本の内容を掛け合いながら読み聞かせることで、次の全体での掛け合い練習のモデルとなり、児童がさらに具体的なイメージが持てるようになる。絵本は児童がよく知っている内容なので、重要な語彙や表現は何度も繰り返し語彙や表現の定着を図る。

児童が絵本の内容、語彙や表現を理解した上で担任 ALT、児童とで掛け合いながら絵本を読む。本来なら新出語彙や表現を練習した後、目標文でコミュニケーション活動を行うが、絵本に出てくる表現や語彙も過去に読んだ日本語の内容と照らし合わせたり、絵を見ながら英語を聞くことで「A Big Turnip」が「大きなかぶ」であることも容易に理解できる。このように児童の身近な絵本を教材として活用することで児童は内容理解が容易に図られる。

単元の学習内容「家族・動物」を「A Big Turnip」の登場人物や動物と関連づけながら語彙や表現練習を行った後、「A Big Turnip」の内容をグループ毎にロールプレイで練習する。A Big Turnip のロールプレイをグループ毎に行う。そして登場人物を創作したロールプレイの練習を行った後、オリジナル劇の準備、作成を行い、各グループに分かれオリジナル劇の発表となる。このように単元をコミュニケーション活動を伴うタスクシラバスにすることで児童にも分かりやすい目標となる。



図1 オリジナル劇づくり指導

Ⅲ 指導の実際

実践事例 I 小学校の実践より うるま市立伊波小学校教諭
授 業 者 : 幸 喜 めぐみ

1. 題材名 「A Big Turnip (大きなかぶ)」の絵本を楽しもう。

2. 題材のねらい

児童になじみのある絵本の読み聞かせにより家族の名前を覚え、さらにその絵本の英語表現を使っての教師と児童との会話や劇づくりを通して、表現活動を楽しむことができる。

3. 題材設定の理由

(1) 題材について

児童は 5 年生までの学習で、家族や野菜、動物等の英語表現に慣れ親しんでいる。そこで、低中学年で慣れ親しんだ絵本を活用し、児童との言葉のやりとりを通して、会話に対する興味・関心を養わせ、家族や野菜、動物等の単語を多く使用した絵本 (「A Big Turnip」) を ICT を活用して読み聞かせる事で視覚、聴覚から慣れ親しんだ絵本の英語表現を理解できる。聞きとった英文と絵を関連させながら物語を聞かせ、その絵本に使用されている英語表現やこれまで学習した英語表現を、自分たちのオリジナル劇のなかで使用することで、英語を表現するアウトプットの基礎を培う。

(2) 児童について

本学級の児童は、全体的に、自分の感情を表現することが苦手である。また、自分から進んで発表する児童は限られている。外国語活動においては、担任、ALT の先生と年間 22 時間程度の英語活動を楽しんでおり、歌を歌ったり、ゲームをしたりと英語に対する興味・関心は高い。

外国語活動のアンケート結果から、「外国語活動の授業は楽しい。」「世界の国の人と友達になりたい。」という児童が多い。このことから、授業を楽しみにしていることがうかがえる。しかしながら、英語で話せるようになりたい反面、「英語で発音して間違えたら恥ずかしい。」「意味がわからない。」「大きな声で発音できない。」という児童もいる。そこで、外国語活動にグループ活動を取り入れることは、児童がより安心感を持って意欲的にコミュニケーションを図ろうとする態度が育つであろう考える

4. 指導計画（8時間）

時	学 習 内 容	単語・英語表現	評 価 基 準
1	○絵本の読み聞かせ（ICT） ○絵本の読み聞かせ （HRTとALTが読み聞かせる） 「A Big Turnip」 ○6月の学習内容「家族・動物」 の名前を聞いてわかる。	・ "A Big Turnip" pull ・ "Please help me (us)" granpa, grandma, girl, dog, cat, mouse "What's the matter?" "Look at this"	★慣れ親しんだ絵本の内容を英語で聞いても理解できる【理】 ★絵本の内容を推測しながら聞こうとする【関】 ★人・動物を表す単語を聞いてわかる【理】
2	○登場する人・動物名使用する英文の確認 ○絵本の読み聞かせ （HRTとALTが読み聞かせる） 「A Big Turnip」 （HRT(ALT)と児童で掛け合う） ○6月の学習内容「人・動物の名」を表す言葉を覚える。	・ "A Big Turnip" "Please help me." "Please help us." "What's the matter?" "Are you ready?" big, small, turnip, gran-pa, gran-ma, dad, mom, girl, dog, cat, mouse, help, ,	★使用する語彙に気をつけながら、聞こうとする【関】 ★単語や文章を聞いて音声化しようとする【表】
3	○絵本の読み聞かせ （HRT(ALT)と児童で掛け合う） 「A Big Turnip」 ○「A Big Turnip」を参考に自作絵本を作成し、絵本の内容をロールプレイで練習する。 ○自作絵本でロールプレイの発表をグループ毎に行う。	"A Big Turnip" "Please help me." "Please help us." "What's the matter?" "Are you ready?"	★絵本を参考に自作の登場人物やストーリーを工夫している。【表】 ★絵本で使用している単語や文章を理解し、復唱することができる。【理】
4 5	○絵本の読み聞かせ （効果音の入ったCDを聞かせる） ・ 「Brown Bear, Brown Bear ～」 ○「登場人物を創作してロールプレイ」の練習を行う。	"Brown Bear, Brown Bear ～." "I see a yellow duck looking at me." "What color is this?" "It's purple" red, blue, green, brown, yellow, etc... "What shape is this?" "It is triangle" square, rectangle, oval, star, circle...	★絵本参考に自作の登場人物やストーリーを工夫している。【表】 ★絵本で使用している単語や文章を理解し、復唱することができる。【理】
6 7 8 本時	○オリジナル劇の準備・作成 ・ ○オリジナル劇の作成 ○オリジナル劇の発表 ・ ⑧ ・各グループに分かれオリジナル劇の発表を行う（第8時）	"A Beautiful butterfly" "I want to be a beautiful butterfly."	★グループで協力して発表できる。【表】 ★友達の発表を理解し、静かに聞く事ができる。【理】

5. 本時の展開（8／8）

(1) 本時のねらい

- グループで協力して、習った英語表現を活用したオリジナル劇（英語劇）の発表ができる。
- 友達の発表を理解し、静かに聞くことができる。

(2) 授業仮説

英語ノートをもとにして自作のお話を作成し、そのお話を基本とした英語劇を創作し、発表させることにより、これまで培った語彙や表現を活用して積極的に表現しようとする態度が培われるだろう。

(3) 言語材料（本時）

A : "What's the matter? " B : " Please help me(us) " C : "Are you ready? " 過去に学習した表現

(4) 準備

- ・ICT（コンピュータ・スクリーン・プロジェクター）
- ・必要に応じてオリジナル劇用衣装，大道具，小道具等

(5) 本時の展開

過程	児童の活動と内容	教師の支援		★評価 ☆留意点 △教具
		HRT	A L T (いない時は削除)	
導入	〈Greeting & Warm-up〉 1. あいさつをする 曜日，天気，気分など 2. 歌を歌う。 Clap your hands	○ Greetings ・ Good morning ! ・ How are you today ? ○ Let's sing a song. ♪ Yo-heave-ho! ♪	○ Greetings	☆元気よく ☆大きな声で
展開	〈Review〉 3. 絵本の読み聞かせを聞く。 〈Activity〉 4. 学習のめあてを確認 5. 各グループでオリジナル劇の練習を行う。 (1) ぶたごりらグループ 題名「まったりろ」 (2) トレジャーハンターズ 題名「たからさがし」 (3) やまあーずグループ 題名「Don't give up.」 (4) 虫大好きキッズグループ 題名「大きなカブトムシ」 (5) 正義のヒーローグループ 題名「リジェン」 (6) セブンガールズグループ 題名「今日の授業」 児童は評価カードで各グループのオリジナル劇を評価する。 6. 進んでいるグループが発表を行い，他のグループは自分達の参考にする	○ It's story time. ○ "A Beautiful butterfly?" ○ めあての確認 ○ 発表順に沿ってオリジナル劇の発表をさせる ○ 児童の支援・誘導をする。	○ HRT と一緒に絵本の読み聞かせを行う。 Read story to students. ○ The students know today's goal. ○ 児童の支援・誘導をする。 Help students to prepare skits.	△ ICT △小道具 ★グループで協力して発表できる【表現】 ★友達の発表を静かに聞くことができる。【理】
まとめ	〈Wrap-up〉 6. 学習のまとめをする。 (評価カードをもとに発表する) ・おわりのあいさつ	○今日の学習のまとめをする。(劇に関する教師のフィードバック) ○終わりのあいさつをする。	○今日の学習のまとめをする。(練習や発表に関するコメント) ○終わりのあいさつをする。	★グループで協力して活動できたか（ふりかえりカード）【関】

(6) 評価

- グループで協力して、劇を創作し、積極的に活動できたか。
- これまでに習得した英語表現を使用したオリジナル（英語劇）を発表することができたか。
- 友達の発表を理解し、静かに聞くことができたか。

(7) 本時の評価

本時の評価は、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」・「表現の能力」・「理解の能力」を評価する。その際の判断の状況として、A「十分満足できる」、B「概ね満足できる」、C「支援・手だてが必要」とし、Cの欄には、具体的な支援や手だてを記述する。

観 点	活動内容	評価規準	判断基準		
			十分満足 A	概ね満足 B	(c)への手立て
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	○オリジナル劇を工夫して観客を楽しませたりしてコミュニケーションを楽しんでいる。	☆身近な英語表現を聞いたり、簡単な会話表現を使って英語で表現することを楽しんでいる。	★大きな声で発音したり、体を動かしながら表現することができる。観客も楽しんでいる。	★声を出して発表したり、リズムにのって表現することができる。	★声を出したり、体を動かすことに照れを感じる子には、声かけをしながら教師も一緒に体を動かす。
表現の能力	○習った英語表現を活用したグループで協力して発表する。	☆簡単な英語表現を使って自分の思いを表現する。	★発表会で大きな声で英語で表現したり、進んでいろいろな表現をすることができる。	★発表会で自分の台詞を声に出して言ったり、友達と一緒に表現することができる。	★一緒に英語表現や動作などを考えたり、側と一緒に表現する。
理解の能力	○友達の発表を理解し静かに聞こう。	☆新しく習った単語や英語表現、友達の英語を聞くことができる。	★発表する人に体を向け、相手の伝えたい内容を理解することができる。	★発表する人に注目し、絵本の絵や話す人の動作の助けを借りて話を理解することができる。	★何をしているか理解できない子には、優しい英語表現に言い換えたり、動作で伝えさせる

(8) 評価の方法

評 価 の 観 点	
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	○行動観察 ・あいさつや返事の様子 ・聞く態度 ・表情や反応 ・歌や発音練習 ・ゲームへの参加態度（ビデオ等） ○ふりかえりカード
表 現 の 能 力	○行動観察 ・あいさつや返事 ・聞く態度 ・発話や発表の活動の様子 ○ふりかえりカード ○ワークシート ○個別での面接
理 解 の 能 力	○行動観察 ○感想やワークシート

(9) アンケート結果より

① オリジナル劇づくりに関する情意面に関するアンケート調査

ア オリジナル劇作り前後にアンケート調査を実施した。「英語は好きですか」の質問に対して「好き、好きな方だ」と肯定的に答えた児童が 69 %から 84 %と 15 %増加した。(図 2)

グループで協力して活動したことで多くの児童は心理的にも抵抗なく、楽しんで授業に参加していたことが伺える。さらにオリジナル劇づくりという難しい課題を達成したことによる成就感から英語が楽しいと感じ肯定的に回答したと考えられる。

イ オリジナル劇づくりという課題を通して発表する場を設定することに関して 74 %の児童が肯定的に回答している。6 月と比較すると 35 %の大幅な増加となった。課題を与え児童同士が協力し、発表する場を設定した授業は児童の話す意欲につながるということがわかった(図 3)。

ウ オリジナル劇を英語で発表することに関する肯定的な回答は 26 %から 55 %と 29 %増加した(図 4)。

恥ずかしいという意志から発表することに躊躇していた児童も、グループ活動を通すことで否定的に回答していた約 3 割の児童が、発表することが好きと変容した。今後発表の場を多く設定することで児童の発表することに対する意欲もはぐくめると考える。

エ グループでオリジナル劇を発表することに関しては当初クラスの 4 割が肯定的、6 割が否定的な回答であった。しかし、実際にグループでオリジナル劇のシナリオを作成し演技することで、グループで協力して課題を達成する喜び等の成就感から 39 %から 87 %と 48 %の児童がグループでの発表を肯定的にとらえるようになった(図 5)。

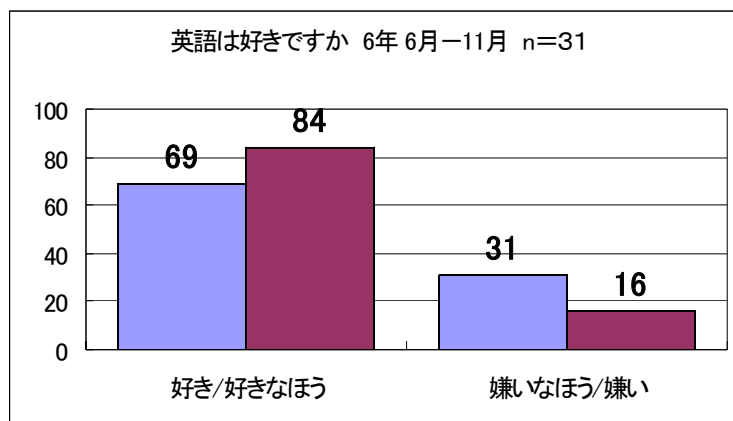


図 2 英語は好きですか

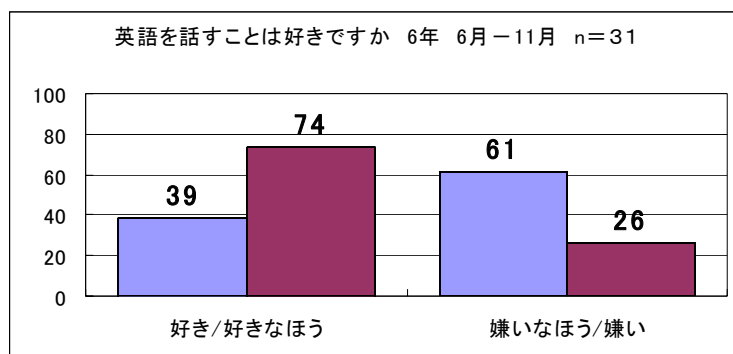


図 3 英語を話すことは好きですか

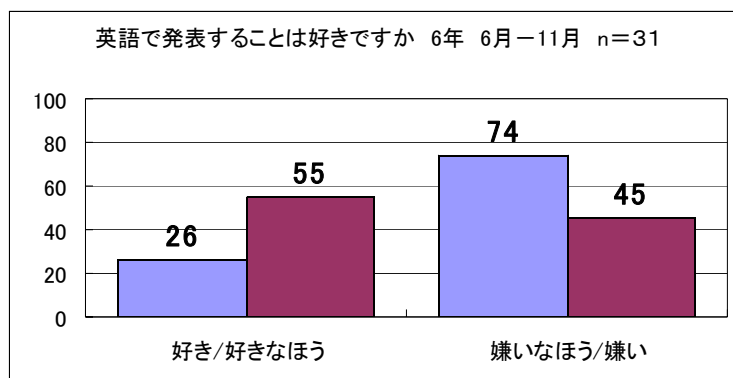


図 4 英語で発表することは好きですか

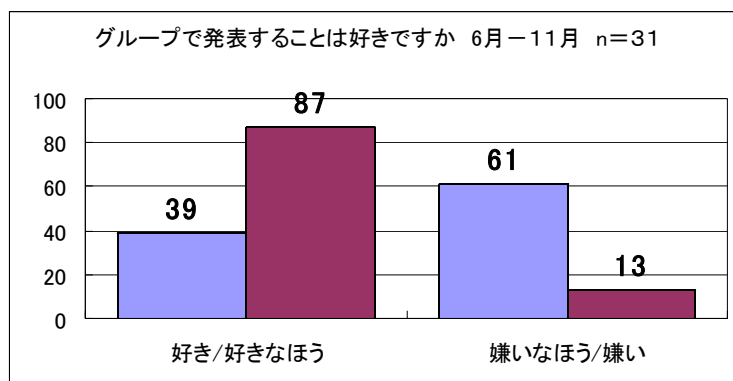


図 5 グループで発表することは好きですか

1. 題材名 「A Big Turnip (大きなかぶ)」の絵本を楽しもう。

2. 題材のねらい

児童になじみのある絵本の読み聞かせにより家族の名前を覚え、さらにその絵本の英語表現を使っての教師と児童との会話や劇づくりを通して、表現活動を楽しむことができる。

3. 題材設定の理由

(1) 題材について

児童は5年生までの学習で、家族や野菜、動物等の英語表現に慣れ親しんでいる。そこで、低中学年で慣れ親しんだ絵本を活用し、児童との言葉のやりとりを通して、会話に対する興味・関心を養わせ、家族や野菜、動物等の単語を多く使用した絵本(「A Big Turnip」)をICTを活用して読み聞かせる事で視覚、聴覚から慣れ親しんだ絵本の英語表現を理解できる。聞きとった英文と絵を関連させながら物語を聞かせ、その絵本に使用されている英語表現やこれまで学習した英語表現を、自分たちのオリジナル劇のなかで使用する事で、英語を表現するアウトプットの基礎を培う。

(2) 児童について

全体的に、児童の英語活動に対して興味・関心は高く、アンケートの結果からも70%の児童が英語の授業が好きだと答えている。授業の中では、簡単な日常のあいさつに答えることができ、また、カードやビンゴ等の英語ゲームにも積極的に参加する子が多い。しかし、実際に英語を話す、英語で発表する事に関しては、半数の児童が、「発音が難しい、間違えたらはずかしい」等々、人前で英語を話す事への苦手意識が強い。しかし逆に児童の中には、「話せると楽しい、話せるようになりたい」と思っている児童も多く、話す事への願望も強い事も確かである。

つまり、英語で表現することは楽しいしやってみたいが、人前で、ましてや英語でとなると尻込みする児童も多い。

そこで、本時では、慣れ親しんだ絵本の内容を基に自分たちでオリジナル化し、グループで協力しながら、楽しく表現活動ができるようにしたい。

4. 指導計画 (7時間)

時	学 習 内 容	単語・英語表現	評 価 基 準
1	○絵本の読み聞かせ (ICT) ○絵本の読み聞かせ (HRT と ALT が読み聞かせる) 「A Big Turnip」 ○6月の学習内容「家族・動物」 の名前を覚える。	・ "A Big Turnip" pull ・ "Please help me(us)" gran-pa, grandma, girl, dog, cat, mouse "What's the matter?" "Look at this"	★慣れ親しんだ絵本の内容を英語で聞いても理解できる【理】 ★絵本の内容を推測しながら聞こうとする【関】 ★人・動物を表す単語を聞き
2	○登場する人・動物名使用する英文の確認 ○絵本の読み聞かせ (HRT と ALT が読み聞かせる) 「A Big Turnip」 (HRT(ALT)と児童で掛け合う) ○6月の学習内容「人・動物の名」を表す言葉を覚える。	・ "A Big Turnip" "Please help me." "Please help us." "What's the matter?" "Are you ready?" big, small, turnip, gran-pa, gran-ma, dad, mom, girl, dog, cat, mouse, help, ,	★使用する語彙に気をつけながら、聞こうとする【関】 ★単語や文章をを聞いて音声化しようとする【表】
3	○絵本の読み聞かせ (HRT(ALT)と児童で掛け合う) 「A Big Turnip」 ○「A Big Turnip」の絵本の内容をロールプレイで練習する。 ○「A Big Turnip」の絵本での口	"A Big Turnip" "Please help me." "Please help us." "What's the matter?" "Are you ready?"	★絵本参考に自作の登場人物やストーリーを工夫している。【表】 ★絵本で使用している単語や文章を理解し、復唱すること

	ールプレイの発表をグループ毎に行う。		ができる。【理】
4 5 6	○絵本の読み聞かせ (HRT(ALT)と児童で掛け合う)「A Big Turnip」 ・○「登場人物を創作してロールプレイ」の練習を行う。 ○「A Big～」のオリジナル劇の作成。	"Please help me." "Please help us." "What's the matter?" "Are you ready?"	★絵本参考に自作の登場人物やストーリーを工夫している。 【表】 ★絵本で使用している単語や文章を理解し、復唱することができる。【理】
⑥ 本 時 7	○オリジナル劇の準備・作成 ○オリジナル劇の発表 ・各グループに分かれオリジナル劇の発表を行う (第7時)		★グループで協力して発表できる。【表】 ★友達の発表を理解し、静かに聞く事ができる。【理】

5. 本時の展開 (6/7)

(1) 本時のねらい

○グループで協力して、習った英語表現を活用した劇(英語劇)の練習ができる。

○友達の発表を静かに聞き、良さに気づくことができる。

(2) 授業仮説

英語ノートをもとにして自作のお話を作成し、そのお話を基本とした英語劇を創作し、発表させることにより、これまで培った語彙や表現を活用して積極的に表現しようとする態度が培われるだろう。

(3) 言語材料 (本時)

A: "What's the matter?" B: "Please help me(us)" C: "Are you ready?" 過去に学習した表現

(4) 準備

- ・ICT (コンピュータ・スクリーン・プロジェクター)
- ・必要に応じてオリジナル劇用衣装、大道具、小道具等

(5) 本時の展開

過 程	児童の活動と内容	教 師 の 支 援		★評 価 ☆留意点 △教 具
		H R T	A L T (いない時は削除)	
導 入	〈Greeting & Warm-up〉 1. あいさつをする 曜日, 天気, 気分など 2. 歌を歌う。 Clap your hands	○ Greetings ・ Good morning ! ・ How are you today ? ○ Let's sing a song. ・ 一緒に歌って踊る。	○ Greetings	☆元気よく ☆大きな声で
	〈Review〉 3. 絵本の読み聞かせを行う。(Big Turnip) ・ 提示画面に従い一緒に読む。 〈Activity〉 4. 各グループでオリジナル劇の練習を行う。 「A Big ○○○」	○ It's story time. ○ "What's the matter?" "Please help me(us)" "Are you ready?" など基本となる表現を繰り返し練習する ○オリジナル劇の発表の練習をさせる。 ○各グループを回り、児童の支援・誘導をする。 ○基本となる表現がきちんと	○ HRT と一緒に絵本の読み聞かせを行う。 ○各グループを回り、児童の支援・誘導をする。 ※児童の質問に答えたり、興味関心に応じて新しい表現や発音などに対応したり	△ ICT △評価カード △自作お話のワークシート ★グループで協力して練習し、発話

	評価カードで観点に基づいて自分達の出来を評価する。	使えているか確認する。 ○観点に基づき各グループに評価を返しながら支援を行う ○練習の様子を見て発表するグループを決めておく ○聞き方に注意させる	する。 ○必要に応じて発表の支援を行う	できる 【表現】 ★友達の発表を静かに聞き、良さに気づくことができる。【理】
まとめ	〈Wrap-up〉 6. 学習のまとめをする。 (カードをもとに自己評価) ・おわりのあいさつ	○今日の学習のまとめをする。(劇に関する教師のフィードバック) ○終わりのあいさつをする。	○今日の学習のまとめをする。(練習や発表に関するコメント) ○終わりのあいさつをする。	★グループで協力して活動できたか(自己評価カード)【関】

(6) 評価

- グループで協力して、劇を創作し、積極的に活動できたか。
- これまでに習得した英語表現を使用したオリジナル(英語劇)を発表することができたか。
- 友達の発表を静かに聞き、良さに気づくことができる。

(7) 本時の評価

本時の評価は、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」・「表現の能力」・「理解の能力」を評価する。その際の判断の状況として、A「十分満足できる」、B「概ね満足できる」、C「支援・手だてが必要」とし、Cの欄には、具体的な支援や手だてを記述する。また、教師の評価カードを基に「評価を児童に返す」ことで、児童の主体的な学習活動を促していくようにしたい。

観 点	活動内容	評価規準	判断基準 (評価基準)		
			十分満足 A	概ね満足 B	(c)への手立て
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	○自分の考えを述べたり相手の考えを受けたりしながら、協力してオリジナル劇をつくる。	☆身近な英語表現を聞いたり、簡単な会話表現を使って英語で表現することを楽しんでいる。	★友達同士やH R T・A L Tと関わりながら英語表現や身体表現を考え、劇化のための練習をしている。	★グループで話し合いながら楽しく、おもしろそうな表現方法を考えている。	★声を出したり、体を動かすことに照れを感じる子には、声かけをしながら教師も一緒に体を動かす。
表現の能力	○習った英語表現や新しい英語表現、身体表現などをとり入れたりしながら、グループで協力して劇をつくる。	☆簡単な英語表現を使って自分の思いを表現する。	★習った英語表現を基に、新しい英語表現や身体表現を採り入れながら、劇をつくっている。	★自分の台詞や役割を考え、自分なりの表現方法を工夫して、劇化の練習をしている。	★一緒に英語表現や動作などを考えたり、側と一緒に表現してあげる。
理解の能力	○既習事項を想起して劇化の流れを把握し、これまでの表現を基にしながら、工夫を加えた劇をつくる。	☆新しく習った単語や英語表現、友達の英語を聞くことができる。	★劇の場面に合った適切な英語表現や身体表現の方法を考え、練習している。	★既習事項の基本の英語表現をつかって劇化の練習をしている。	★何をして良いのか分らない児童には、優しい英語表現に言い換えさせたり動作で伝えさせる

(8) 児童の行動の変容(授業者の反省より)

① これまでの外国語活動の状況

- ア 新学期当初の英語活動では、ゲーム的要素の強い活動では盛り上がる傾向が強かった。これは外国語活動そのものの楽しさや盛り上がりよりも、ゲームが楽しいという印象であった。
- イ 英語表現の際には、自主的に発表する児童より、教師が指名して発表することが多かった。発表の際にも声が小さくて聞き取れなかったり、自信がなさそうに発声する子が多かった。

② 授業を通しての児童の様子について(1学期)

- ア 初めてのスキットにおけるグルーピングでは、1グループの構成人数を指定しただけで後は、お互い気の合う仲間同士で自由にグループが編制された。
- イ 学年最初のスキットという事もあって、仲間と一緒に話し合ったり考えたりしながら、おもしろくスキットをつくりたいという姿勢がよく見られた。
- ウ 発表の際、普段から発表している児童は、堂々と発表し、声を大きく出して表現することができた。しかし、声が小さかったり曖昧な発音や表現で終わったりする児童もいた。学年最初のスキットにしては、課題を残しつつも比較的上手くいったと感じた。

③ 授業を通しての児童の様子について(2学期)

- ア 1学期のスキットを基にして、オリジナル劇をつくることを告げ、グループ編制を行うことにした。最初のスキットと同じ構成メンバーで行うであろうと予測したが、児童は意外にも全員が別のひととやりたいとのことであった。これは、メンバーが替わることで新しい発想や表現のおもしろさがあるのではないか、新しい人との関わりがおもしろそうといった声が聞こえてきたのである。児童らには、外国語を用いて進んでコミュニケーションしようという意欲が育ってきている事を実感した瞬間であった。

(9) 評価の工夫について

- ① 児童の活動を支援するために、評価カードを作成した。話し合いへの参加、声の大きさ、身振り手振りや体全体を使った表現ができているかといった具体的な評価項目を設定し、これを帯グラフ化させてグラフ(評価)が動くように工夫した。児童の活動過程をリアルタイムに評価し、その評価をすぐ児童に返すことで自分達グループの課題を把握させ、めあてを持たせたより良い活動を促す目的からであった。
- ② 実際の活用場面では、教師の評価を意識し、評価の低い観点についてはグループの仲間同士で声をかけ合い、改善していこうとする態度がどのグループでも見られた。
- ③ 課題が克服され、評価が上がった場合は喜びを声に出しながら、楽しく活動を進めていく姿も多く見られた。
- ④ わからない英語表現を問う場合の「How do you say ~?」を教えることで児童はALTやHRTに積極的に質問し、意欲をもって楽しく活動している姿が多く見られるようになっていった。

(10) 授業後の児童の様子

- ① 検証授業終了後の授業では、当初、指名しても発表に関して消極的な児童や声が小さかった児童が教師の指名に反応して、発表したり聞き取れる声で発声したりできるようになってきた。
- ② あまり人前に出たがらない児童が、自分たちの発表が上手いかなかった時に再挑戦を申し出るなど、内向的であった児童が意欲を持って活動するようになった。

(11) オリジナル劇づくりを通しての成果

- ① スキット活動を通して、表現することの楽しさを味わった
- ② スキット活動を通して友達との関わりの中で学習するグループ学習や有効であった。
- ③ 英語という異文化の言語を用いて、自分たちが伝えたい事を工夫して表現し、それらを伝えることができた。
- ④ 協力して表現できた達成感が児童一人一人の自信へとつながったと考える。

IV 仮説の検証

1 事前と事後のアンケート調査結果より

「英語は好きですか。」という問いに対して授業前と授業後における調査結果を比較してみると、肯定的に回答した児童は事前70%から事後87%と17%上昇した。これは絵本の読み聞かせから、ロールプレイ、スキット活動と一連の段階的な指導によるオリジナル劇の作成は、児童に身近な絵本を活用して英語で発表したことで児童の自信につながり英語に対する学習意欲を高めたと考えられる。(図6)

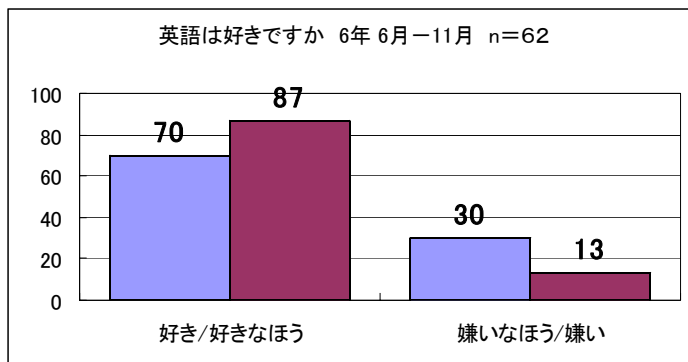


図6 英語への興味や関心

2 英語を使うことについて

「英語で話すことは好きですか」という質問に対して授業前は42%の児童しか肯定的な意見がなかったが授業後のアンケート調査では73%と31%上昇した。指導の際に児童が習った語彙や表現を使用する場の設定を図ったことが理解につながりスムーズに発表出来たことが自信となり話すことに肯定的な回答につながったと考えられる(図7)。

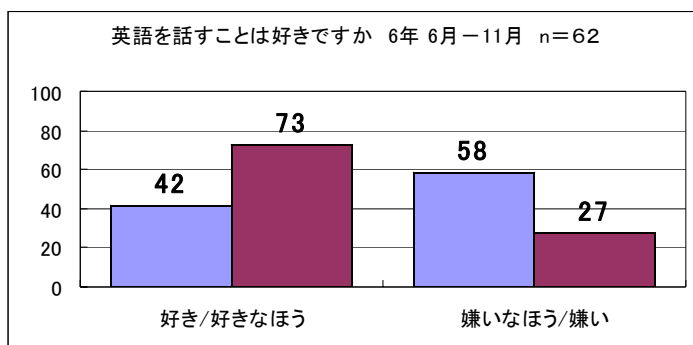


図7 英語を使うことについて

3 英語での発表について

「英語で発表することは好きですか」という質問に対して授業前は42%の児童しか肯定的な意見がなかったが授業後のアンケート調査では73%と31%上昇した。

これは当初、劇を発表することに抵抗のあった児童もインプット活動やアウトプット活動の工夫で理解が深まり、さらにグループ活動で取り組み易くなりスムーズに発表出来たことが大きな自信になったと考えられる(図8)。

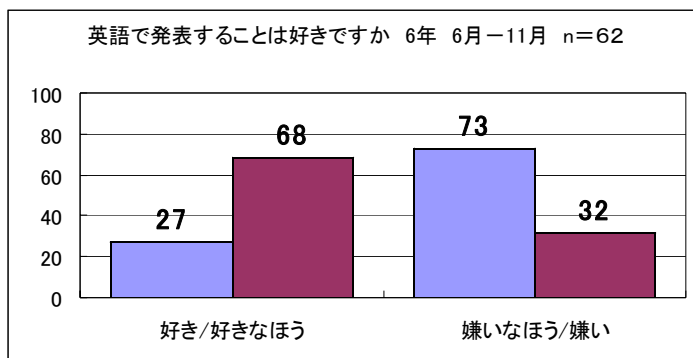


図8 英語での発表について

4 グループでの発表について

グループ毎に工夫して作成したオリジナル劇の発表は、これまで発表することが苦手だったり、英語が苦手だった児童にも効果的であった。

グループごとに発表することで、児童が全員オリジナル劇づくりに参加することができた。グループ活動の中で児童一人ひとりの個性や独創性を発揮し、柔軟な発想力で絵本の内容をアレンジしていた。

また絵本の内容説明にICTを活用することで児童が絵本の内容を容易に理解し、語彙や表現の習得活用につながり、効果的な発表につながったと考えられる。

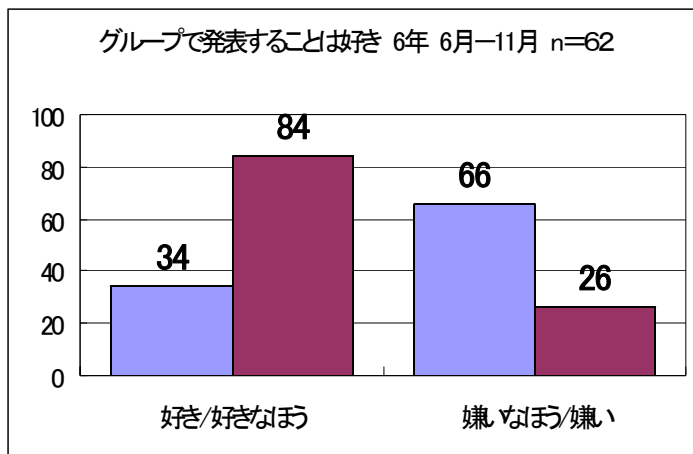


図9 グループでの発表について

5 劇づくりに対する興味・関心について

オリジナル劇の単元前とオリジナル劇作成後のアンケート調査によると、劇づくりに肯定的な児童と否定的な児童はそれぞれ約5割程度であった。

実際にオリジナル劇づくり後では約9割近くの児童が劇づくりが好きと肯定的な回答になっている。

このことはオリジナル劇を作成する手順が児童にとって理解しやすく、グループで取り組むことで様々なアイデアを共有できたことが考えられる。また、各グループの児童の英語力にあった取り組みが可能であったことも挙げられる。言語だけでなく、相手に伝えるために絵を描いたり、大道具や小道具などの具体物を作成したりするなど工夫していた。さらにジェスチャーや大きな声、表情等伝えるための努力をしてグループが高い評価得ていたことも印象的であった

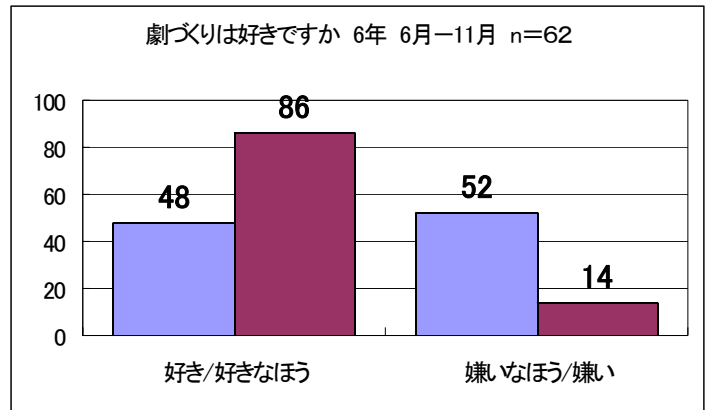


図9 劇づくりに対する興味や関心

5 オリジナル劇づくりについて

事後の調査でオリジナル劇づくりが楽しかったと肯定的に回答した児童は90%いた。オリジナル劇の単元は児童の興味や関心を持たせ、グループで協力して発表することで英語を使用して発表するという心理的不安感を軽減できたと考える

児童一人ひとりが参加する授業づくりは、児童の持つ個性を引き出し、グループ活動を通して、アイデアを共有し、発表後の成就感から肯定的にと回答した児童の増加につながったと考える。

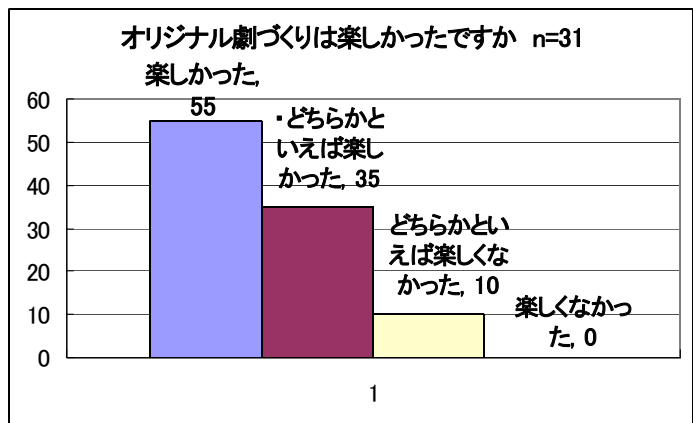


図10 オリジナル劇づくりについて感想

V まとめと今後の課題

1 成果

- ・グループで協力して作成したオリジナル劇づくりを通して、児童は積極的にコミュニケーションしようとする態度がはぐくまれつつあり、コミュニケーションの能力の素地づくりに有効であった。
- ・オリジナル劇の作成を通して学んだ語彙や文を表現する場の設定が図れたことで児童の意欲が高まった。
- ・オリジナル劇の発表は児童が表現する楽しさを感じ、工夫して発表することで、方略的能力の基礎づくりに有効であった

2 課題

- ・各学校で年間計画が作成され、それに基づいて授業が実施されており、英語ノートの効果的な導入事例が少なく今後は年鑑指導計画との関連づけての指導の工夫が必要である。
- ・ICTを活用した絵本の導入は児童の内容理解に有効であったが、今後はその他の絵本を活用した教材開発を図る必要がある。

〈主な参考文献〉

- 文部科学省 2008 『小学校学習指導要領』
 文部科学省 2008 『小学校外国語活動研修ガイドブック』
 渡邊時夫監修 2003 『英語の使える日本人の育成』 三省堂

おわりに

教科研研修班では班長及び主任を含む9名のメンバーで、班内共同研究会議を毎週実施し調査研究を進めてきた。今年度研究が行われた6教科においては、9名の小・中・高校の先生方に研究協力員として参加していただいたことにより、課題解決のためのより実践的な研究を進め、教科の検証授業を実施して仮説の検証を有効に行うことができた。教科研研修班の統一テーマをもとに各教科の特性を生かしたテーマを設定し、達成目標を掲げて研究に取り組んだ結果、児童生徒の可能性を引き出し、学力の向上を図る実践事例を提示することができた。

1 成果

- ・教科研研修班では「児童生徒の可能性を引き出し、学力の向上を図る取り組み」という研究テーマのもと、各教科で実践的な研究を進めた結果、児童生徒が意欲的で主体的な態度で授業に取り組む学習活動が展開されたことから、児童生徒の可能性を引き出す授業改善の具体的で実践的な授業実践事例を提示することができた。
- ・各教科の特性を生かし、「言葉と体験」をキーワードにした「体験・活用・参加型」の授業づくりを研究した結果、既習の知識や技能と習得した知識や技能を活用する言語活動を授業の中に取り入れ、言語体験が図られたことで、体験・活用・参加型授業の実践事例を提示することができた。
- ・研究に取り組んだ6教科全てにおいて、学力の向上を図るための取り組みとして、具体的な実践事例を提示することができた。

2 課題

- ・学校現場のニーズや生徒の実態に応じて、「体験・活用・参加型」の授業を年間指導計画や、単元指導計画の中に取り入れる工夫等継続的に研究する必要がある。
- ・学力の向上を図る取り組みとして、「体験・活用・参加型」の授業の展開の手立てについては教材や生徒の実態を考慮した工夫が必要である。

教科研研修班 班内共同研究組織

○班内共同研究員

班 長	我那覇 念
主任指導主事	吉 浜 幸 雅
指導主事	瑞慶山 昇（調査研究統括担当）
研究主事	上 地 廣 子（高校国語）
指導主事	真栄田 義 光（高校公民）
指導主事	島 仲 利 泰（高校数学）
指導主事	比 嘉 正 央（高校保健体育）
指導主事	上江洲 隆（高校英語）
研究主事	上江洲 隆（小学校外国語活動）

○研究協力員

沖縄県立普天間高等学校	教諭	島 田 聖 子（高校国語）
沖縄県立小禄高等学校	教諭	照 屋 民 子（高校公民）
沖縄県立那覇国際高等学校	教諭	天 久 晴 令（高校数学）
沖縄県立名護商工高等学校	教諭	安 田 盛 也（高校保健体育）
沖縄県立石川高等学校	教諭	大 城 浩 二（高校保健体育）
沖縄県立球陽高等学校	教諭	平 良 学（高校英語）
沖縄県立西原高等学校	教諭	島 田 純（高校英語）
北中城村立北中城小学校	教諭	下 地 洋 子（小学校外国語活動）
うるま市立伊波小学校	教諭	幸 喜 めぐみ（小学校外国語活動）